

京都府立大学自己点検・評価年次報告書 2007

京都府立大学
自己点検・評価年次報告書 2007

— 目 次 —

巻頭言

- ・ 京都府立大学自己点検・評価年次報告書 2007 の刊行にあたって
自己評価委員会委員長 大田 直史 …………… 1
- ・ 「自己点検・評価年次報告書 2007」発行に際して
学長 竹葉 剛 …………… 2

第 1 部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える（6）

- ① 第三者評価に向けた取り組み
第三者評価委員会副委員長 築山 崇 …………… 3
- ② 外部評価に向けた取り組み
自己評価委員会委員長 大田 直史 …………… 12

第 2 部 京都府立大学の教育活動を考える（10）

- ① 新教養教育の実施について
教務部長 久保 康之 …………… 16
- ② 学生による授業評価について
- ③ 全学 FD 研究集会報告
- ④ 卒業生および就職先への調査について
教育課程等検討委員会 FD小委員会委員長 金澤 哲 …………… 36
- ⑤ 学生生活実態調査の結果について
学生部委員会 学生生活部会 …………… 103

資料編

- ① 教育 ② 研究 ③ 地域貢献 ④ 大学運営 …………… 129
- 自己評価委員会活動報告（平成 19 年度） …………… 144
- 自己評価委員会名簿・編集後記 …………… 145

京都府立大学自己点検・評価年次報告書 2007 の刊行にあたって

自己評価委員会委員長 大田 直史

2006年12月に策定された「京都府大学改革基本計画」に従って、2008年度から、京都府公立大学法人が大学を運営することとなった。これに合わせて、大学の組織・機構も大きく改組され、大学の委員会組織も変わるようになる。2007年度は従来の形態の自己評価委員会として活動する最後の年度となり、08度には新しい委員会にその活動が引き継がれることになった。

国立大学や私立大学と同様に、公立大学法人によって設置される大学の場合も、認証評価機関による認証評価を受けることが義務付けられているところである（学校教育法69条の3第2項）。07年度実施された法科大学院についての認証評価においては、学位授与・認証評価機関が評価対象とした9大学院中4大学院を、また日弁連法務研究財団が評価対象とした11大学院中1大学院を「評価基準に適合していない」と評価し、新聞等においても大きく報道された。法科大学院に関するものとはいえ、このような評価が大学・大学院運営に与える影響やダメージの大きさは想像に難くない。地方独立行政法人制度のもと、府立大学は、中期目標および中期計画、さらにそれらに基づく毎年度の目標達成状況などを、府の条例によって設置された京都府公立大学法人評価委員会によって評価されることになるが、その際には「認証評価機関の教育及び研究の状況についての評価を踏まえること」とされている。このような点からすれば08年度以降、自己評価を中心とする大学の評価にかかわる取り組みは究極的には大学の存立そのものにもかかわる重要な意味をもつことになる。と同時に、先行して法人化された大学の経験をきくにつけてそれにかかわる作業量も格段に増大することが予想される場所である。本報告書は、そのような大きな評価活動の変化前夜に当たる年度の評価活動についての報告書となる。

さて、本年次報告書は2部構成とし、第1部「京都府立大学の自己点検・評価活動を考える」では、第三者評価および外部評価へ向けた取り組みをまとめている。第2部「京都府立大学の教育活動を考える」では、まず、①2008年度から実施される新教養教育について記録している。また、今年度実施した、②学生による授業評価、③全学FD研究集会、④卒業生および就職先への調査、⑤学生生活実態調査、について、それぞれの結果を記録している。

来年度以降の大学における評価活動の重要性が全学の教職員の共通の理解とされ、来るべき認証評価へ向けて全学を挙げての準備が進められていくことを念願している。

「自己点検・評価年次報告書 2007」発行に際して

学長 竹葉 剛

「自己点検・評価年次報告書 2007」が発行されるのは、2008 年度が始まってからになると思われるので、2008 年度を迎えての挨拶としたい。2008 年度は、法人化と合わせて再編した学部・研究科のスタートする年になり、また第三者評価（認証評価）を申請する年にもなる。さらに、新教養教育が具体的にスタートする年にもなる。本学がこれまで準備してきた取り組みが、いっせいにスタートする年になる。

「自己点検・評価年次報告書 2007」には、第三者評価と外部評価に向けた取り組みが収録されているが、第三者評価委員会により「大学機関別認証評価・自己評価書」（試行版）が 2008 年 3 月 10 日に完成した。試行版を作成したのは、求められる基準に沿って自己評価書を作成することにより、どのようなデータが必要か、どのような記述がふさわしいか、を実際に確認するためである。試行版の完成により、正式に認証評価を受ける際に必要な作業の概要が把握できたことと思う。関係者の努力に敬意を表したい。

新教養教育については本書の第二部で紹介されているが、本学の教養教育の伝統と全国的な教養教育に関する動向を踏まえた意欲的な内容が盛り込まれている。ただし、新教養教育の内容を十分に発揮するには、情報処理室や語学教室等の新たな施設が必要であったが、2008 年度のスタート時点ではそれらの施設がないままのスタートとなった。新入生ゼミナールについても教室の不足状態のままのスタートとなり、教員および学生の皆さんに多大のご迷惑をおかけしているが、新しい建物が完成するまでの間、何とか辛抱してもらいたい。新教養教育に必要な施設の建設については、学長として全力をあげて早期に実現させたいと考えている。

大学の教養教育については、1991 年の大綱化以来、多くの大学が専門課程を重視して教養課程の必要単位数を減らしてきた中で、本学は教養教育重視を掲げて、従来と同じ水準を維持してきた。新教養教育の実践により、本学の教養教育の質がさらに向上することを願っている。

本書には、軌道に乗り始めた授業評価と学生生活実態調査の結果についても掲載されている。それぞれ密度の高い内容となっている。ただし、授業評価ではおおむね良好な評価が出ているが、一方で、学生生活実態調査の授業への意見では、非常に厳しい意見が出ている。この不一致の原因は何なのか、今後の課題である。

本学の特色の一つは「少人数教育」である。「少人数教育」の実が上がるように、さらに教育改革を進めていく必要がある。教育には多大のエネルギーが必要であるが、今後も本学の教育の質を上げる努力を積み重ねていきたい。教職員の皆様のさらなるご協力をお願いしたい。

第 1 部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える

① 第三者評価に向けた取り組み

第三者評価委員会 副委員長 築山 崇

1. 2007 年度の取り組みの経過

第三者評価に向けた本学における取り組みは、2005 年 6 月の「第三者評価準備委員会」の設置によりスタートした。認証評価機関である大学評価・学位授与機構による評価を 2009 年度に受けることを決定し、認証評価の基準ごとに予備的な調査を行い、各分野における取り組みの課題を明らかにすることによって、評価に先立って実際の取り組みがこの間進められてきている。単なる評価対策ではなく、評価への取り組みを通じて本学の教育研究体制、内容を充実を図ることを重視してきた。

2007 度においては、前年度まで自己評価委員会との兼任委員をおいていた体制をあたため、学部・研究科選出各 1 名の教員と事務局からの 3 名で委員会を構成し、作業部会的性格を強めて、基準 6（教育の成果）、7（学生支援等）について、大学院課程を対象とした予備調査を行うとともに、前年度までの予備調査（基準 2 教育研究組織 基準 6,7 基準 9 教育の質向上及び改善のためのシステム）を踏まえ、認証評価機関に提出する「自己評価書」の「試行版」（提出様式に沿ったもの）を作成する作業に取り組んだ。

また、それと並行して、「試行版」の作成過程で改めて明らかになる諸課題の整理にもあたってきた。

「試行版」は、2008 年 3 月に編集を終え、2008 年度以降取り組みが必要な諸課題の一覧とともに、学科主任、事務の主要部門等に配布し、意見募集を行った。そして、年度末までに寄せられた意見をもとに若干の補正を加え、2008 年度から始まる、本報告書用の作業の出発点になる基本資料とすることができた。

2008 年度からは、全学の自己評価体制も更新され、従来の自己評価委員会と第三者評価の準備にあたる臨時的な委員会という 2 本立ての構成を、新たな全学自己評価委員会と第三者評価（2009 年度実施の認証評価機関による評価）に対応する作業部会という整理・一本化された体制で臨むことになっている。

以下、「試行版」の基準ごとの評価の概要を転載し、2008 年度における本学の自己点検・評価活動、とりわけ、第三者評価に向けた取り組みの、全学的な議論の素材とする。（「試行版」そのものは、全教職員に配布する体制はとらなかったため、全学の教職員が、本学において当面取り組みの強化が必要な分野等について理解を深める糧としていただきたい。）

2. 自己評価書「試行版」の概要（評価の基準ごとの「概要」を収録）

基準 1（大学の目的）の自己評価の概要

本学では、昭和 24 年に現在の名称でスタートする際に、学校教育法に忠実に沿ったかたちでその目的を定めると同時に、府立の大学として、産業や文化の発展に貢献する意思を示した。その後、学部・学科の再編の機会には、大学全体の目的・理念については、この「京都府立大学」としてのスタート時のものを継承しつつ、その具体化を、学部・研究科の目的・理念のレベルで図ってきた。

平成 20 年 4 月の法人化、新たな 3 学部、3 研究科への改組にあたっては、今日的な大学の使命・社

第1部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える（6）

会的役割に照らして、その充実を図っている。

目的・理念の公表、周知については、各種広報誌を発行し、広く府民・市民の目に触れる機会をつくと同時に、近年では、ウェブページの充実を通じて、更に広範な発信に努めている。

また、FD研究集会など教職員の研修の機会には、大学の目的・理念もテーマに取り上げ、その内容を自己評価の年次報告書に収録することによって、構成員への周知と教育研究の質向上の一助としている。

今後は、法人化によって独立した経営体としての性格を、教育・研究機関としての大学の特性を踏まえて有効にいかしていくことで、目的の達成・成果の向上に努めていくことが求められている。

基準2（教育研究組織 実施体制）の自己評価の概要

本学では、基準1で示した目的を達成するために、文学部3学科、福祉社会学部1学科、人間環境学部3学科、農学部3学科を設置しており、学士課程における教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっている。なお、平成20年度より3学部改編し、社会の現代的課題に対応した特色のある教育研究の推進を図る。

教養教育の実施は、教育課程運営協議会での調整などによって、全学開講科目としての運営が円滑に行われており、平成20年度からは、新たな体制で実施することになっている。新たな体制は、教養教育センターを設置し、他大学との連携も含めたより幅広く室の高い教養教育を行っていることを目指している。

大学院課程については、基準1に示した目的を達成するために、文学研究科は4専攻、福祉社会学研究科は1専攻（2分野）、人間環境科学研究科は3専攻、農学研究科は2専攻を設置している。研究科及び専攻の構成は、大学院課程における教育研究の目的を達成する上で適切なものとなっている。なお、平成20年度より3研究科に再編し、より特色のある教育研究の推進を図る。

教育研究に関わる全学センターとして、京都府立大学地域学術調査研究センターを設置しており、都市農村交流、観光など京都の地域課題に即した調査研究活動、講演会、シンポジウムなどの地域社会向けの活動を行うとともに、受託研究の取り扱いなど、産学公の連携に重要な役割を果たしている¹。

教育研究活動に係る重要事項を審議する評議会、学部教授会（研究科会議）は、定例、臨時の会議を開き、十分な審議を行っている。また、教育の成果の検討に基づく教育課程の改変の検討などは、教務関係の委員会（教育課程等検討委員会）で案を作成し、教授会、評議会の議を経て実施に移され、教育研究活動の質的向上に貢献している。

基準3（教員及び教育支援者）の自己評価の概要

教員組織編成の基本方針は学則に定めており、教育研究を遂行する上での適切な教員配置が行われている。

学部、大学院を併せた学生収容定員ベースでの教員一人当たりの学生数は 一 名であり、学士課程における専任教員と大学院課程における研究指導教員及び研究指導補助教員は十分確保されている。

教員の年齢構成は、特定の範囲に著しく偏ることなく、バランスのとれた構成となっている。女性

¹ 創立100周年の記念事業として取り組まれた募金活動にもとづき、京都府立大学学術振興会が設置され、府立大学の学術研究の成果の社会に向けた発信、大学院生、若手研究者、留学生の支援などを行っている。

第1部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える（6）

教員の割合は大学全体で %であるが、女性の採用・登用の拡大を図っている。教員の採用は、理系学部では原則公募制としており、文系学部でも公募制を導入している。外国人教員も必要に応じて採用している。

教員の採用基準や昇任基準については、大学院担当の資格審査を受けることを原則として、教育・研究・地域貢献活動について評価している。

教員の教育活動の向上に資するため、全教員を対象として、学生による授業評価アンケートを毎年度実施している。全学FD研究集会を毎年度実施して、教員の教育能力の向上に努めている。

教育の目的を達成するための基礎として、教育内容と関連する研究活動が活発に行われており、特に卒業研究や修士論文作成、博士論文作成の指導を通じて、教員の研究活動が教育に反映される体制になっている。

教育課程を展開するのに必要な教育支援者は適切に配置されている。

基準4（学生の受け入れ）の自己評価の概要

大学全体の理念、大学憲章を定め、学科の目的を学則に記載し（第5条）、学科の目的に対応するアドミッション・ポリシーを定めている。それらを記載した選抜要項、大学案内を府内高校をはじめとする関係者に広く配布するとともに、大学のホームページでも公表し、広く周知している。

アドミッション・ポリシーに沿って、一般選抜（前期日程、後期日程）、推薦入学・AO入試など、多様な入学者の受け入れを実施しており、入学した学生の教育成果から判断して、アドミッション・ポリシーは十分に機能していると言える。

留学生、社会人、編入学生の受け入れに際して、一般の入学者と同じアドミッション・ポリシーによって受け入れている。

学長を責任者とする入試運営委員会が入試実施の全般を統括している。試験問題は、科目別問題作成委員会による試験問題の作成の後、5段階のチェック体制により入試ミスの発生を防止している。試験の実施については、試験監督、警備などの諸業務に関して実施要領等を作成し、関係者に周知徹底の上、適切な実施体制で臨んでいる。合否判定に関しては学務課入試係の作成した合否判定資料をもとに各学部教員会議が決定している。入学選抜業務全体を通じて、適切な実施体制により公正に実施している。

アドミッション・ポリシーに沿った入学選抜の分析・検証については緒についたところであり、入学した学生の成績調査等を踏まえて、各学科・専攻ごとに分析・検証を積み重ねている。

学士課程及び大学院博士前期課程においては、実入学者数は入学定員を上回っており、入学定員と実入学者数との関係は適正である。ただし、大学院博士後期課程においては、専攻によっては実入学者が定員を下回る状況が生じており、入学者確保の対策が必要である。

基準5（教育内容及び方法）の自己評価の概要

（学士課程）

授業科目の配置と体系性等 授業科目は、学士課程全体を通して、教養教育と専門教育のバランス、選択科目と必修科目のバランスなどに配慮するとともに、学生が系統性・テーマ性を持って学ぶことができる配置となっている。教養教育科目については、基礎科学、総合科学（現代的・総合的で高度な教

第1部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える（6）

養を身につけることを目指した科目群、京都とその周辺地域の総合的、科学的な研究・教育を目指す科目群から構成)、外国語の3分野から編成している。これらは、基礎的な科学について理解を深めることを重視するとともに、時代と社会の要請や学生のニーズに応えるものであるが、平成20年度からは上述のように更に、系統性の強化、学生の学習意欲を引き出す新たな編成を用意している。専門科目においても、概論、演習・実習、卒業研究など系統的な編成が行われ、専攻・コースにまたがる履修や学部・学科を越えた「自由科目」の設定など、学習内容に幅をもたせる工夫を行っている。

このように、本学においては、教養教育科目と専門教育科目のそれぞれにおいて、基礎的・専門的教育が適切になされるようにカリキュラムを編成するとともに、学生のニーズ、時代・社会の要請に応えるべく、新たな体制を準備実施しつつある。平成20年度からの新たな教養教育体制の稼動にあたっては、教養教育センターという独自の組織も設置する。さらに、教養科目の新たな編成、提携大学との提携やコンソーシアム事業への参加による単位互換制度など、学生の多様なニーズ・社会的要請に応える教育課程の編成が行われている。補充授業の実施についても、実施の前提となる調査に取り組んでいる。

学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に対応した教育課程の編成についても、適切な対応をとっていると判断できるが、今後、インターンシップの単位化や編入生に対するよりきめ細かい配慮などに努めていくことが課題として考えられる。

単位の实质化や、授業形態のバランス等 単位の实质化については、少人数教育が可能な条件を生かして、特別な体制を組むことなく行われている。FD 集会等で、各学科における教育活動を交流をすることを通じて、より効果的な授業づくりの取り組みも行っている。履修登録単位の上限設定や GPA 制度の導入については、平成20年の学部改組や新教養教育課程の実施状況を踏まえて、今後の実施の必要性を判断していくことになる。

各科目の授業形態は、各学部・学科の教育目的及び特徴に応じて、相応数の講義・演習・実験・実習等が配置し、バランスのとれた構成となっている。学習指導法における工夫としては、初年の少人数ゼミの全学導入（平成20年度新教養課程より）、フィールドワークを核とした「環境共生教育演習」、実習授業へのTAの配置などを行っている。一部の教養科目を除いて、全学的に少人数教育が行き渡っており、学生一人ひとりのニーズや課題に応じたきめ細かい指導を行っている。シラバスの整備状況については、学生の受講科目選択に資する情報が適切に提供されているが、さらに、平成20年度からは、シラバスの記載様式の統一、情報量の増加などの工夫を加えている。学生による活用状況については、学生アンケートによって、学生の声を集め改善に努めている。

自主学習への配慮、基礎学力不足の学生への配慮等については、各学科において、現状でも必要な対応はなされていると判断されるが、全学的な組織的対応については、自主学習のためのスペース確保も含めて、今後更なる充実・改善が必要な状況にある。

成績評価や卒業資格認定 関連する規程が学則において定められ、学生便覧等で学生に周知されるかたちがとられており、組織的な体制が適切に機能していると判断される。学則等に定められた基準・方法によって、成績評価・卒業認定が実施されているが、全学的なデータの集約や分析、シラバス等による学生への周知については改善の余地がある。

成績評価の正確さを担保する措置等 現状でも学務課教務係と授業担当教員の連携の下に、成績に対する学生の異議申し立てや、進級・卒業要件を満たしているかどうかの検証などが適切になされているが、

今後制度化と学生への周知の面で改善が求められる。

基準6（教育の成果）の自己評価の概要

本大学では、大学の目的に沿い、学部・大学院の各課程・各専攻において育成すべき学生の学力、資質・能力や人材像は、大学（院）入学案内、大学案内（CAMPUS GUIDE）、各学部学科独自の案内等の冊子や大学ホームページで明示し、さらに、新入生オリエンテーションや合宿研修等で説明している。その教育の成果は、担任および指導教員を中心に各学科・専攻で検討し、全学的には、教育課程等検討委員会や学生部委員会等が学生アンケートや卒業（修了）生アンケートなどにより、教育の達成状況についての検証と評価を行っている。

教育の成果を進級、卒業、修了等の認定状況から見ると、進級率は91-95%、卒業率は87-88%、修了率はXX%で推移しており、概ね高い値を示している。成績評価の結果も「優・良」の合計が共通教育科目で77%、外国語科目で79%、学部専門教育科目で83%に達し、大学院ではX割以上という結果になっている。

教育の成果に関する学生の意識としては、卒業（修了）時のアンケートで8割以上が、本大学の教育に「満足している」と回答しており、これは、授業アンケートにおいて「この授業に出席した目的はどの程度達成されましたか」に対し、「あまり達成されず」と「全く達成されず」の合計がわずか2%に過ぎないこととも一致している。

卒業後の進路は理系学部と文系学部で様相が大きく異なる。理系学部では大学院への進学が最も多い。理系大学院前期課程修了後の進路としては民間企業が最も多く、一部は公務員および教職に就いており、就職状況は良好であるが、大学院後期課程への進学者は少ない。一方、文系学部では、民間企業への就職が多いものの、教職および公務員志望者がかなりの割合を占め、その就業の困難さが全体的な就職状況を低下させる原因となっている。大学院前期課程への進学については学部学科による差が大きい。文系大学院前期課程修了後の進路としては、就職以外に、そのまま大学院後期課程へ進学する者も多い。理系、文系ともに、大学院後期課程修了後の進路状況は芳しくなく、1-数年間の特別研究員などを経て正規就職するケースが多い。

就業先等からの本大学への評価として、現時点では一部学科のみの意見聴取ではあるが、肯定的な意見が出されていることから、概ね良好な評価が得られていると判断される。

以上のことから、本大学の教育の目的において意図している、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等に照らして、教育の成果や効果が上がっていると判断される。

基準7（学生支援等）の自己評価の概要

授業の履修・選択に関しては、全学でシラバスを発行し、学部・専攻単位で丁寧なガイダンスが行われている。新入生に対しては、一斉ガイダンスを行うと共に学科単位で研修旅行を実施している。学科の方針、卒業研究のための研究室の紹介も、学科単位で適切に行っている。ただし、新入生の理解度やその効果について、満足度の調査が必要である。

クラス担任制が全学で行われており、また教員当たりの学生数が少ないため、学生が教員側に相談しやすい体制になっている。しかし個別の講義に対するオフィスアワーの設定が、全学レベルで望ま

第1部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える（6）

れる。

全学の学生を対象に「学生生活実態調査」（回収率 53%）を通じて学生からのニーズ意見の調査は細かく行われており、加えて各学部・研究科で行われている種々アンケートの利用により学生の学習支援、学生生活に関する学生のニーズを把握することに務めている。アンケートを行っていない部局においても、少人数教育制が十分に機能し、学生のニーズ、意見を細かく汲み上げることが出来ていると判断している。

障害のある学生、心身のケアを必要とする学生等に対しては、大学として支援しているが、留学生、社会人入学生、編入生に対しては、指導教員を中心とする個別な対応が中心となっており、今後組織的な支援を行うための改善の余地がある。

自主的な学習環境として、図書館の和洋雑誌の閲覧室、自習室、共同研究室、視聴覚室等が提供されている。またPCを十分に備えた情報処理室も、多数の端末を整備して自由に利用できるようになっており、共に十分に活用されている。しかし、図書館の情報量、情報処理室のコンピューターの数等に学生の不満があり、継続的に改善に取り組んでいく必要がある。

クラブ、サークル活動に対し、顧問教員を配置して支援しており、秀でた成果を収めた者に対しては、学長表彰を行っている。学生自治会、体育会、文化会から構成される中央連絡協議会を設けており、学生部からの提案や学生要求に基づく競技などが行われており、課外活動に対し、全学的な支援体制が充分整えられている。

学生の相談・助言体制として、学生相談コーナーを中心に、各学科担任などの強力を得ながら、全学体制で対応している。相談内容に応じて、カウンセラー、医師の援助も受けられることになっており、キャンパスハラスメントの予防と対策についても、必要な体制が整備され機能している。

基準8（施設・設備）の自己評価の概要

京都市内の市街地において、本学の校地・校舎面積は、大学設置基準を上回る広さを確保しており、大学として必要な情報ネットワークや図書についても最低限のレベル以上に充実していると思料される。施設の利用に当たっても、各種規程整備がされるとともに、府民への利用に供するなど公立大学として必要な地域貢献は果たしてきている。

一方、開学112年の歴史のある本学が故に老朽化した建物も存するため、建て替え等の対策を急務とし、それに合わせて時代の先端を行く情報ネットワークの整備が必要である。

基準9（教育の質の向上及び改善のためのシステム）の自己評価の概要

本学の教育活動に係る各種データ・資料は、学務課教務係が「教務システム」を中心に収集・蓄積・管理を行っており、その安定的な運用のためのバージョンアップも行ったところである。また、各学科・専攻においても、学務課教務係と連携しながら、在籍・卒業・修了学生のデータを収集・管理し、カリキュラムの充実等に活用している。

授業改善については、全学において学生による授業評価を実施している。授業評価においては、学生の評価結果を迅速に科目担当教員にフィードバックし、評価結果を踏まえた授業改善方策につて、各教員のみならず学科・専攻において確認・検証するシステムを導入している。また、以上の取り組みを全学報告書としてとりまとめ、ホームページにより公表している。

第1部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える（6）

教育環境・設備等を含めた学生生活実態調査を隔年で実施し、学生の要望・意見を聴取している。調査結果及び意見・要望は学内関係所属に情報提供し、迅速な対応を図るとともに、対応状況を学内専用ホームページで公表している。

学外関係者からの意見聴取については、本年度から卒業生及び就職先に対する調査を試行として予定しているところであり、今後、本格的な実施と評価結果の有効な活用について検討していく必要がある。

ファカルティ・ディベロプメントについては、教育課題をテーマとした全学FD研究集会を毎年開催し、全学教員の意識啓発や教育課程の充実を図っているところであるが、今後は、これらの取り組みに加えて、授業技法等個別テーマによる研修会の開催や学科・専攻におけるFDの充実に向けた学内の推進体制の整備が必要である。

さらに、平成20年4月の独立法人化を機に、職員及びTA・RA等の教育補助者に対する研修等、その質の向上を図るための取り組みを充実する必要がある。

基準10（財務）の自己評価の概要

本学は、京都府が設置する公立大学であるため、財務運営等については、地方自治法等の規定に基づき適正に執行され、監査等についても法律・規則に則り適正に行われている。

平成20年4月の公立大学法人化に当たっては、他の先行大学の実施事例を参考にしながら、引き続き適法・適正な財務運営を行っていくことが肝要である。

基準11（管理運営）の自己評価の概要

現在の事務局体制は、現在の4学部体制となって以降数次にわたる改編を経たもので、この10年間本学の教育研究を支える事務体制として機能してきたものであるが、なお改善の余地を残したものである。平成20年度からの法人化による事務局体制の抜本的な改革でこの点の解決が図られている。

現在の体制は、学部教授会・評議会を基本とした議論の積み上げと全学討議に基づく決定・実施の構造となっており、一定の時間を要するが、全学的な合意形成を基本にした運営がなされている。法人化後は、学長が副理事長として参加する理事会の決定、学長の提案を受けて、教育研究評議会での審議が行われる構造となり、学長のリーダーシップが現状より強化される仕組みとなるが、反面、学内の合意形成にもとづく運営の面で配慮が必要である。その点で、ボトムアップとトップダウンのメリット、デメリットを踏まえた、質の高い運営システムの構築に向けた努力が必要である。

学生、教職員、学外関係者のニーズを大学運営に反映する仕組みは上記のようにつくられており、管理運営に適切なかたちで反映されている。また、職務に必要な研修等資質向上については、府の行政職職員が人事異動で配置される構造が、職員の専門性の向上の上で検討の余地を残している。その点は、法人化後の事務組織の改編の過程で改善していく必要がある。

本学の構成員が必要に応じてアクセスできるシステムは、ホームページへの掲載とホームページのコンテンツ・マネジメント・システムの稼働、各種印刷媒体の発行などによって実現している。

自己評価については、全学自己評価委員会、学部自己評価委員会、第三者評価委員会の3つの組織によって、自己点検・評価活動が円滑に行われているが、更に一体的で強力な評価体制の確立が求められている。点検・評価の結果については、刊行物によって公表されているが、ウェブサイト上からの

第1部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える（6）

アクセスの体制はなく、今後の課題である。点検・評価結果に対する外部の検証については、現在体制を作り実施に移している過程にある。評価結果のフィードバック、改善のための取り組みについては、意見募集やFD研究集会などの機会に行われており、基本的な必要は満たされているが、学部・研究科単位の評価、各種学内委員会による評価をより充実させ、改善に結びつける点では今後課題を残している。

3. 今後各分野で必要な取り組み (別表)

4. 今後の自己評価体制について

冒頭、2007年度の取り組みの評価でも示したように、2008年度は、自己評価委員会内に設けられる「作業部会」のひとつが、第三者評価への対応・作業にあたる体制となる。作業部会の部会長は、第三者評価への取り組みが、向こう2年間の最重要課題となるため、自己評価委員会委員長があたり、全学自己評価委員とは別に学部等で選出される委員が部会員となって、作業にあたることになる。

また、2008年度からは、本学が府立医科大学と共に法人化され、中期目標・計画及び年度計画に基づく各取り組みの推進と評価がおこなわれることになる。日常的な点検・評価活動と、第三者評価への取り組みを着実に進めることができるよう、新しい体制を機能させていくことが重要である。全学的な取り組みの中で、評価という柱の位置づけを従来以上に強めていくことが必要である。

(別表) 基準ごとにみた今後の取り組み課題

認証評価基準		取り組みが必要な課題		記述上の留意箇所	現在の取り組み状況		
大区分	小区分	全学的課題(整備・拡充が必要なもの)	新規・個別課題				
I	大学の現況及び特徴	—	—				
II	目的	—	—				
III	基準ごとの自己評価	1 大学の目的	・目的の学内外への周知・公表の一層の推進 ・大学の理念 大学憲章等の整備			大学憲章は検討中 20年度策定	
		2 教育研究組織(実施体制)	・新体制の点検・整備				
		3 教員及び教育支援者	・大学院の教務体制整備	・講座制の実態把握と整備 ・TAの雇用状況の把握と予算確保 ・年齢・性別・選任・非常勤などの実態整理とバランスの検討	・ほとんどの主要科目は専任教員が担当している ・20年度から全学大講座制 ・女性教員の採用状況 ・教員の任期制の扱い ・大学院の教務事務		
		4 学生の受け入れ	・アドミッションポリシーにもとづく、教育課程の整備 ・大学院博士後期課程における定員充足	・大学院課程においても、アドミッション・ポリシーに沿った選抜が行われていることの根拠資料の整備 ・留学生、社会人、編入学生の受け入れが、一般の入学者と同様にアドミッション・ポリシーに基づくものであることの根拠資料等整備			大学憲章は検討中 20年度策定
		5 教育内容及び方法	※教育課程の全般を教務部で把握できる体制の確立 ・これまで、学科が実質的に把握・管理していた教育課程に関わる内容を、教務部でその全体を掌握できる体制 ・学部事務と教務が情報を共有できる体制づくり。 ・全学的な科目ごとの成績分析 ・資格取得者についての全学統計の整備 ・卒業生の就職先分類についての全学統計の整備 ・進路調査のデータの項目を認証評価基準との整合した見直しと再分析 ・学部授業と修士(博士前期)課程教育との連携	・研究成果が授業内容に反映されている事例集の作成 ・他大学との単位互換、インターンシップによる単位認定、補充教育の実施、編入学への配慮等の実態・規程等の資料整備 ・単位実質化への配慮・・・履修モデルの提示(自主学習への指導)、授業科目に関連した図書配架、取得上限単位の設定他 ・特色ある授業科目、授業内容、授業形態(フィールドワーク、討論、プレゼンテーション・・・)の実例集の作成 ・自主学習への配慮、基礎学力不足学生への配慮等の組織的実施(図書館の夜間開館体制) ・成績評価基準や卒業認定基準の具体化と適用実態の把握・資料作成	・ほとんどの主要科目は専任教員が担当している ・20年度から全学大講座制 ・女性教員の採用状況 ・教員の任期制の扱い ・大学院の教務事務 ・TAの雇用状況 ※授業事例など、資料整備の課題が多い! ・補充教育についての既存調査 ・外国語授業の定員シラバスの利用率(学生アンケートデータから)	・成績評価基準については、20年度シラバスの要項に項目設定 ※学事と教務の事務体制の統一については、20年度法人以降の事務体制の中で整備する。 ・図書館の夜間開館体制は、夜9時までの延長が20年度予定されている。	
		6 教育の成果		・教員みずからによる授業評価(授業の達成度・成績分布などにもとづいた、全学共通様式の検討) ・アドミッションポリシーに即した、教育指導体制の評価様式の検討			
		7 学生支援等	・新生の満足度の調査(20年度前期終了時に 特に新生ゼミ) ・留学生、社会人入学生、編入学生への、組織的支援 ・自主的学習の環境整備(アンケート実施、特に情報機器など) ・大学院の担任制の全学的統一とその評価 ・生涯のある学生にも対応した設備の整備状況についての全学資料の整備	・オフィスアワーの全学統一の設定(シラバス・ホームページ等への掲載) ・学習支援についてのアンケート調査。 ※教務で把握している状況と学科で把握している状況の整理・統合 ・ガイダンスの適切性についての評価 ・学科単位の学習支援のとりくみ			オフィスアワーについては、学部で検討中。
		8 施設・設備	・老朽校舎・施設の更新 ・情報ネットワークの改善				
		9 教育の質の向上及び改善のためのシステム	・卒業生及び就職先への調査の本格実施 ・FDの推進体制の充実強化	※現行の学生による授業評価の内容(設問項目など)の検討 ・年1回の全学FD集会だけでなく、複数回・複数単位での開催			
		10 財務	・資産の時価評価とその結果に基づく他大学との比較検討など ※法人会計(企業会計方式)への移行				
		11 管理運営	・職員の資質向上のための取り組み(体系的な体制整備とその明示) ・評価結果を改善に結びつける恒常的な組織の確立(全学的なシステムの確立) ・点検・評価結果についての外部者による検証	・教育支援者(教務職員等)の研修(SD)の体制整備			
選択的評価事項A(研究)	20年度に研究に関する外部評価を実施						

第1部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える（6）

②外部評価に向けた取り組み

自己評価委員会委員長 大田 直史

はじめに

本年度の自己評価委員会の活動は、本学が2008年度に、認証評価を学位授与・認証評価機構に申請することを予定していることから、そのための準備活動を行うことを中心とすることになった。準備活動の内容としては、第三者評価委員会との役割分担のなかで、本委員会においては、認証評価の「選択的評価事項A 研究活動の状況」についての評価を受けるための準備作業として、2008年度12月頃までに研究活動にかかわる外部評価を受ける作業を、2006年度からの継続的な課題として行ってきた。

以下、本年度の委員会で行ってきた研究活動に関する外部評価へ向けた取組について、1) 2006年度の自己評価委員会から外部評価について引き継いだ事項、2) 外部評価委員の選定について、3) 研究活動報告書の作成、の順に報告する。

1) 2006年度の自己評価委員会からの引継

2006年度の自己評価委員会からは、外部評価について、以下の通り引き継いでいた¹。

- ・平成19年度中にデータを収集
- ・平成19年末に、外部評価を依頼。20年8月までに評価書を完成。
- ・外部評価は現在の学部の枠組みで受ける（平成19年度段階での評価）
- ・第三者評価で提出する「研究活動実績表」は、学部・研究科単位で作成するが、個人の研究業績の評価が中心となっている。したがって、外部評価でも、個人の業績評価を集約する形で、学部・研究科の評価を依頼するのが望ましいと思われる。

・各学部で必要な評価委員の数

文学部	最小4名	最大10名
人間環境学部	最小4名	最大10名
福祉社会学部	最小6名	最大6名
農学部	最小5名	最大38名

※およそ、最小の場合は科研審査の大分野、最大は個別分野

以上の2006年度委員会から引き継いだ事項について、2007年度委員会では外部評価を受けるための作業として進めることとした。作業は、第三者評価委員会の正・副委員長と協議を行いつつ進めてきた。

2) 外部評価委員について

外部評価委員については、当初、昨年度確認されていた委員数を前提に、今期は委員の選定基準や分

¹ 2007年5月2日、平成19年度第1回自己評価委員会（新旧合同会議）における2006年度上島委員長のコピー。

野を決めて、具体的な人選を行い、2008年度早々にも依頼を行えるように各学部等で検討を進めてもらうこととしていた。ところが、2008年度に外部評価を予算化するについては、委員数とその根拠を含めて明確にして要求する必要があることが学長から指摘された。昨年度にも同様の議論をしてきたにもかかわらず改めてこのような議論をする必要については疑問視する意見もあったが、委員会においては、再度各学部の自己評価委員会での検討を依頼して、各学部の意見を踏まえて委員数を決定した。議論のなかでは、本来的には研究活動の内容に関する評価であるので、科研の「細目」を基準とすべきである、少なくとも「分野」を単位とするべきである、などの意見が出された。結論としては、個々の教員の研究の内容についての評価を受けるわけではないなどの理由で、1学科あたり2名程度という基準で外部評価委員を依頼することとした。その際に、1人あたりの委員報酬が、研究内容の評価という仕事内容に見合う適切な額となるように、報酬の支出の仕方については事務局サイドで工夫することが確認された。各学科において人選を進め、2007年度内にも相手方への打診を含めて、依頼の手続きを進めることを確認し、その後、2008年1月の部局長会議を通じて、各学部のしかるべき担当者において、次の「研究活動報告書」の作成と併せて、新年度早々にも正式の委員の依頼が可能なように「外部評価委員の選定」を進めることを依頼した。

3) 研究活動に関する外部評価の内容・手順等について

認証評価へ向けての研究活動に関する外部評価を既に受けてきた弘前大学、山形大学、大阪市立大学、東北大学等の例を参照しながら、対象や手順等について検討した。外部評価の内容、手順等は大学によってまちまちであり、内容面では、学部の教育・研究活動、社会貢献活動全般について評価を受けている大学もあれば、研究活動の質的な側面を中心として評価を受けている大学もあった。また、手順についても、評価対象学部等からの資料に基づいて書面で評価を受けるという形態をとる大学もあれば、書面による評価に加えて数回にわたって外部評価委員会を開催して意見交換・ヒアリングを実施している大学もあった。

内容・対象について、委員会では、認証評価の「基本的な観点」には「研究成果の質」だけではなく「社会・経済・文化の発展に資する研究」が行われているかといったことも含まれることから、一定学科等の「教育、社会貢献」についても評価を受けておくべきであるとする議論もあったが、これらの事項は今回自己評価委員会が分担していない事項も含まれることや、外部評価委員依頼の体制が各学科1名と圧縮された規模になったことなどに配慮して、主には研究活動の質という点について外部評価を受けることとなった。

4) 研究活動報告書の作成について

2006年度からの引継として、「第三者評価で提出する『研究活動実績票』は、学部・研究科単位で作成するが、個人の研究業績の評価が中心となっている。したがって、外部評価でも個人の業績評価を集約する形で、学部・研究科の評価を依頼するのが望ましいと思われる²とされていた。外部評価を委員に依頼する際に、評価の資料となる「研究活動報告書」の作成である。これについては、上記3)の議論と併せてその内容をどのようにするかを検討した。研究活動報告書の記載事項については、

² 同前。

第1部 京都府立大学の自己点検・評価活動を考える(6)

後掲「京都府立大学研究活動報告 目次」のとおりである。この報告書の、Ⅰについては全学自己評価委員会が、Ⅱについては学部・研究科において、Ⅲについては自己評価委員会データ小委員会が担当して作成に当たることとした。

Ⅰについては、認証評価では「大学の目的に照らして」研究活動の活発さや成果が評価されることになる。Ⅱの内容もこれとの関係で記述する必要があるところのものであるが、まとまった形のものがないため、記述に手間取り、データとして不十分などもある。

Ⅲの個人データの報告書への掲載のフォーマットについては、データの収集技術的な困難がつきまとい、Ⅱの記述を学部・研究科で行う際にも資料とするべきものであったが準備が遅れが生じた。

Ⅱについては、上記の通り外部評価委員の選定と併せて、2008年1月の部局長会議において学部長を通じて、学部のしかるべき担当において作成を進めることを依頼し、目下各学部・研究科においてその作成作業を進めていただいているはずである。

最後に——外部評価今後の課題

早急に研究活動報告書を各学部・研究科において完成させるとともに、外部評価委員の委嘱へ向け準備を進める必要がある。2008年度は自己評価委員会の体制が変わることになるが、これらの作業について全学的に点検・調整を行うことが必要である。

実際の外部評価の実施方法等については、基本的に評価を受ける各学科等の自主的な判断に委ねられる部分が多いと考えられるが、大学としてのミニマムの内容について委員会として協議し詰めておく必要がある。遅くとも2008年内には、外部評価を終えて、最終的には、研究活動に関するデータと併せて、「外部評価報告書」を作成する必要がある。本学がその目的に照らして、研究活動を活発に行い、研究の成果をあげていることを裏付ける根拠となる外部評価の重要性を全学的に確認するとともに、それへむけた取り組みにいつそうの精力を注ぐ必要がある。

京都府立大学研究活動報告書 目次

I. 全学における研究活動

1 理念・目的

1.1 大学の理念・目的

1.2 研究活動における大学の目的・目標

2 全学的な研究体制

2.1 組織構成概略(学部・研究科、付属機関等あたりのレベルまで)

2.2 全学的な研究支援・推進体制(地域学術センター、府大ACTR、出版助成)

2.3 全学における研究活動の点検・評価体制

2.4 全学における研究体制の適切性・妥当性【上記2.1-2.3をもとに自己評価を記述】

II. 学部・研究科の研究活動【4学部・研究科ごとにまとめて記述】

1 研究活動における学部・研究科の目的・目標

(学科、専攻ごとの目的・目標がある場合は学部研究科の目的・目標の後に記述)

2 研究体制

2.1 学部・研究科の組織編成

(学科、専攻等組織編成の現状やその特徴を記述)

2.2 教員・研究員等の構成

(教授、准教授の数や、特任教授、共同研究員、博士後期課程学生の数)

2.3 学部・研究科における研究支援・推進体制

2.4 学部・研究科における研究の点検・評価体制

2.5 特記事項 (その他研究体制でアピールできることがあれば書く)

2.6 学部・研究科における研究体制の適切性・妥当性【上記2.1-2.5をもとに自己評価を記述】(第三者評価のA-1の観点から、また大学・学部・研究科の目的に照らして研究体制がどう評価されるか)

3 学部・研究科における研究活動【研究上の単位としてまとまりがあると考えられる分野ごとの状況について、記述、評価する】

3.1 研究業績の状況 (研究出版物, 研究発表, 特許, その他成果の公表状況)

3.2 共同研究・研究協力の現状(国内外の大学, 研究機関との共同研究)

3.3 地域と連携した研究の状況

3.4 競争的研究資金への応募状況・獲得状況

3.5 特記事項 (その他研究活動でアピールできることがあれば書く)

3.6 学部・研究科における研究活動の適切性・妥当性【上記3.1-3.5をもとに自己評価を記述】(第三者評価のA-2の観点から、また大学・学部・研究科の目的に照らして研究活動がどう評価されるか)

III. 個人データ

第2部 京都府立大学の教育活動を考える（10）

第2部 京都府立大学の教育活動を考える（10）

①新教養教育の実施について

新教養教育に係る全学説明会（平成19年12月26日）報告 新教養教育準備委員会
--

（1）新教養教育に係る経緯とねらい

教務部長 久保康之

本日は年末の慌ただしい中、新教養教育に係る全学説明会にご参集くださり、厚く御礼申し上げます。

今回の説明会は平成20年度の新体制の京都府立大学における教養教育の実施にあたり、教養教育の全体像の把握とどのような実施体制にあるかをご理解いただくために設定いたしました。式次第にありますように新教養教育準備委員会の各部門の常任委員の先生から資料に基づいてご説明いただきますとともに、質疑応答の時間を十分にとり、皆様方のご理解を深めて頂き、さらに現時点における懸案事項についての整理もできればと考えております。

私の方からは新教養教育の概要をこれまでの「経過」、新教養教育の「主題」と「構成」の3点から簡潔に説明させていただきます。

1) 新教養教育の設置の経緯

皆様ご承知の通り、この新教養教育は昨年2006年3月29日、教育課程等検討委員会（委員長 渡辺信一郎前教務部長）から竹葉学長に対して提出された「全学教育目的・目標並びに新しい教養教育」の答申に基づいて、その具体化を図り、平成20年度からの教養教育として実施するものでございます。この間、準備作業は答申に示された新教養教育準備常任委員会、小委員会を構成し進めてまいりました。まず、ご承知のとおり平成20年度の学部改組の文科省への設置申請におきまして教養教育の部分については基盤教育、総合教育、展開教育、主題研究からなる新教養教育の体系で申請が行われております。今回、報告いたします実施要領は答申の基本理念と体系に基づく履修カリキュラムの設置と運用につき現行教学体制上での教員配置、インフラ、教科目の位置づけ、学部専門教育との整合性を検討し、具体化を図ったものであります。また、本日、配布致しました資料は学生便覧として掲載予定の案という位置づけであります。

2) 新教養教育の主題

さて、新教養教育の主題につきまして、答申で扱われました課題とそれに対する対応として整理したいと思います。まず、課題として下記の5つの観点を提起しています。

① 全学教育到達目標の制定

大学間競争が激しくなるなかで、府立大学の教育面での特色・独自性を明らかにするために、全学教育到達目標を制定する必要がある。

② 導入教育

いわゆる全入時代の到来、学習指導要領改訂後の学生の入学が重なり、受験生の質と量は大きく変化している。新入生導入教育の必要性和高校教育からの接続教育のあり方が教育課題として浮上している。

③ 教養教育の動機付け

教育課程とりわけ教養教育の必要性についての認識の形成と学習への動機付け。

④ 学生にとって魅力ある科目設置

「魅力ある教養教育科目の開設など、教養教育の充実」、「幅広い教養が身につくよう、多様な科目選択ができるカリキュラム」などの学生からの要望への対応。

⑤ 実施組織の課題

大綱化以後の教養教育の運営・実施は各学部を母体とする協議体で行われ、教養教育にかかわる問題点や教育課題を扱う主体が不明確。

大要、このような課題に対する対応と方向性として全学教育目的・目標並びに新しい教養教育の提案がなされました。まず、第一番目の課題として取り上げました全学教育到達目標の制定と関連する部分については京都府立大学の教育目的を以下に定めています。

- ①地域社会の現実的生活に即した諸要求をみすえつつ、地域的課題を発見し、自発的精神をもって解決を図り、地域社会の文化の創造と発展に貢献しうる市民を育成する。
- ②国際化時代における日本の社会の形成者として必要な資質をそなえ、心身ともに健全で豊かな人間性を養う。
- ③専門的知識と技能をもつ人材の育成をはかるとともに、広い視野と深い教養に基礎づけられた総合的な判断力をもつ市民を育成する。

さらに、この目的に対応する形で下記に示します教養教育における具体的目標が提示されました。

3) 教養教育の教育目標

- ①学問の多様化・学際化に対応しつつ、今日の時代と社会を理解するために必要な社会・文化・自然に関する基礎的知識を深める。
- ②事象に対する客観的な観察と論理的思考、さらにその結果をまとめて発表できる能力を育成する。
- ③自己が生活する地域社会に対する関心や問題意識を高め、地域に対する幅広い視野と理解能力とを育成する。
- ④多文化社会に生きる市民にふさわしい外国語運用能力と異文化理解への視点を育成する。
- ⑤社会生活を営むうえで必要な情報処理能力を身につけるとともに、自ら発展的に活用することのできる能力を育成する。
- ⑥心と体の健康を保つ方法を身につけ、実践できる能力を育成する。

これらの教育目標の達成と先にあげました課題のなかで導入教育、教養教育の動機付け、学生にとって魅力ある科目設置などの課題に対する取り組みとして、新教養教育のカリキュラムを定めました。

第2部 京都府立大学の教育活動を考える（10）

4) 新教養教育のカリキュラム体系

カリキュラムは下記に示します4つのカテゴリーからなる体系から構成されます。すなわち新入生ゼミナール、基盤情報教育、外国語教育、健康科学からなる基盤教養科目、人間と文化系科目群、現代と社会系科目群、自然と生命系科目群からなる総合教育科目、専門教育カリキュラムの関連授業科目のなかから、適切な科目を教養教育科目として編成する展開教育科目、主題別履修モデルにそって履修した学生の研究レポートの指導、評価にもとづく主題研究、これらから構成される科目群によって教養教育課程が実施されることとなります。とくに基盤教育の新入生ゼミナール、展開教育科目と主題研究は新機軸の取り組みであり、新入生ゼミナールについては先日、来年度の担当者を対象に説明会を開催させて頂いたところです。このカリキュラム体系の各項目につきまして、このあと委員から説明を致しますので理解を深めて頂ければと思います。

教養教育のカリキュラム体系

①基盤教育科目

新入生ゼミナール
基盤情報教育
外国語教育
健康科学

②総合教育科目

人間と文化系科目群
現代と社会系科目群
自然と生命系科目群

③展開教育科目

専門教育・諸課程カリキュラムの関連授業科目のなかから、適切な科目を展開教育科目として編成する。

④主題研究 主題別履修モデルにそって履修した学生のレポート提出により、教養教育センター運営委員会が主題研究の単位認定と主題履修認定をおこなう。

以上、簡単ですが私の方から新教養教育の概要を説明させて頂きました。いよいよ来年4月から始まりますが、初年度ということで手探りの部分があることは承知しております。その意味で実際の運用を進める中においてもお一人お一人の知恵とご意見を賜りながら、整備していかなくてはならない点があると思います。教養教育が全学教育であり、実施にあたり全学教員の皆様には大変にお世話になります。どうかご理解とご協力をよろしくお願い致します。

(2) 新教養教育の内容

後掲の資料等により、4名の新教養教育準備委員会常任運営委員から、順次説明

1) 基盤教育科目（新入生ゼミナール、情報処理基礎演習、健康教育）

新教養教育準備委員会 常任運営委員 大場 修

2) 基盤教育科目（外国語教育）

新教養教育準備委員会 常任運営委員 中 純夫

3) 総合教育科目

新教養教育準備委員会 常任運営委員 吉岡真佐樹

4) 展開教育科目・主題別履修

新教養教育準備委員会 常任運営委員 牛田一成

(3) 新教養教育「履修案内」

以下は、「新教養教育に係る全学説明会」当日の配付資料を、説明会における意見交換を踏まえ、新教養教育準備委員会において、一部修正の上、2008年度新入生用「学生便覧」及び2008年度「開講表」の原稿として作成したものである。

1 教養教育科目	<p>・教養教育科目は、以下の知識・能力を身につけることを目指して設けられている。</p> <p>①学問の多様化・学際化に対応しつつ、今日の時代と社会を理解するために必要な社会・文化・自然に関する基礎的知識を深める。</p> <p>②事象に対する客観的な観察と論理的思考、さらにその結果をまとめて発表できる能力を育成する。</p> <p>③自己が生活する地域社会に対する関心や問題意識を高め、地域に対する幅広い視野と理解能力とを育成する。</p> <p>④多文化社会に生きる市民にふさわしい外国語運用能力と異文化理解への視点を育成する。</p> <p>⑤社会生活を営むうえで必要な情報処理能力を身につけるとともに、自ら発展的に活用することのできる能力を育成する。</p> <p>⑥心と体の健康を保つ方法を身につけ、実践できる能力を育成する。</p> <p>・教養教育科目は、基盤教育科目、総合教育科目、展開教育科目、主題研究の4つに区分されている。</p>
----------	--

第2部 京都府立大学の教育活動を考える（10）

<p>①基盤教育科目 (別表①)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基盤教育科目は、本学学生が共通に学ぶ科目群であり、本学学生教育の共通基盤を形成する基幹科目群である。 ・基盤教育科目のうち、「新生ゼミナール」「情報処理基礎演習」「スポーツ実習」(各2単位、計6単位)は必修科目である。 ・また、外国語科目は、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語の5か国語 20 科目が用意されている。各学部・学科で決められたとおり履修すること。
<p>②総合教育科目 (別表①)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・総合教育科目は、今日の学問の多様化・学際化および学生の幅広い関心に対応して開設する科目群であり、44科目が用意されている。
<p>③展開教育科目 (別表②)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部で開講される専門教育科目のうち、概論・入門などの専門教育の基礎的科目や教養教育と関連の深い授業科目 92 科目が、展開教育科目として用意されている。この科目群設置の目的は、教養教育の科目選択の幅を広げることである。 ・ただし、所属する学部・学科の専門教育科目として履修できる科目は、展開教育科目(教養教育科目)として履修することはできない。 ・また、展開教育科目として履修する場合は、次ページの3に掲げる自由科目として卒業に必要な専門教育科目の単位に算入することはできない。
<p>④主題研究</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主題研究は、主題別履修モデルに沿って学習する中で特に興味を抱いたテーマを自由に取り上げ、主体的発展的に行う課題探求型学習である。 ・主題研究は必修科目ではないが、現代社会の抱える様々な問題に対して主体的に向き合う姿勢を養うとともに、自己の問題意識に即して課題を探求し、その結果を論理的に表現する能力を習得することを目標としており、積極的にチャレンジすることが望ましい。 ・履修方法や単位認定等については、「主題研究の履修」・「主題研究の認定」を参照すること。

別表① 教養教育科目の履修と用意単位数(基盤教育科目・総合教育科目・主題研究)

<全学部共通>

区分	科目名	単位数	配当年次	備考(履修上の注意)		
基盤教育科目	新入生ゼミナール	2(※)	1	(※)「新入生ゼミナール」、「情報処理基礎演習」及び「スポーツ実習」は必修科目である。		
	情報処理基礎演習	2(※)	1			
	健康教育科目	スポーツ実習	2(※)		1	
		スポーツ科学	2		1	
		食と健康の科学	2		1	
		心の健康	2		1	
		英語A	2	1	(※)外国語科目(英語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語)の単位の修得は次のとおり(開講表に詳細を記載)	
	英語B	2	2			
	英語C	2	1			
	英語D	2(※)	2			
	外国語科目(※)	ドイツ語ⅠA	2	1		○文学部 2カ国語以上、16単位以上 (日本・中国文学科、歴史学科： 2カ国語それぞれ8単位)
		ドイツ語ⅠB	2	1		(欧米言語文化学科： 英語・ドイツ語・フランス語から 2カ国語を選択し、それぞれ8単位)
		ドイツ語ⅡA	2	2		○公共政策学部 2カ国語以上、12単位以上 (公共政策学科：2カ国語以上で12単位以上) (福祉社会学科：一つの外国語を8単位、 他の1カ国語を4単位以上)
		ドイツ語ⅡB	2	2		
		フランス語ⅠA	2	1		
		フランス語ⅠB	2	1		○生命環境学部 2カ国語以上、12単位以上 (生命分子化学科、農学生命科学科、 食保健学科、環境デザイン学科、森林科学科： 一つの外国語を8単位、他の 1カ国語を4単位以上) (環境・情報科学科：一つの外国語を8単位、 他の外国語を4単位以上)
		フランス語ⅡA	2	2		
		フランス語ⅡB	2	2		
		中国語ⅠA	2	1		
		中国語ⅠB	2	1		(※)教育職員免許状取得希望者は、「英語D」を必ず修得しなければならない。
		中国語ⅡA	2	2		
		中国語ⅡB	2	2		
	朝鮮語ⅠA	2	1			
	朝鮮語ⅠB	2	1			
	朝鮮語ⅡA	2	2			
	朝鮮語ⅡB	2	2			
	総合教育科目	人間と文化系科目群	日本の文学と文化Ⅰ	2	2	
日本の文学と文化Ⅱ			2	2		
アジアの歴史と文化			2	1		
ヨーロッパの歴史と文化			2	1		
哲学入門			2	2		
現代科学と倫理			2	1		
人間と建築			2	2		
人類生態学			2	1		
京都の文学Ⅰ			2	1		
京都の文学Ⅱ			2	1		
京都の歴史Ⅰ			2	1		
京都の歴史Ⅱ			2	1		

区分	科目名	単位数	配当年次	備考（履修上の注意）	
総合教育科目	現代と社会系科目群	人権論Ⅰ	2	2	(※)「現代社会と法」及び「日本国憲法」の配当年次は、次のとおり ○文学部、生命環境学部 2年次 ○公共政策学部 1年次 (※)教育職員免許状取得希望者は、「日本国憲法」を必ず修得しなければならない。
		人権論Ⅱ	2	2	
		現代社会とジェンダー	2	1	
		現代社会と法	2	(※)	
		日本国憲法	2(※)	(※)	
		現代の政治	2	1	
		国際政治	2	1	
		現代日本と経済	2	1	
		生活と経済	2	1	
		社会学Ⅰ	2	1	
		社会学Ⅱ	2	1	
		現代社会と心	2	1	
		現代京都論	2	2	
	自然と生命系科目群	環境共生教育演習Ⅰ	2	1	
		環境共生教育演習Ⅱ	2	1	
		生命科学講話	2	1	
		人間生物学	2	2	
		宇宙と地球の科学	2	1	
		物理学Ⅰ	2	1	
		物理学Ⅱ	2	1	
		化学Ⅰ	2	1	
		化学Ⅱ	2	1	
		生物学Ⅰ	2	1	
		生物学Ⅱ	2	1	
		数学Ⅰ	2	1	
		数学Ⅱ	2	1	
		情報の科学	2	1	
現代の環境問題	2	2			
現代の食糧問題(隔年開講)	2	1・2			
京都の農林業(隔年開講)	2	1・2			
京都の自然	2	1			
主題研究		1	2～4		

別表②

教養教育科目の履修と用意単位数 (展開教育科目)

区分	科目名	単位数	配当年次	教養教育科目 (展開教育科目) として履修可能な科目 (所属する学科名の下欄に●で示された科目)											
				日本・中国文学科	欧米言語文化学科	歴史学科	公共政策学科	福祉社会学科	生命分子化学科	農学生命科学科	食保健学科	環境・情報科学科	環境デザイン学科	森林科学科	
展開教育科目	日本文学概論 I	2	1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	日本文学概論 II	2	1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	日本語学概論 I	2	1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	日本語学概論 II	2	1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	和漢比較文学概論 I	2	1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	和漢比較文学概論 II	2	1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	中国文学史研究 I	2	1・2		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	中国文学史研究 II	2	1・2		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	京都文化学概論 I	2	1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	京都文化学概論 II	2	1		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	欧米言語文化概論 I	2	1	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	欧米言語文化概論 II	2	2	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	欧米の文化と社会 I	2	1	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	欧米の文化と社会 III a	2	2	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	欧米の文化と社会 III b	2	2	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	欧米言語文化史 I a	2	2	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	欧米言語文化史 I b	2	2	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	欧米から見た京都	2	1	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	日本史概論	2	1	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	日本文化史概論	2	1	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	東洋史概論	2	1	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	東洋文化史概論	2	1	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	西洋史概論	2	1	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	西洋文化史概論	2	1	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	日本美術史 I	2	2	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	日本美術史 II	2	2	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	地域考古学 I	2	2	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	民俗学概論 I	2	3	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	西洋美術史 I	2	3・4	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	東洋美術史 I	2	3・4	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	自然地理学	2	2	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	人文地理学	2	2	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●
	市民参加論	2	1	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●
	哲学概論 I	2	1・2	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●
	倫理学 I	2	1・2	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●
	法律学概論 I	2	2	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●
	経済学概論	2	2	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●
	社会学概論 I	2	2	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●
	教育学概論 I	2	2	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●
	教育学概論 II	2	2	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●
心理学概論 I	2	2	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●	
社会保障論 I	2	3	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●	
社会保障論 II	2	3	●	●	●			●	●	●	●	●	●	●	
行政法 I	2	2	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	
行政法 II	2	2	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	

区分	科目名	単位数	配当年次	教養教育科目（展開教育科目）として履修可能な科目 （所属する学科名の下欄に●で示された科目）										
				日本・中国文学科	欧米言語文化学科	歴史学科	公共政策学科	福祉社会学科	生命分子化学科	農学生命科学科	食保健学科	環境・情報科学科	環境デザイン学科	森林科学科
展開教育科目	環境経済学	2	2	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
	社会政策Ⅰ	2	3	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
	社会政策Ⅱ	2	3	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●
	NPO論	2	3	●	●	●			●	●	●	●	●	●
	生涯学習論Ⅰ	2	1	●	●	●			●	●	●	●	●	●
	生涯学習論Ⅱ	2	1	●	●	●			●	●	●	●	●	●
	教育心理学	2	1	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	青年心理学	2	1	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	障害児(者)教育論	2	2	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	医学一般Ⅰ	2	2	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	地域福祉論	2	2	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	地域社会学	2	2	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	障害者福祉論Ⅰ	2	3	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	障害者福祉論Ⅱ	2	3	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	生活教育論Ⅰ	2	3	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	環境社会学	2	3	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	発達心理学Ⅰ	2	3	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●
	教育行政学	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	森林の科学	2	1	●	●	●	●	●						
	生命の分子化学	2	1	●	●	●	●	●						
	食生活環境論	2	1	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●
	食事学	2	2	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●
	食品化学	2	1	●	●	●	●	●	●	●			●	●
	栄養学総論	2	2	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●
	人間工学	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●
	景観生態学	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●
	色彩学	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●
	住宅・都市行政論	2	3	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●
	環境共生デザイン論	2	3	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●
	基礎化学Ⅰ	2	1	●	●	●	●	●			●			
	基礎生物学Ⅰ	2	1	●	●	●	●	●			●			
	基礎物理学Ⅰ	2	1	●	●	●	●	●			●			
	基礎数学Ⅰ	2	1	●	●	●	●	●	●	●	●			●
	バイオテクノロジー	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●
	動物分子情報学	2	1	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●
	植物生態学	2	2	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●
	果樹園芸学	2	2	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●
	応用昆虫学	2	2	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●
	環境保全型農業論	2	3	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●
	食品機能学	2	3	●	●	●	●	●			●	●	●	●
森林植物学	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
木材組織学	2	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
森林計画学	2	3	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
森林植生学	2	3	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
地球環境学	2	2	●	●	●	●	●			●	●	●	●	
応用微生物学	2	3	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	
有機工業化学	2	3	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	

～主題研究の履修～

★ 主題研究のねらい

主題研究は、「学問の多様化・学際化に対応しつつ、今日の時代と社会を理解するために必要な社会・文化・自然に関する基礎的知識を深め、事象に対する客観的な観察と論理的思考、さらにその結果をまとめて発表できる能力を養成する」ことであり、各学問分野の基礎知識、および原理と方法を学ぶことを目標とし、各学生が主題別履修モデルに沿って学習する中で特に興味を抱いたテーマを自由に取り上げ、主体的発展的に行う課題探求型学習である。

★ 主題別履修モデル

主題別履修モデルとして、以下のとおり9主題が設けられている。

主題	主題のねらい
A 京都学	一千年余ものあいだ都であった京都の歴史・地理、伝統や文化、自然や産業、まちづくりなどについて多面的に学ぶことを通して、京都に対する理解を深めるとともに、各人がこれからの京都を構想していくビジョンの基礎形成として位置づける。
B 環境共生	「環境」という用語が、生産から消費にいたる人間生活のあらゆる局面におけるキーワードとして捉えられるようになって久しい。「共生」という用語も、本来の生物学的使用の限定を越えて人間の社会活動を律するキーワードとして捉えられるようになってきた。環境と共生という二つの言葉を単につなげたのではなく、様々な分野の講義を学習することによって「環境共生」という用語を自ら定義づけることを狙いとしている。
C 文学と文化	ボーダレス化、多文化社会化する現代にあって、私たちは自らの言語や文化に対する理解を深めるとともに、異文化圏の言語・文化への正確かつ共感的に理解し受容することがますます重要になっている。古今東西の文学はこうした理解を促す一助となることから、授業を契機にして多くの文学作品に接してほしい。
D 歴史と地域	現代ほど私たちの歴史観が問われる時代はないであろう。政治・経済・社会といった諸相のもつ現代的課題のどこをとってみても歴史的視点を欠いては解明や解決にはいたらない。自らの国や地域をよく理解し、現代をよりよく生きる上で、現在に至る人間の多様な歩みの事実そのものを真摯に学んでほしい。
E 現代社会	高度情報化社会・大衆化社会・ポスト産業化社会などと形容される現代社会は、人類がかつて経験したことのない速さで変化している。日本では少子高齢化や階層の二極化が進み社会問題が次々と生起しているが、このなかで私たちは主権者、市民としていかに生きるのか、現代社会の仕組みやあり方を学ぶことを通して考えてほしい。
F 人間科学	現代という未曾有の転換期において、解明・解決が待たれる人間の諸問題は複雑多岐にわたっている。それを解きほぐすためには、人間の行動や社会、教育に関する諸科学の総合的協力研究が重要である。ここでは「人間とは何か」という根源的な問いを含んだ学際的・総合的な認識の形成を目的とする。

第2部 京都府立大学の教育活動を考える (10)

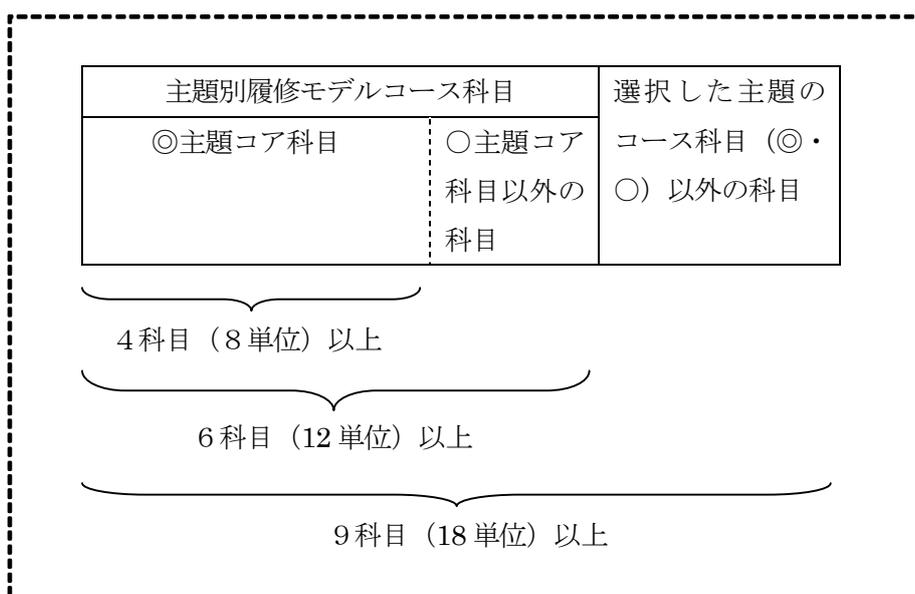
G 生命 と自然	生命現象と生命現象に関わる自然科学、例えば物理学、化学を総合的に学ぶことで、生命を自然科学の観点から学ぶ素養を身につける。また、生命に関わる倫理的および哲学的な問題点を学ぶことにより、多角的な観点から生命現象を捉えられるような素養を身につけることを目的としている。
H くら しと生 命	身近な暮らしのなかの生命科学に関する事柄を学習することにより、現代社会に生きるために必要な生命科学に関する知識を身につけることを目標としている。あわせて、身近な自然環境と人間の暮らしについての知識も身につける。
I 自然 と産業	太古より、人間は自然の資源を利用して生活を営んできた。この生活の営みは、産業革命以降、産業と云う形で自然（天然資源）を大量に消費するに至った。自然の恵みはどこまで享受してもよいのか？現代の生活（産業）は自然を破壊しないと成立しないのか？21世紀をリードしていく諸君に、この難問に取り組んでもらいたい。

★ 主題研究の履修方法

主題研究を履修する場合は、希望する主題別履修モデルのコース科目（別表③に示す「◎」及び「○」の科目）から6科目（12単位）以上を選択履修する。なお、その内4科目（8単位）以上は各モデルにて設定された主題コア科目（「◎」の科目）から選択履修しなければならない。

さらに、別表③に示す全ての科目から任意に選択し、合計で9科目（18単位）以上を履修した上で、「主題研究」のレポートを提出する。

なお、展開教育科目を提供する学科やコースに属する学生の場合、その科目は学科の専門科目として認定されるため、教養教育の単位として認められない。従って、主題研究レポート提出を目標として、履修モデルを設定する場合、必要単位の全てが教養教育科目としての認定を受けられるもので構成する必要がある。



～主題研究の認定～

① 主題研究の認定

主題研究の認定は、学生が主題別履修モデルにしたがって必要単位を履修し、必要単位がすべて「優」の場合、「主題研究」(1単位)のレポートを提出でき、そのレポートを教養教育センターが評価することで行う。

② 主題研究の履修指導

主題別履修モデルと主題研究設置の狙いは、「専門分野外の学問や社会事象に関心を広げ、広い視野と深い教養に基礎づけられた総合的な判断力をもつ市民を育成することを目指す」とされている。したがって、学生の所属する学部学科の教育内容から切り離すことが想定されている。また、この主題別履修モデルは、学生が自主的、主体的な目的意識を有して積極的に科目履修を行うためのものである。

③ 学生が「主題研究」に受講登録し、主題研究レポートを教養教育センターに提出するまでの期間の流れ

- 1 2回生進級時を最も早いケースとして「主題研究」の受講登録ができる。

注) この場合、上記の基準、すなわち「各モデルにて設定されたコース科目の中から主題コア科目を少なくとも4科目を含んで、6科目(12単位)以上を選択履修する。加えて、「基盤教育科目(ただし「スポーツ科学」、「食と健康の科学」、「心の健康」の3科目)」、「総合教育科目」及び「展開教育科目」から任意に選択履修を行い、合計9科目、18単位以上を履修しそれが全て「優」判定であること。」をすでに満たしているか満たせる見込みがあるかで、「主題研究」レポートの提出権が決定する。

- 2 受講登録時に、「履修モデル主題名」と後期試験時に提出を予定しているレポートの「題名」(仮題も認める)を別に定める主題研究審査申請用紙に記入し、学務課教務担当に提出する。
- 3 学務課教務担当では、受講学生の単位取得状況を把握し、「主題研究」レポートの提出権があるかどうかを判定し、不許可の場合は学生に通知する。
- 4 教養教育センターでは、提出された申請書に基づき、レポート作成指導(助言)が適切に行える教員を指定し、学生に通知する。学生は、通知された教員からの助言を得ることができる。

選ばれる教員の範囲は、教養教育センター内に設置される分野別小委員会のうち、展開教育・主題別履修小委員会に属する教員とするが、専門性から適切と判断される場合は、委員以外の教員に依頼することができる。上記のように、「主題研究」に期待される教育効果は、

学生の自主的な学習という学生側の行為に依存するので、ここでいう「指導」とは、参考書の紹介等の「助言」を念頭に置いている。

④ 受講登録後、レポート提出までの流れ

- 5 教養教育センターは、主題研究の受講登録をした学生に、11月末を目処に主題研究レポート作成に関する「中間報告」の提出を求める。中間報告の様式は別途定める。
- 6 受講登録した学生は、後期試験時に「主題研究」レポートを学務課教務担当に提出する。

⑤ レポートの評価と単位認定および表彰等

- 7 教養教育センターでは、常任運営委員と展開教育・主題別履修小委員会の合同で「主題研究」レポート評価を実施する。評価を素点で行う必要があるため、評価基準を設ける。評価方法は、展開教育・主題別履修小委員会であらかじめ議論して定める。

以下は、評価項目の例示である。

表題と内容の適合性、論旨・論理の一貫性、選んだ参考文献の量と読み込みの質、結論の正当性、体裁、など。

1つのレポートについて複数の委員で、このような項目について素点評価し、合計点の順に提出者の中での順位を決定する。

- 8 主題研究1単位取得者には、卒業時に履修モデルコースを明記した教養教育センター長名の「主題別履修モデル履修認定証」を学生に授与する。
- 9 主題研究のレポートの成績優秀者から上位1名から3名を選び、学長名で「主題研究優秀賞」受賞者として賞状をもって表彰する。受賞者に、履歴書の賞罰の項に記入することができる旨、指導する。
- 10 優秀レポートについては、対外的に公表する。公表の方法は、別途定める。

別表③

主題研究における主題別履修モデルコース科目一覧

区分	科目名	単位数	配当年次	主題別履修モデルコース科目 (◎: 主題コア科目)								
				A 京都学	B 環境共生	C 文学と文化	D 歴史と地域	E 現代社会	F 人間科学	G 生命と自然	H くらしと生命	I 自然と産業
基盤教育 科目	スポーツ科学	2	1							○		
	食と健康の科学	2	1								◎	
	心の健康	2	1					○	◎			
総合教育科目	日本の文学と文化Ⅰ	2	2	○		◎	○					
	日本の文学と文化Ⅱ	2	2	○		◎	○					
	アジアの歴史と文化	2	1			◎	◎					
	ヨーロッパの歴史と文化	2	1			◎	◎					
	哲学入門	2	2			○			◎	○		
	現代科学と倫理	2	1						○	◎	○	◎
	人間と建築	2	2			○			○		◎	
	人類生態学	2	1						○	○		
	京都の文学Ⅰ	2	1	◎		◎						
	京都の文学Ⅱ	2	1	◎		○						
	京都の歴史Ⅰ	2	1	◎		○	◎					
	京都の歴史Ⅱ	2	1	◎		○	◎					
	人権論Ⅰ	2	2			○	○	◎	○	○	○	
	人権論Ⅱ	2	2			○	○	○	○	○	○	
	現代社会とジェンダー	2	1					○	○			
	現代社会と法	2	公1、他2					◎				
	日本国憲法	2	公1、他2					○				
	現代の政治	2	1					◎				
	国際政治	2	1					○				
	現代日本と経済	2	1					◎				○
	生活と経済	2	1					○				○
	社会学Ⅰ	2	1					○	◎			
	社会学Ⅱ	2	1					◎	○			
	現代社会と心	2	1					◎	◎		○	
	現代京都論	2	2	◎			○	○				○
	環境共生教育演習Ⅰ	2	1		◎							
	環境共生教育演習Ⅱ	2	1		◎							
	生命科学講話	2	1							◎	◎	◎
	人間生物学	2	2		○					◎	○	
	宇宙と地球の科学	2	1		◎					○		◎
	物理学Ⅰ	2	1							○	○	
	物理学Ⅱ	2	1							○		
	化学Ⅰ	2	1							○	○	
	化学Ⅱ	2	1							○		
	生物学Ⅰ	2	1							◎	◎	
	生物学Ⅱ	2	1							◎	○	
情報の科学	2	1								○		
現代の環境問題	2	2		◎					○	◎	◎	
現代の食糧問題	2	1・2								○	○	
京都の農林業	2	1・2	○	◎						○	○	
京都の自然	2	1	◎	◎						○	○	

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)

区分	科目名	単位数	配当年次	主題別履修モデルコース科目 (◎：主題コア科目)									
				A 京都学	B 環境共生	C 文学と文化	D 歴史と地域	E 現代社会	F 人間科学	G 生命と自然	H くらしと生命	I 自然と産業	
展開 教育 科目	日本文学概論Ⅰ	2	1	○		○							
	日本文学概論Ⅱ	2	1	○		○							
	日本語学概論Ⅰ	2	1	○		○							
	日本語学概論Ⅱ	2	1	○		○							
	和漢比較文学概論Ⅰ	2	1	○									
	和漢比較文学概論Ⅱ	2	1	○									
	中国文学史研究Ⅰ	2	1・2			○							
	中国文学史研究Ⅱ	2	1・2			○							
	京都文化学概論Ⅰ	2	1	○									
	京都文化学概論Ⅱ	2	1	○									
	欧米言語文化概論Ⅰ	2	1			○							
	欧米言語文化概論Ⅱ	2	2			○							
	欧米の文化と社会Ⅰ	2	1			○							
	欧米の文化と社会Ⅲ a	2	2			○							
	欧米の文化と社会Ⅲ b	2	2			○							
	欧米言語文化史Ⅰ a	2	2			○							
	欧米言語文化史Ⅰ b	2	2			○							
	欧米から見た京都	2	1	○									
	日本史概論	2	1	○				○					
	日本文化史概論	2	1	○			○	○					
	東洋史概論	2	1					○					
	東洋文化史概論	2	1				○	○					
	西洋史概論	2	1					○					
	西洋文化史概論	2	1				○	○					
	日本美術史Ⅰ	2	2					○					
	日本美術史Ⅱ	2	2					○					
	地域考古学Ⅰ	2	2					○					
	民俗学概論Ⅰ	2	3					○					
	西洋美術史Ⅰ	2	3・4					○					
	東洋美術史Ⅰ	2	3・4					○					
	自然地理学	2	2			○							
	人文地理学	2	2			○							
	市民参加論	2	1						○				
	哲学概論Ⅰ	2	1・2							○			
	倫理学Ⅰ	2	1・2							○			
	法律学概論Ⅰ	2	2						○				
	経済学概論	2	2						○				
	社会学概論Ⅰ	2	2							○			
	教育学概論Ⅰ	2	2							○			
	教育学概論Ⅱ	2	2							○			
心理学概論Ⅰ	2	2							○				
社会保障論Ⅰ	2	3						○					
社会保障論Ⅱ	2	3						○					
行政法Ⅰ	2	2						○					
行政法Ⅱ	2	2						○					
環境経済学	2	2			○								

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)

区分	科目名	単位数	配当年次	主題別履修モデルコース科目 (◎：主題コア科目)								
				A 京都学	B 環境共生	C 文学と文化	D 歴史と地域	E 現代社会	F 人間科学	G 生命と自然	H くらしと生命	I 自然と産業
展開 教育科目	社会政策Ⅰ	2	3					○				
	社会政策Ⅱ	2	3					○				
	NPO論	2	3					○				
	生涯学習論Ⅰ	2	2					○	○			
	生涯学習論Ⅱ	2	2					○	○			
	教育心理学	2	1						○			
	青年心理学	2	1						○			
	障害児(者)教育論	2	2						○			
	医学一般Ⅰ	2	2						○	○		
	地域福祉論	2	2		○				○			
	地域社会学	2	2		○							
	障害者福祉論Ⅰ	2	3						○		○	
	障害者福祉論Ⅱ	2	3						○		○	
	生活教育論Ⅰ	2	3							○		
	環境社会学	2	3		○							
	発達心理学Ⅰ	2	3							○		
	教育行政学	2	2						○			
	森林の科学	2	1		○							
	生命の分子化学	2	1								○	
	食生活環境論	2	1									○
	食事学	2	2							○		○
	食品化学	2	1		○							○
	栄養学総論	2	2									○
	人間工学	2	2							○		○
	景観生態学	2	2		○							
	色彩学	2	2							○		○
	住宅・都市行政論	2	3						○			○
	環境共生デザイン論	2	3		○							○
	基礎化学Ⅰ	2	1								○	
	基礎生物学Ⅰ	2	1								○	
	基礎物理学Ⅰ	2	1								○	
	基礎数学Ⅰ	2	1								○	
	バイオテクノロジー	2	2								○	○
	動物分子情報学	2	1									○
	植物生態学	2	2		○							
	果樹園芸学	2	2								○	○
	応用昆虫学	2	2		○							
	環境保全型農業論	2	3									○◎
	食品機能学	2	3									○
	森林植物学	2	2		○						○	
木材組織学	2	2									○	
森林計画学	2	3									○	
森林植生学	2	3		○							○	
地球環境学	2	2								○	○	
応用微生物学	2	3								○	○	
有機工業化学	2	3								○	○	

第2部 京都府立大学の教育活動を考える (10)

新教養教育開始に係る履修上の取扱い等について

<新教養教育の対象年次の取扱い>

- 1 『新教養教育』は、平成20年度以降の新入生から適用する。従って、平成19年度以前の入学者及び平成20年度編入学生は対象としない。

<上位年次での履修>

- 2 新入生ゼミナール、情報処理基礎演習について、3年次又は4年次でも履修できるものとする。

<展開教育科目の履修年次>

- 3 展開教育科目は、新学部における専門教育科目として開講される配当年次のとおりのみ履修できるものとする。

↓

- ・配当年次の下位の年次では履修できないものとする。
- ・旧学部の専門教育科目の中に、新学部で開講が予定されている展開教育科目と同一の科目名の科目があったとしても、その科目を展開教育科目として履修できないものとする。

<展開教育科目として履修した場合の教職科目との関係>

- 4 「教科に関する科目」又は「教職に関する科目」に指定されている科目を「展開教育科目」として履修し単位を修得した場合は、展開教育科目（教養教育科目）の単位と教員免許状取得に必要な単位の両方にカウントできる。

<旧教養教育科目の開講措置>

- 5 平成19年度以前の入学者（該当学年に編入学する者を含む）の履修のため、旧教養教育科目を（新科目との同時開講（いわゆる「読替」）方式により）引き続き開講する。
（別添「新旧カリキュラムにおける教養教育科目対照表」参照）

新旧カリキュラムにおける教養教育科目対照表(展開教育科目・主題研究を除く)

現行の教養教育科目			新教養教育における該当科目		
科目名	単位数	配当年次	科目名	単位数	配当年次
文学Ⅰ	2	2	日本の文学と文化Ⅰ	2	2
文学Ⅱ	2	2	日本の文学と文化Ⅱ	2	2
歴史学Ⅰ	2	1	アジアの歴史と文化	2	1
歴史学Ⅱ	2	1	ヨーロッパの歴史と文化	2	1
哲学Ⅰ	2	2	哲学入門	2	2
哲学Ⅱ	2	2			
政治学Ⅰ	2	1	現代の政治	2	1
政治学Ⅱ	2	1	国際政治	2	1
社会学Ⅰ	2	1	社会学Ⅰ	2	1
社会学Ⅱ	2	1	社会学Ⅱ	2	1
法学	2	福1、他2	現代社会と法	2	公1、他2
日本国憲法	2	福1、他2	日本国憲法	2	公1、他2
経済学	4	1	現代日本と経済	2	1
			生活と経済	2	1
数学Ⅰ	2	1	数学Ⅰ	2	1
数学Ⅱ	2	1	数学Ⅱ	2	1
物理学Ⅰ	2	1	物理学Ⅰ	2	1
物理学Ⅱ	2	1	物理学Ⅱ	2	1
化学Ⅰ	2	1	化学Ⅰ	2	1
化学Ⅱ	2	1	化学Ⅱ	2	1
生物学Ⅰ	2	1	生物学Ⅰ	2	1
生物学Ⅱ	2	1	生物学Ⅱ	2	1
スポーツ科学	2	1	スポーツ科学	2	1
スポーツ実習	2	1	スポーツ実習	2	1
食と健康の科学	2	1	食と健康の科学	2	1
現代社会とジェンダー	2	1	現代社会とジェンダー	2	1
現代社会と心	2	1	現代社会と心	2	1
人権論Ⅰ	2	2	人権論Ⅰ	2	2
人権論Ⅱ	2	2	人権論Ⅱ	2	2
現代の食糧問題(隔年開講)	2	1	現代の食糧問題(隔年開講)	2	1・2
現代の環境問題	2	2	現代の環境問題	2	2
人間と建築	2	2	人間と建築	2	2
人間生物学	2	2	人間生物学	2	2
人類生態学	2	1	人類生態学	2	1
自然人類学	2	1			
宇宙と地球の科学Ⅰ	2	1	宇宙と地球の科学	2	1
宇宙と地球の科学Ⅱ	2	1			
情報の科学	2	1	情報の科学	2	1
環境共生教育演習Ⅰ	2	1・2	環境共生教育演習Ⅰ	2	1

現行の教養教育科目			新教養教育における該当科目		
科目名	単位数	配当年次	科目名	単位数	配当年次
環境共生教育演習Ⅱ	2	1・2	環境共生教育演習Ⅱ	2	1
京都の文学Ⅰ	2	1	京都の文学Ⅰ	2	1
京都の文学Ⅱ	2	1	京都の文学Ⅱ	2	1
京都の歴史Ⅰ	2	1	京都の歴史Ⅰ	2	1
京都の歴史Ⅱ	2	1	京都の歴史Ⅱ	2	1
京都の農林業(隔年開講)	2	1	京都の農林業(隔年開講)	2	1・2
京都の自然	2	1	京都の自然	2	1
現代京都論	2	1	現代京都論	2	2
英語ⅠA	2	1	英語A or 英語C	2	1
英語ⅠB	2	1	英語A or 英語C	2	1
英語ⅡA	2	西文1、他2	英語B or 英語D	2	2
英語ⅡB	2	西文1、他2	英語B or 英語D	2	2
英語ⅢA	2	2			
英語ⅢB	2	2			
ドイツ語ⅠA	2	1	ドイツ語ⅠA	2	1
ドイツ語ⅠB	2	1	ドイツ語ⅠB	2	1
ドイツ語ⅡA	2	2	ドイツ語ⅡA	2	2
ドイツ語ⅡB	2	2	ドイツ語ⅡB	2	2
フランス語ⅠA	2	1	フランス語ⅠA	2	1
フランス語ⅠB	2	1	フランス語ⅠB	2	1
フランス語ⅡA	2	2	フランス語ⅡA	2	2
フランス語ⅡB	2	2	フランス語ⅡB	2	2
中国語ⅠA	2	1	中国語ⅠA	2	1
中国語ⅠB	2	1	中国語ⅠB	2	1
中国語ⅡA	2	2	中国語ⅡA	2	2
中国語ⅡB	2	2	中国語ⅡB	2	2
朝鮮語ⅠA	2	1	朝鮮語ⅠA	2	1
朝鮮語ⅠB	2	1	朝鮮語ⅠB	2	1
朝鮮語ⅡA	2	2	朝鮮語ⅡA	2	2
朝鮮語ⅡB	2	2	朝鮮語ⅡB	2	2

新教養教育における新設科目		
科目名	単位数	配当年次
生命科学講話	2	1
現代科学と倫理	2	1
新入生ゼミナール	2	1
情報処理基礎演習	2	1
心の健康	2	1

新教養教育準備委員会の構成
(平成18年10月18日～平成20年3月31日)

委員長		久保康之(教務部長)				
分野		常任 運営委員	分野別小委員会委員(◎長)			
			文学部	福祉社会 学部	人間環境 学部	農学研究科
基盤教育	新入生ゼミ	大場 修 (人間環境 学部)	川瀬貴也	大田直史	木戸康博	◎矢内純太
	基盤情報 教育		—	—	斉藤 学	—
	健康教育		—	—	木戸康博	—
	外国語教育	中 純夫 (文学部)	佐々木昇二	—	—	—
総合教育		吉岡真佐樹 (福祉社会 学部)	藤原英城	長谷川豊	◎佐藤雅彦	寺林 敏
展開教育		牛田一成 (農学 研究科)	岡本隆司	津崎哲雄	深町加津枝	◎川田俊成

②学生による授業評価について

③全学FD研究集会報告

④卒業生および就職先への調査について

教育課程等検討委員会 FD小委員会

委員長 金澤 哲

(1) 学生による授業評価

平成18年度に定められた「京都府立大学 学生による授業評価実施要領」に基づき、前期末および後期末に「学生による授業評価」を実施した。また、同じく「実施要領」に基づき、18年度後期実施分および19年度前期実施分につき、評価とりまとめを行った。

授業評価の方法については、ほぼ前年度と同一であるが、一部変更を行った。具体的には、前期実施分より調査票の区分(3)に「講読科目」を付け加え、「実験・実習・演習・講読科目用」とした。また、調査票の文言を整理したほか、後期実施分からは教員独自の質問項目として調査票の設問6(自由記述欄)を利用できるものとした。また19年度後期実施分の結果返却の際から、参考としてクラス規模別の平均値を添えることとした。

18年度後期実施分および19年度前期実施分の結果については、学科専攻によるまとめ学部別に編集した全学報告書を作成し、評議会による承認を経て本学HP上で公開した。また、実施要領で定められた部分につき、個別報告書を学内閲覧用の本学HPにアップしている。

なお、18年度後期の実施に際しては、別に各学科専攻から「学生による授業評価」実施上の問題点・改善点を指摘してもらい、そのまとめを評議会に報告した。主な指摘は、(a) 調査票の質問項目の妥当性 (b) 実施方法の改善に関わるものであった。

(a) 調査票の質問項目の妥当性では、不適切と思われる文言の指摘の他、いくつかの項目について、質問自体の是非が問われた。

(b) 実施方法の改善では、調査用紙の回収方法の問題が指摘された他、授業規模によって質問を分けるべきという意見や、個々の教員が独自の質問項目を付け加えるようにすべきなどの意見が寄せられた。

これらの指摘や意見については、FD小委員会で検討し、その結果、一部については19年度後期実施分から変更がなされた。

「学生による授業評価」は18年度前期の試行を経て、19年度後期まで着実に実施され、授業改善の手助けとして定着しつつあるものと判断できる。今後は、調査方法の絶えざる点検・改良の他、実施対象の拡大、評価とりまとめにいたるプロセスの迅速化などが課題であろう。

(2) 全学FD集会

本学の全学FD集会は平成12年に始まり、以後毎年開催されている。第8回目となる本年は、開校記念日である11月5日の午後2時30分から5時に第3講義室で開催された。テーマは「大学院における Faculty Development」、参加者は78名であった。

集会では、学長からの挨拶に続き、FD検討小委員会委員長から、「大学院における Faculty Development—経緯とコンテクスト」という報告があり、その後、「大学院教育改革支援プログラム申

請に係る取組の紹介」として20年度4月発足予定の生命環境学研究科応用生命専攻および環境化学専攻からの報告、休憩の後に大学院各研究科から専攻ごとに教育課程編成上の工夫等について報告を受け、最後に質疑応答があった。

報告「大学院における Faculty Development—経緯とコンテクスト」では、大学院設置基準の改正により平成19年4月から大学院におけるFDが義務とされたこと、同じくシラバスおよび評価基準の明示が義務化されたことが説明されるとともに、設置基準改正にいたる経緯およびそのねらい、今後各大学院に求められるFDの方向性について報告された。

生命環境学研究科応用生命専攻および環境化学専攻からの報告では、大学院教育改革支援プログラム申請の際の問題点がFDとの関連から指摘されるとともに、本学における外部資金申請への取組体制について、問題提起がなされた。

各研究科からの報告では、上記2専攻および文学研究科国際文化学専攻を除いた全専攻から、教育課程編成上の工夫や指導体制のあり方等について報告を受けた。

なお、今回のFD集会では参加者に対しアンケート調査を実施し、20名からの回答を得ることができた。質問項目は(a)本日の全学FD集会の報告についての意見・感想、(b)全学FD集会の今後のあり方についての意見・希望、(c)本学におけるFD活動の今後のあり方についての意見・希望の3項目であった。主な回答は以下の通りである。

- (a) 本日の全学FD集会の報告についての意見・感想としては、大学院におけるFD義務化の経緯がよくわかったという意見の他、他専攻の教育への取組を知ることができ、有意義だったという感想が多く見られた。とりわけ、文学研究科国文学・中国文学専攻で実施されている集団指導体制への関心が目立った。一方、集会への批判的意見として、外部資金獲得のための議論が中心になってしまい、本来のFDの議論がなされなかったという意見が複数見られた。
- (b) 全学FD集会の今後のあり方についての意見・希望としては、具体的・技術的な教育改善につながるような集いにすべきという意見が多く見られた。また、そのためにもよりコンパクトな集まりを複数回開催してはどうかという提案もあった。さらに、単なる情報提供・情報交換を超えて、成果の上がる討論ができるようにしてほしい、そのためにも資料を事前に配するなどの工夫がほしいとの意見もあった。その他、人材育成において優れた成果を挙げている教員から話を聞くような企画の希望もあった。
- (c) 本学におけるFD活動の今後のあり方についての意見・希望としては、設置基準改正や法人化、外部評価などの流れを踏まえ、目標・計画から実施・展開さらに点検評価へといったる(いわゆるPDCA)サイクルが組織的に確立されるべきだという意見が見られた。また、単発のFD集会だけでFDを終わらせないためにも、実働力のある専任組織が必要との意見があった。

FD集会時に実施したアンケート調査の結果は、ほぼ上の通りである。FD集会自体の問題点および今後のあり方、さらに本学におけるFD活動のあり方について、重要な論点がほぼ出尽くしている他、具体的な提案も多く、きわめて貴重な調査結果であると言える。

ちなみに、上述の大学院設置基準改正に加え、大学設置基準においても同様の改正が行われ、平成

第2部 京都府立大学の教育活動を考える (10)

20年4月からは学部においても組織的なFD活動が義務化されたほか、シラバスおよび評価基準等の明示が義務とされた。また、京都・大学コンソーシアム京都における種々の取組や他大学のFD活動事例などを見ると、すでに年一度のFD集会を中心とする活動では、大学の組織的FD活動として不十分となってきている。

このように、本学のFD活動は大きな曲がり角を迎えつつある。FD集会を含め、今後のFD活動をどのように構築していくか、上述のアンケート調査の結果などを踏まえ、真剣な議論をすべき時が来ていると言えよう。

(3) 卒業生および就職先への調査

卒業生および就職先への調査は、本年度初めて企画・実施されたものであるが、幸い一定数の回答を得て、意味のある結果を出すことができた。調査にご協力いただいた卒業生ならびに各企業・団体の担当者各位に、あらためて厚くお礼申し上げます。

調査は (a) 本学の教育内容などに関する卒業生へのアンケート調査、(b) 卒業生への評価を中心とする就職先へのアンケート調査、の2種類とし、いずれも12月18日に調査用紙を送付し、1月30日までに回答を投函してくださるよう求めた。

(a) 卒業生調査については平成15年度卒業生を対象とし、各学科専攻から定員の1割を目途に抽出された卒業生に対し、調査用紙を送付した。ただし、本学大学院かどうかを問わず、現在大学院に在籍中の卒業生は除外した。

(b) 就職先への調査は、平成14～18年度に計3名以上の卒業生が就職している企業・団体33および京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会・京都家庭裁判所の計38団体に対し調査用紙を送付した。

なお、今回の実施した調査の質問項目は、FD小委員会が作成し、親委員会である教育課程等検討委員会の承認を経た上で決定されたものである。また、今回の調査対象は同じくFD小委員会が枠組みの提案を行い、教育課程等検討委員会の承認を経た上で、卒業生については各学科専攻へ送付先抽出の依頼を行い、その回答に従って決定されたものである。

それぞれの調査結果は、質問内容とともに本項の最後に掲載することとし、ここでは、まずそれぞれの結果を概括したい。

(a) 卒業生調査の結果について

調査に対する回答は送付先47に対し21であり、回収率は44.7%であった。今回の調査は各学科専攻によって抽出された4年前の卒業生に向けてのものであったが、回答率は50%を割るレベルにとどまった。今後、より大規模に実施する場合は、回答率がさらに下がることが予想される。それを避けるためには、なんらかのインセンティブを準備するなど、一層の工夫が必要であろう。

全学部共通の質問への回答を見ると、まず本学へ入学した理由としては、「公立大学であるから」（「当てはまる」61.9%、「ある程度当てはまる」33.3%）「京都にあるから」（「当てはまる」71.4%、「ある程度当てはまる」19.0%）、「学力水準が合ったから」（「当てはまる」42.9%、「ある程度当てはまる」47.6%）が圧倒的に多い。一方、「就職に有利だと思ったから」（「あまり当てはまらない」23.8%、「当てはまらない」61.9%）の回答が少ないのも、目立った特徴である。

在学当時の勉学その他の取組状況を見ると、総じて授業には熱心に取り組んだとしており（「熱心に取り組んだ」23.8%、「ある程度熱心に取り組んだ」42.9%）、授業外の自己学習も活発である（「熱心に取り組んだ」28.6%、「ある程度熱心に取り組んだ」23.8%）。また、卒業研究に関しては熱心に取り組んだという回答が非常に多かった。（「熱心に取り組んだ」57.1%、「ある程度熱心に取り組んだ」38.1%）卒業研究は満足度も非常に高く（「とても満足だった」47.6%、「ある程度満足だった」42.9%）、併せてその意義を証明していると言えよう。

次に項目別の満足度では、「教師の教育への熱意」への満足度が目立って高く（「とても満足だった」19.0%、「ある程度満足だった」66.7%）、本学の誇るべき特徴を端的に表している。また、同じく「キャンパス環境」への満足度も高かった（「とても満足だった」38.1%、「ある程度満足だった」33.3%）。それに対し、満足度があまり高くなかったのは、研究施設（「やや不満だった」33.3%、「かなり不満だった」23.8%）および情報関連施設（「やや不満だった」33.3%、「かなり不満だった」42.9%）である。

ついで在学中に身につけた能力を尋ねたところ、「現代社会に対する問題意識」（「とても身についた」9.5%、「ある程度身についた」52.4%）、「情報を収集し処理する能力」（「とても身についた」14.3%、「ある程度身についた」61.9%）、「論理的に考える力」（「とても身についた」19.0%、「ある程度身についた」52.4%）、「文章を書く力」（「とても身についた」14.3%、「ある程度身についた」47.6%）などがよく身についたとされる一方、「国際的視野」はあまり身につけていないとの答えであった（「あまり身につけなかった」57.1%、「全く身につけなかった」28.6%）。

また、卒業後に意義を感じたものとしては、やはり卒業研究と専門教育への評価が高く、卒業研究については「とても意義があった」33.3%、「ある程度意義があった」23.8%であり、それ以外の専門教育については「とても意義があった」19.0%、「ある程度意義があった」52.4%であった。一方、「友人との交流」も高い評価を得、「とても意義があった」81.0%、「ある程度意義があった」19.0%で。それに対し、「外国語教育」への評価は厳しく、「あまり意義がなかった」61.9%、「全く意義がなかった」23.8%という結果であった。

就職支援活動については、「ある程度役に立った」との評価を多数から得たのは「大学作成の就職の手引、就職活動アンケート集」であり（47.4%）、「利用しなかった」の回答が目立ったのは、学科専攻企画就職講座であった（61.9%）。また、就職情報室については評価が分かれており、「役に立った」4.8%、「ある程度役に立った」19.0%、「あまり役に立たなかった」28.6%、「役に立たなかった」19.0%であり、「利用しなかった」も28.6%あった。

自由記述欄では、まず「本学の優れている点」を尋ねたところ、「少人数でアットホームな雰囲気」といった内容の答えが目立った。また、「本学が今後改善していくべき点」としては、冷房・教室設備・食堂などの改善を望む意見が複数あった他、より実用的な外国語教育の実施や、就職活動への一層のサポートを望む回答が見られた。さらに、その他の本学への要望としては、知名度を上げるようなイベントを望む声の他、大学の本来的な教育研究を重視し、基礎的な力をつけさせるカリキュラムを行ってほしいとの意見もあった。

ここまで全学部共通項目への回答を紹介してきたが、以下では各学部の専門教育に対する質問項目への回答を見てみたい。質問は学部毎に作成し、出身学部の質問に対する回答を求めた。

まず、回答数を学部別に見ると、文学部6（送付数10）、福祉社会学部5（送付数12）、人間環境学部2（送付数10）、農学部8（送付数15）であった。

第2部 京都府立大学の教育活動を考える (10)

文学部の専門教育への評価では、演習科目への評価が1・2回生時と3・4回生時いずれにおいても高く、1・2回生時の基礎演習・講読科目への評価は「とてもよかった」16.7%、「まあよかった」83.3%、3・4回生時の演習科目への評価は「とてもよかった」33.3%、「まあよかった」66.7%であった。卒論指導についての満足度もおおむね高く（「とてもよかった」66.7%、「まあよかった」16.7%）、教員の熱意への評価も同様であった（「とてもよかった」28.6%、「まあよかった」42.9%）。

一方、総合的に見て文学部で学んだことへの満足度を尋ねたところ、「満足している」16.7%、「ある程度満足している」33.3%に対し「やや不満だった」が50%という結果であった。今回の調査では大学院進学者を除いているため、その影響があったとも考えられるが、この結果については今後の検討が必要である。

自由記述欄では、文学部の今後のあり方について意見を求めた。あまり方向性を変えないでほしいという意見が複数見られた他、就職を視野に入れた講義内容を増やすべきとの意見もあった。

福祉社会学部の専門教育への評価では、カリキュラムへの評価が「ある程度満足だった」100%だったほか、講義・ゼミ・実習への評価もおしなべて高く、全般に高い評価を得たと言って良いであろう。講義については「ある程度満足だった」100%、ゼミについては「とても満足だった」40%、「ある程度満足だった」40%、であり、実習については「とても満足だった」20%、「ある程度満足だった」60%という結果であった。また「教員の授業への態度・熱意」への評価も高く（「とても満足だった」20%、「ある程度満足だった」80%）、これらの結果が福祉社会学部で学んだことへの高い満足感（満足している）40%、「ある程度満足している」60%）につながっているものと思われる。

自由記述欄においては、「実社会にふれる機会を充実させてほしい」、「福祉を学ぼうとしている学生の芽をつみ取ることなく、育ててほしい」などの声が寄せられた。

人間環境学部の専門科目については、回答者が2名しかいなかったため、パーセントは出さずに記すと、「講義」が「とても満足だった」と「やや不満だった」、「実験・実習・演習」は「とても満足だった」と「ある程度満足だった」、「卒業研究」は「とても満足だった」と「やや不満だった」と、ばらつきのある回答となった（問16）。また、「現在役立っていると実感している科目」については実習や演習系の科目が、「もっと勉強しておけばよかったと思う科目」には基礎的・理科的な科目が挙げられている（問18・19）。

ただし、専門教育の授業が「現在どの程度役立っていますか」との設問には、すべての回答者が「ある程度役に立っている」という回答を寄せている（問17）。

一方、専門教育の授業の改善点については、「基礎分野の講義の開設」が「改善すべき」と「改善しなくてもよい」、「実験・実習設備の充実」が「改善すべき」と「できれば改善すべき」、「講義の内容の充実・高度化」が「改善すべき」と「改善しなくてもよい」、「実験・実習・演習の内容の充実・高度化」が「改善すべき」と「できれば改善すべき」、「卒業研究指導の充実」が「改善すべき」と「改善しなくてもよい」、「教員の教授方法の改善」が「改善すべき」と「改善しなくてもよい」といったように、全般に「改善すべき」の方に傾いた結果となった（問21）。

最後に、人間環境学部に対する総合的な満足度は「満足している」と「不満だった」に分かれ（問20）、自由意見では、「学部の方向性としてデザイン性から遠ざかっていることを感じるので寂しい」という意見が寄せられた（問22）。

農学部での専門教育については、「とても身についた」「ある程度身についた」の合計が75%以上

のものは、応用的な講義科目、実験・実習での体験(100%)、演習・卒業研究で指導を受けた内容(100%)、授業以外での教員との交流であった。逆に、「ほとんど身につかなかった」の回答が30%以上のものは、資格に関する授業であった。卒業後、職場などで「役に立っている」「ある程度役に立っている」の合計が75%以上のものは、実験・実習での体験、演習・卒業研究で指導を受けた内容、授業以外での教員との交流であった。逆に、「ほとんど役立っていない」の回答が30%以上のものは、資格に関する授業であった。農学部で学んだことへの満足度は「満足している」「ある程度満足している」の合計が75%以上のものは、応用的な講義科目、実験・実習の内容、演習・卒業研究の指導、教員との関係であった。総合的にみた場合の満足度は、「とても満足している」が25%、「ある程度満足している」が75%であり、満足度は非常に高かった。

農学部が重視すべきこととしては、基礎生物学の体系的教育、統計学の必修化、実務に役立つ内容の教育があげられており、改善すべきこととしては集中講義の過密スケジュールの緩和があげられていた。また、農学部の授業やカリキュラムについては、授業選択幅の拡充、資格の取得、図書館と自習室の充実を望む声が多かった。

以上、農学部卒業生の回答を総括すると、本学における実験・実習の重視、少人数教育、卒業研究の指導等については大変満足しているものの、図書館や自習室等の設備、ならびに、就職支援や資格の取得について改善を望む声が多かった。

各学部毎のまとめは、以上の通りである。どの学部においても教育内容についての評価は良好であり、回答者数が少ないとはいえ、それぞれの教育の質の高さを証明していると言えよう。

(b) 就職先調査の結果について

先に述べたように、就職先への調査は、平成14～18年度に計3名以上の卒業生が就職している企業・団体33および京都府・京都市・京都府教育委員会・京都市教育委員会・京都家庭裁判所の計38団体に対し調査用紙を送付し、回答を求めるという形で行った。その結果、10団体から回答を頂戴し、回収率は25.6%であった。なお、京都家庭裁判所からは、この種の調査に対しては協力できないとのこと返答を頂いた。

回答結果を概観すると、まず回答を頂いた会社・団体の内訳は、建設業(9.1%)、製造業(18.2%)、運輸通信業(9.1%)、金融保険業(18.2%)、サービス業(27.3%)、その他(18.3%)であった。規模別に言うと、従業員数10～100名が10%、100～500名が40%、1000人以上が50%であった。

本学卒業生への評価は、「とても満足している」50%、「ある程度満足している」50%という結果であり、総じて非常に高い評価を受けたと言ってよいであろう。

また、本学卒業生の身につけている能力としては、「論理的に考える力」(「とても身につけている」40%、「ある程度身につけている」50%)、「人前で意見を述べる力」(「とても身につけている」40%、「ある程度身につけている」60%)、「文章を書く力」(「とても身につけている」40%、「ある程度身につけている」60%)、「倫理観」(「とても身につけている」40%、「ある程度身につけている」60%)、「人の話を聞く姿勢」(「とても身につけている」40%、「ある程度身につけている」50%)などが特に高い評価を受けた。

自由記述欄では、「真面目で信念を持った人材が多いのでは」、「全体的な印象としては真面目にコツコツと取り組み、実力をつけていく人材」、「粒のそろった人材」といった評価があり、やはり全体に

第2部 京都府立大学の教育活動を考える（10）

高い評価を受けたと言えよう。

就職先調査は今回が初めての実施であったが、本学卒業生は総じて非常に高い評価を受けることができた。今後はこの種の調査を継続的に実施し、調査の信頼度を高める努力が必要である。また、調査方法をさらに工夫し、回答数を増やす努力も必要であろう。

以上、平成19年度に初めて実施した卒業生調査ならびに就職先調査について、概括してきた。以下、両調査の調査票および回答結果をそのまま記載し、平成19年度FD小委員会の活動報告を終わりにしたい。

平成19年度卒業生及び就職先への調査について

1 調査対象

(1) 卒業生

- ・2003年度（2004年3月）卒業生から、学部・学科・専攻において1割程度を抽出（抽出にあたっては、就職先のバランスを考慮。大学院在籍中のものは除く。）

(2) 就職先

- ・平成14～18年度に計3名以上就職している企業・団体及び京都府・京都市・京都府教委・京都市教委・京都家庭裁判所

2 調査期間

平成19年12月18日、調査票送付。

平成20年1月30日、回答期限。

3 調査票回収状況

区分		送付先	回収数	回収率 (%)
卒業生	文学部	10	6	
	福祉社会学部	12	5	
	人間環境学部	10	2	
	農学部	15	8	
	計	47	21	44.7
就職先		39	10	25.6

調 査 結 果

I あなたご自身についてお尋ねします。

1. あなたの出身学部と入学年をお答えください。

(出身学部)

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
計	21	100.0%	6	28.6%	5	23.8%	2	9.5%	8	38.1%

(入学年度)

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
1998	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
2000	19	90.5%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	6	75.0%
2003	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

2. あなたの性別をお答え下さい。

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
男	8	38.1%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
女	13	61.9%	4	66.7%	3	60.0%	1	50.0%	5	62.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

3. 学生時代、主に自宅から通学していましたか、それとも下宿等から通学していましたか。

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
主に自宅から通った	11	52.4%	2	33.3%	3	60.0%	0	0.0%	6	75.0%
主に下宿等から通った	10	47.6%	4	66.7%	2	40.0%	2	100.0%	2	25.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

4. 京都市立大学への入学を選んだ理由を、以下の項目についてそれぞれお答えください。

○公立大学だから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	13	61.9%	5	83.3%	3	60.0%	1	50.0%	4	50.0%
ある程度当てはまる	7	33.3%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	4	50.0%
あまり当てはまらない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
当てはまらない	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○京都にあるから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	15	71.4%	4	66.7%	4	80.0%	1	50.0%	6	75.0%
ある程度当てはまる	4	19.0%	2	33.3%	0	0.0%	1	50.0%	1	12.5%
あまり当てはまらない	1	4.8%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%
当てはまらない	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○環境がいいから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	3	14.3%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度当てはまる	9	42.9%	1	16.7%	2	40.0%	2	100.0%	4	50.0%
あまり当てはまらない	8	38.1%	4	66.7%	1	20.0%	0	0.0%	3	37.5%
当てはまらない	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○学力水準が合ったから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	9	42.9%	4	66.7%	2	40.0%	1	50.0%	2	25.0%
ある程度当てはまる	10	47.6%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	5	62.5%
あまり当てはまらない	1	4.8%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%
当てはまらない	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○高校の先生に勧められたから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	3	14.3%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度当てはまる	3	14.3%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
あまり当てはまらない	3	14.3%	0	0.0%	2	40.0%	1	50.0%	0	0.0%
当てはまらない	12	57.1%	4	66.7%	1	20.0%	1	50.0%	6	75.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○身近な人に勧められたから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度当てはまる	3	14.3%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%
あまり当てはまらない	3	14.3%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
当てはまらない	15	71.4%	4	66.7%	2	40.0%	2	100.0%	7	87.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○教育・研究内容に魅力を感じたから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	6	28.6%	3	50.0%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
ある程度当てはまる	9	42.9%	1	16.7%	3	60.0%	2	100.0%	3	37.5%
あまり当てはまらない	4	19.0%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
当てはまらない	2	9.5%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○少人数教育だから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	7	33.3%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	1	12.5%
ある程度当てはまる	10	47.6%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	5	62.5%
あまり当てはまらない	3	14.3%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
当てはまらない	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○大学の雰囲気が気に入ったから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	4	19.0%	1	16.7%	2	40.0%	1	50.0%	0	0.0%
ある程度当てはまる	6	28.6%	3	50.0%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
あまり当てはまらない	7	33.3%	1	16.7%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
当てはまらない	4	19.0%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○就職に有利だと思ったから

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
当てはまる	1	4.8%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度当てはまる	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
あまり当てはまらない	5	23.8%	1	16.7%	3	60.0%	1	50.0%	0	0.0%
当てはまらない	13	61.9%	5	83.3%	0	0.0%	1	50.0%	7	87.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

5. 現在の就業状況についてお答え下さい。

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
正規雇用で働いている	17	81.0%	4	66.7%	4	80.0%	2	100.0%	7	87.5%
非正規雇用で働いている(派遣社員・アルバイト等)	3	14.3%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
働いていない	1	4.8%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

6. 現在の職種は以下のどれに当たりますか。

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
農業	1	5.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
林業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
漁業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
鉱業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
建設業	1	5.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%
製造業	4	20.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
電気・ガス・熱供給・水道業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
運輸通信業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
卸売業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
小売業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
金融・保険業	2	10.0%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
不動産業	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
サービス業	2	10.0%	0	0.0%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%
公務	9	45.0%	3	60.0%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
その他	1	5.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	20	100.0%	5	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

7. 勤続年数をお答え下さい

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
4年	5	25.0%	2	40.0%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
3年以上4年未満	3	15.0%	1	20.0%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%
2年以上3年未満	6	30.0%	1	20.0%	1	20.0%	1	50.0%	3	37.5%
1年以上2年未満	4	20.0%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	2	25.0%
1年未満	2	10.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	20	100.0%	5	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

8. あなたは現在の職業に満足していますか。

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
満足している	2	10.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度満足している	12	60.0%	4	80.0%	3	60.0%	2	100.0%	3	37.5%
あまり満足していない	3	15.0%	0	0.0%	2	40.0%	0	0.0%	1	12.5%
満足していない	3	15.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
計	20	100.0%	5	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

9. 転職や離職の経験はありますか。

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
ある	5	23.8%	2	33.3%	2	40.0%	0	0.0%	1	12.5%
ないが、考えている。	6	28.6%	1	16.7%	1	20.0%	1	50.0%	3	37.5%
ない	10	47.6%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	4	50.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

II 在学当時の勉強や活動についてお尋ねします。

10. 以下のことがらに、在学中どの程度取り組んでいましたか。

○授業の課題・予習・復習

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
熱心に取り組んだ	5	23.8%	3	50.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度熱心に取り組んだ	9	42.9%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
あまり熱心に取り組まなかった	5	23.8%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	3	37.5%
熱心に取り組まなかった	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○授業外の自己学習

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
熱心に取り組んだ	6	28.6%	4	66.7%	0	0.0%	1	50.0%	1	12.5%
ある程度熱心に取り組んだ	5	23.8%	1	16.7%	3	60.0%	0	0.0%	1	12.5%
あまり熱心に取り組まなかった	7	33.3%	1	16.7%	1	20.0%	1	50.0%	4	50.0%
熱心に取り組まなかった	3	14.3%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○卒業研究(卒論・卒業制作)

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
熱心に取り組んだ	12	57.1%	4	66.7%	2	40.0%	1	50.0%	5	62.5%
ある程度熱心に取り組んだ	8	38.1%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
あまり熱心に取り組まなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
熱心に取り組まなかった	1	4.8%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○クラブ・サークル活動

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
熱心に取り組んだ	7	33.3%	2	33.3%	2	40.0%	0	0.0%	3	37.5%
ある程度熱心に取り組んだ	6	28.6%	3	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
あまり熱心に取り組まなかった	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	0	0.0%
熱心に取り組まなかった	6	28.6%	1	16.7%	2	40.0%	1	50.0%	2	25.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○ボランティア活動

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
熱心に取り組んだ	2	9.5%	0	0.0%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度熱心に取り組んだ	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
あまり熱心に取り組まなかった	5	23.8%	2	33.3%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
熱心に取り組まなかった	14	66.7%	4	66.7%	2	40.0%	2	100.0%	6	75.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○アルバイト

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
熱心に取り組んだ	4	19.0%	2	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
ある程度熱心に取り組んだ	10	47.6%	2	33.3%	3	60.0%	1	50.0%	4	50.0%
あまり熱心に取り組まなかった	5	23.8%	1	16.7%	2	40.0%	1	50.0%	1	12.5%
熱心に取り組まなかった	2	9.5%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

11. 以下の項目について、どの程度満足していましたか。

○外国語教育以外の教養教育

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	2	9.5%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度満足だった	14	66.7%	4	66.7%	4	80.0%	2	100.0%	4	50.0%
やや不満だった	4	19.0%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
かなり不満だった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○外国語教育

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度満足だった	14	66.7%	4	66.7%	2	40.0%	1	50.0%	7	87.5%
やや不満だった	4	19.0%	0	0.0%	3	60.0%	1	50.0%	0	0.0%
かなり不満だった	3	14.3%	2	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○卒業研究以外の専門教育

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	4	19.0%	2	33.3%	0	0.0%	1	50.0%	1	12.5%
ある程度満足だった	11	52.4%	1	16.7%	4	80.0%	0	0.0%	6	75.0%
やや不満だった	5	23.8%	3	50.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
かなり不満だった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○卒業研究(卒論・卒業制作)

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	10	47.6%	3	50.0%	1	20.0%	0	0.0%	6	75.0%
ある程度満足だった	9	42.9%	3	50.0%	3	60.0%	1	50.0%	2	25.0%
やや不満だった	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	0	0.0%
かなり不満だった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○教師の教育への熱意

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	4	19.0%	2	33.3%	0	0.0%	1	50.0%	1	12.5%
ある程度満足だった	14	66.7%	3	50.0%	5	100.0%	0	0.0%	6	75.0%
やや不満だった	2	9.5%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
かなり不満だった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○勉強に関する相談のしやすさ

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	4	19.0%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
ある程度満足だった	12	57.1%	3	50.0%	4	80.0%	1	50.0%	4	50.0%
やや不満だった	5	23.8%	2	33.3%	1	20.0%	1	50.0%	1	12.5%
かなり不満だった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○勉強以外のことの相談しやすさ

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	1	4.8%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度満足だった	11	52.4%	4	66.7%	2	40.0%	1	50.0%	4	50.0%
やや不満だった	9	42.9%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	4	50.0%
かなり不満だった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○図書館によるサポート

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度満足だった	6	28.6%	3	50.0%	2	40.0%	0	0.0%	1	12.5%
やや不満だった	9	42.9%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
かなり不満だった	4	19.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	3	37.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○研究施設

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	2	9.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
ある程度満足だった	7	33.3%	3	50.0%	0	0.0%	1	50.0%	3	37.5%
やや不満だった	7	33.3%	1	16.7%	4	80.0%	0	0.0%	2	25.0%
かなり不満だった	5	23.8%	2	33.3%	1	20.0%	1	50.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○情報関連施設

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度満足だった	5	23.8%	2	33.3%	1	20.0%	1	50.0%	1	12.5%
やや不満だった	7	33.3%	2	33.3%	2	40.0%	0	0.0%	3	37.5%
かなり不満だった	9	42.9%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	4	50.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○自習環境

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	3	14.3%	1	16.7%	0	0.0%	1	50.0%	1	12.5%
ある程度満足だった	10	47.6%	4	66.7%	3	60.0%	0	0.0%	3	37.5%
やや不満だった	3	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	2	25.0%
かなり不満だった	5	23.8%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	2	25.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○交流スペース

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%
ある程度満足だった	8	38.1%	3	50.0%	1	20.0%	1	50.0%	3	37.5%
やや不満だった	8	38.1%	2	33.3%	2	40.0%	0	0.0%	4	50.0%
かなり不満だった	4	19.0%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○食堂・購買などの施設

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度満足だった	9	42.9%	3	50.0%	3	60.0%	1	50.0%	2	25.0%
やや不満だった	7	33.3%	1	16.7%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
かなり不満だった	4	19.0%	2	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○クラブ・サークル活動用の施設

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	2	10.0%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度満足だった	8	40.0%	2	33.3%	1	25.0%	2	100.0%	3	37.5%
やや不満だった	6	30.0%	1	16.7%	3	75.0%	0	0.0%	2	25.0%
かなり不満だった	4	20.0%	2	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
計	20	100.0%	6	100.0%	4	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○キャンパス環境

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても満足だった	8	38.1%	1	16.7%	2	40.0%	1	50.0%	4	50.0%
ある程度満足だった	7	33.3%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	1	12.5%
やや不満だった	5	23.8%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	3	37.5%
かなり不満だった	1	4.8%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

12. 以下の能力は、在学中にどれほど身につきましたか。

○社会一般に関する知識や関心

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度身についた	9	42.9%	5	83.3%	2	40.0%	1	50.0%	1	12.5%
あまり身につかなかった	9	42.9%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	6	75.0%
全く身につかなかった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○社会問題に関する複合的な視点

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	1	4.8%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度身についた	8	38.1%	2	33.3%	3	60.0%	0	0.0%	3	37.5%
あまり身につかなかった	11	52.4%	4	66.7%	1	20.0%	1	50.0%	5	62.5%
全く身につかなかった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○国際的視野

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度身についた	3	14.3%	3	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
あまり身につかなかった	12	57.1%	2	33.3%	5	100.0%	1	50.0%	4	50.0%
全く身につかなかった	6	28.6%	1	16.7%	0	0.0%	1	50.0%	4	50.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○現代社会に対する問題意識

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度身についた	11	52.4%	4	66.7%	4	80.0%	0	0.0%	3	37.5%
あまり身につかなかった	5	23.8%	1	16.7%	0	0.0%	1	50.0%	3	37.5%
全く身につかなかった	3	14.3%	1	16.7%	0	0.0%	1	50.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○情報を収集し処理する力

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	3	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
ある程度身についた	13	61.9%	4	66.7%	2	40.0%	2	100.0%	5	62.5%
あまり身につかなかった	4	19.0%	1	16.7%	3	60.0%	0	0.0%	0	0.0%
全く身につかなかった	1	4.8%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○論理的に考える力

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	4	19.0%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	3	37.5%
ある程度身についた	11	52.4%	2	33.3%	3	60.0%	2	100.0%	4	50.0%
あまり身につかなかった	6	28.6%	4	66.7%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
全く身につかなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○問題を発見し解決する力

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度身についた	10	47.6%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	4	50.0%
あまり身につかなかった	9	42.9%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
全く身につかなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○人前で報告したり意見を述べる力

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度身についた	11	52.4%	3	50.0%	3	60.0%	1	50.0%	4	50.0%
あまり身につかなかった	7	33.3%	2	33.3%	1	20.0%	1	50.0%	3	37.5%
全く身につかなかった	1	4.8%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○他者と議論する力

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	2	9.5%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	0	0.0%
ある程度身についた	8	38.1%	1	16.7%	3	60.0%	0	0.0%	4	50.0%
あまり身につかなかった	10	47.6%	4	66.7%	1	20.0%	1	50.0%	4	50.0%
全く身につかなかった	1	4.8%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○論点を整理しまとめる力

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	3	14.3%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	1	12.5%
ある程度身についた	10	47.6%	4	66.7%	2	40.0%	0	0.0%	4	50.0%
あまり身につかなかった	8	38.1%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
全く身につかなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○文章を書く力

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても身についた	3	14.3%	0	0.0%	2	40.0%	1	50.0%	0	0.0%
ある程度身についた	10	47.6%	5	83.3%	1	20.0%	1	50.0%	3	37.5%
あまり身につかなかった	7	33.3%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	4	50.0%
全く身につかなかった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

13. 以下の項目について、卒業後どれほど意義がありましたか。

○外国語以外の教養教育

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	1	4.8%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度意義があった	10	47.6%	2	33.3%	3	60.0%	0	0.0%	5	62.5%
あまり意義がなかった	6	28.6%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	1	12.5%
まったく意義がなかった	4	19.0%	1	16.7%	0	0.0%	1	50.0%	2	25.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○外国語教育

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	1	4.8%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度意義があった	2	9.5%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
あまり意義がなかった	13	61.9%	4	66.7%	4	80.0%	1	50.0%	4	50.0%
まったく意義がなかった	5	23.8%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	3	37.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○卒業研究以外の専門教育

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	4	19.0%	1	16.7%	0	0.0%	1	50.0%	2	25.0%
ある程度意義があった	11	52.4%	2	33.3%	5	100.0%	0	0.0%	4	50.0%
あまり意義がなかった	4	19.0%	3	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
まったく意義がなかった	2	9.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○卒業研究(卒論・卒業制作)

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	7	33.3%	2	33.3%	2	40.0%	0	0.0%	3	37.5%
ある程度意義があった	5	23.8%	2	33.3%	0	0.0%	1	50.0%	2	25.0%
あまり意義がなかった	8	38.1%	2	33.3%	3	60.0%	1	50.0%	2	25.0%
まったく意義がなかった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○授業外の自己学習

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	9	42.9%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	3	37.5%
ある程度意義があった	7	33.3%	2	33.3%	3	60.0%	0	0.0%	2	25.0%
あまり意義がなかった	4	19.0%	1	16.7%	0	0.0%	1	50.0%	2	25.0%
まったく意義がなかった	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○クラブ・サークル活動

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	7	36.8%	2	33%	2	50.0%	0	0.0%	3	42.9%
ある程度意義があった	5	26.3%	2	33%	0	0.0%	1	50.0%	2	28.6%
あまり意義がなかった	5	26.3%	1	17%	2	50.0%	1	50.0%	1	14.3%
まったく意義がなかった	2	10.5%	1	17%	0	0.0%	0	0.0%	1	14.3%
計	19	100.0%	6	100%	4	100.0%	2	100.0%	7	100.0%

○教職員との交流

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	4	19.0%	1	16.7%	0	0.0%	1	50.0%	2	25.0%
ある程度意義があった	12	57.1%	4	66.7%	4	80.0%	0	0.0%	4	50.0%
あまり意義がなかった	3	14.3%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	1	12.5%
まったく意義がなかった	2	9.5%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○友人との交流

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	17	81.0%	5	83.3%	3	60.0%	2	100.0%	7	87.5%
ある程度意義があった	4	19.0%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	1	12.5%
あまり意義がなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
まったく意義がなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○ボランティア活動

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	3	15.0%	1	16.7%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度意義があった	2	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
あまり意義がなかった	9	45.0%	2	33.3%	3	60.0%	1	100.0%	3	37.5%
まったく意義がなかった	6	30.0%	3	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
計	20	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	1	100.0%	8	100.0%

○アルバイト

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
とても意義があった	5	25.0%	2	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	3	37.5%
ある程度意義があった	9	45.0%	1	16.7%	4	80.0%	1	100.0%	3	37.5%
あまり意義がなかった	5	25.0%	2	33.3%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
まったく意義がなかった	1	5.0%	1	16.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	20	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	1	100.0%	8	100.0%

14. 大学が行っている就職支援活動についてお尋ねします。
以下の項目について、どのくらい役に立ちましたか。

○就職情報室

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
役に立った	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度役に立った	4	19.0%	1	16.7%	1	20.0%	0	0.0%	2	25.0%
あまり役に立たなかった	6	28.6%	4	66.7%	1	20.0%	1	50.0%	0	0.0%
役に立たなかった	4	19.0%	0	0.0%	2	40.0%	0	0.0%	2	25.0%
利用しなかった	6	28.6%	1	16.7%	1	20.0%	1	50.0%	3	37.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○就職ガイダンス・就職講座等

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
役に立った	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%
ある程度役に立った	8	38.1%	3	50.0%	2	40.0%	1	50.0%	2	25.0%
あまり役に立たなかった	7	33.3%	3	50.0%	2	40.0%	0	0.0%	2	25.0%
役に立たなかった	2	9.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%
利用しなかった	3	14.3%	0	0.0%	1	20.0%	1	50.0%	1	12.5%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○学科(専攻)企画就職講座

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
役に立った	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	0	0.0%
ある程度役に立った	1	4.8%	0	0.0%	1	20.0%	0	0.0%	0	0.0%
あまり役に立たなかった	6	28.6%	4	66.7%	2	40.0%	0	0.0%	0	0.0%
役に立たなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
利用しなかった	13	61.9%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	8	100.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

○大学作成の就職の手引、就職活動アンケート集

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
役に立った	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度役に立った	9	47.4%	2	33.3%	3	60.0%	1	50.0%	3	50.0%
あまり役に立たなかった	3	15.8%	2	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	1	16.7%
役に立たなかった	2	10.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	33.3%
利用しなかった	5	26.3%	2	33.3%	2	40.0%	1	50.0%	0	0.0%
計	19	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	6	100.0%

○内定先等に対する大学推薦状

	計		文学部		福祉社会学部		人間環境学部		農学部	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
役に立った	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
ある程度役に立った	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
あまり役に立たなかった	3	14.3%	1	16.7%	1	20.0%	1	50.0%	0	0.0%
役に立たなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
利用しなかった	18	85.7%	5	83.3%	4	80.0%	1	50.0%	8	100.0%
計	21	100.0%	6	100.0%	5	100.0%	2	100.0%	8	100.0%

9 転職や離職の経験はありますか。

「(1) ある」の理由

- ・前職から違う仕事をしてみたかったから (文学部)
- ・結婚を控えており、勤務を継続するには無理があったため (文学部)
- ・体調悪化のため (福祉社会学部)
- ・一身上の都合 (農学部)

「(2) ないが、考えている」の理由

- ・結婚して転居するため (文学部)
- ・自分が将来進みたい方向性と少しズレがある (人間環境学部)
- ・休みが少ない、昇給が見込めない (農学部)
- ・サービス残業が多いから (農学部)

15 本学のあり方について、自由にご意見をお書きください。

(本学の優れている点、変えずに残していくべき点など)

- ・環境・立地の良さがまず優れている点として挙げられる。図書館や講義棟にしても緑が多く、静かな環境は勉学に集中するには最適である。2003年からはエアコンも入り快適に講義が受けられるようになり感謝している。今後もこの環境は守り抜いてほしい
- 次に、実学志向等から、すぐに役に立たないものは意味がないと思われる風潮のなか、文学、史学で高いレベルを維持していることも優れている。
- 今回の公立大学法人化によって、外部評価や国の圧力が強まると思うが、それに屈せず、昔ながらの良い点は何が何でも残してほしい。(文学部)
- ・少人数でアットホームな雰囲気 (文学部)
- ・少人数で学びやすい雰囲気 (文学部)
- ・少人数で学べる環境
国文学・中国文学を複合的に学べる環境 (文学部)
- ・少人数教育は優れていると思います。
府大の雰囲気はそのまま残した方が良いと思います。(文学部)
- ・少人数教育 (文学部)
- ・授業やゼミを少人数で実施できる点
勉学に適した静かな環境 (福祉社会学部)
- ・少人数教育 (ゼミの少人数制)、教員との距離の近さ、アットホームさ
緑がたくさんあるところ、歴史を感じる校舎 (福祉社会学部)
- ・自然がたくさんある環境
少人数制の授業 (福祉社会学部)
- ・学内環境と自己の自由を尊重している点 (人間環境学部)
- ・少人数教育で先生方との距離が近いところは非常によかったですと思います。
緑豊かで落ち着いた雰囲気の環境もすばらしいと思います。(人間環境学部)
- ・教授と生徒が近く話がしやすい。(農学部)
- ・少人数制 (農学部)

第2部 京都市立大学の教育活動を考える (10)
卒業生調査2007(全学部共通・記述)

- ・アットホームさ (農学部)
- ・華美でなく、学生らしい落ち着いた雰囲気だと思います。学生を集めることも大切だと思いますが、人気取りに走るのではなく、府大だけのまじめさ、誠実さ、コツコツと地道に研究できる環境を守ってほしいと思います。府大は品性のあるすばらしい大学だと思います。
(農学部)
- ・研究室で、先生に対する生徒の数が少ないので、深く指導してもらえ、研究に集中できる点。
トレーニング室が充実しているところ。(農学部)
- ・人数が少ないので、先生一人に対する学生の数が少ないこと (農学部)
- ・教員と学生間の距離の近さ (農学部)

(本学が今後改善していくべき点など)

- ・基礎的な能力を身につけるためのプレゼンテーションや議論ができる授業、また語学においてはテキストの翻訳だけでなく、作文・文法・構文などの授業もあったらいいと思う。(文学部)
- ・施設の整備 (文学部)
- ・冷房 (エアコン) を導入してほしい。
学祭に力を入れる。
就職活動に対するサポート
(現在、京都大学の施設で働いており、そこで行われる就職ガイダンスを見ていると、国立と公立の違いがよくわかります。また、私立もその点に関しては優れていると当時から友人に聞いていました。)(文学部)
- ・空調設備 (文学部)
- ・就職に対する支援 (ガイダンス等を多数開催する等) をもっと積極的に行っていくべきだと思います。私立大学の中には、公務員試験の対策をしてくれるところもあるそうです。(例：公務員試験予備校の講師が大学に来て授業を行う。価格は、通常価格より学生ということで優遇される)(文学部)
- ・就職に対する支援 (学科の教員が積極的に支援すべき)
広報活動
施設の充実 (文学部)
- ・教養科目、専門科目問わず、外国語科目を充実させてほしい。(例えば、単に文章を読むだけでなく、書く、話す能力を鍛える内容にしていく、など)(福祉社会学部)
- ・外国語教育の少人数制。会話を学んだり、実践的な内容にしてほしい、(英文科以外)
図書館の増書、スペース拡充、インターネット、パソコンの台数増加
バリアフリー化
冷暖房完備 (福祉社会学部)
- ・講義室・食堂などの施設の改善 (福祉社会学部)
- ・教授間での人間関係を卒論発表時に露呈してしまう点
自らの専門分野以外のことに無関心であるにもかかわらず、見当違いの質問をする教授が多かった。
学部の方向性の不透明感 (人間環境学部)

第2部 京都府立大学の教育活動を考える (10)
卒業生調査2007(全学部共通・記述)

- ・図書館等施設の充実 (農学部)
- ・論文数、つまり研究室のレベルアップ (農学部)
- ・IT化、全学生への平等な就職サポート (農学部)
- ・私自身は取らなかったのですが、教員免許を取るにあたり、講義のスケジュールが不親切なことが多く、大変だったと聞きました。
また、自習スペースが少なく試験期間は混雑しました。
大学院への進学も多くなっているかと思いますが、大学院大学として学業の質は落とさないでほしいと思います。(農学部)
- ・研究に力を入れてもらいたい。有名な研究者を招いて講演してもらったりしてもいいと思います。それと、ドクターの学生が少なすぎるので、増やすための改善を希望
学食と学生会館以外に自由に使える、話をするための場所があっても良いと思います。(農学部)
- ・最低限の冷暖房完備、夏にもものすごく暑かった記憶があります。(農学部)
- ・図書館の蔵書環境 (農学部)

(その他、本学についての要望など)

- ・大学改革・法人化で今まで以上に現場は大変になっていると思います。教職員の削減、学部の再編等で大変な激務にみまわれ、本来的な教育・研究活動に支障をきたす事態になっているとも聞きます。
(大学に対して意見するのもおかしいかもしれないが) 本末転倒の大学改革には反対です。予算は削られ、学費は高騰し、教育の質は劣化するばかりです。ただ、決まってしまったことは仕方がないので、大学としてはあまり外部の視点や評価を気にせず(無理かもしれないが)、教育と研究の本来業務に力を入れて、学生にとっても、働く教職員にとってもいいといえる大学であってほしいと考えます(文学部)
- ・努力している学生を正當に評価してほしい。
試験の点数のみで判断するのはどうかと思う。(文学部)
- ・施設が古いので、新しくできるなら新しくした方が良いと思います。(文学部)
- ・安易に資格取得や就職に教育活動を結びつけさせるのではなく、将来どのような進路を選ぶことになっても十分通用し、さらに各人の持つ能力をさらに伸ばしていけるような基礎的な力を身につけさせるようなカリキュラム編成、教育活動を行ってほしい。(福祉社会学部)
- ・学園祭もどこか盛り上がりにかける気がする。(私は一度も参加しなかった)
たとえば、同志社がクリスマスの時期、ツリーをイルミネーションするように、何か一時期でもいいので、目玉的なイベント、メディアにも取り上げてもらえるようなものを考え、知名度を上げてほしい。(福祉社会学部)
- ・食堂の充実
授業の選択性、選択の幅を広げてほしかった(他研究室、他学部学科)(農学部)
- ・真面目な学生が多いと思います。そのため、厳しくして必死に部今日する環境にしても、ついてくると思います。外に出ると、府大はマイナーで、実力を示していかないとダメです。
楽にするよりも実力がつく方向へとシフトして下さい。(農学部)

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)
卒業生調査2007(全学部共通・記述)

- ・「農学部」という名前がなくなるのを寂しく思います。
老朽化の進む校舎もありますが、大学の味として今のまま使ってもらいたいなと思ってしまいます。
府民の方が散歩して通ったりという風通しのよい校風は続いてほしいです。(農学部)
- ・就職活動でOBさんの力に頼りにくいのが本学の弱点だと思う。学部・学科の名前を新しくして先端の学問だと宣伝するのも良いが、農芸化学とか林学の名前のままにしておく方が、企業からもわかりやすいし、OBさんからしても先輩・後輩のパイプが作り易い気がします。
就活には不利な本学ですが、他の私学みたいに就活予備校のようにしてもらいたくないです。
研究に没頭した結果、就職もきちんとできる大学にしてもらいたいです。(農学部)
- ・図書館の本が少ない。自習できる席をもっと増やしてほしい。(農学部)

Ⅲ 文学部卒業の方に、専門教育についてお尋ねします。

16. あなたが受けた専門教育は、現在どの程度役立っていますか。

	計	
役立っている	1	16.7%
ある程度役立っている	1	16.7%
あまり役立っていない	2	33.3%
役立っていない	2	33.3%
計	6	100.0%

19. 総合的にみて、文学部で学んだことの満足度はどうですか。

	計	
満足している	1	16.7%
ある程度満足している	2	33.3%
やや不満だった	3	50.0%
不満だった	0	0.0%
計	6	100.0%

20. あなたが、在学中に受けた専門教育を評価してください。

○1・2回生時の講義・概論

	計	
とてもよかった	1	16.7%
まあよかった	3	50.0%
あまりよくなかった	1	16.7%
よくなかった	1	16.7%
計	6	100.0%

○1・2回生時の基礎演習・講読

	計	
とてもよかった	1	16.7%
まあよかった	5	83.3%
あまりよくなかった	0	0.0%
よくなかった	0	0.0%
計	6	100.0%

○3・4回生時の講義・研究

	計	
とてもよかった	3	50.0%
まあよかった	2	33.3%
あまりよくなかった	1	16.7%
よくなかった	0	0.0%
計	6	100.0%

○3・4回生時の演習科目

	計	
とてもよかった	2	33.3%
まあよかった	4	66.7%
あまりよくなかった	0	0.0%
よくなかった	0	0.0%
計	6	100.0%

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)
卒業生調査2007(文学部・選択)

○実習科目

	計	
とてもよかった	2	40.0%
まあよかった	3	60.0%
あまりよくなかった	0	0.0%
よくなかった	0	0.0%
計	5	100.0%

○卒論指導

	計	
とてもよかった	4	66.7%
まあよかった	1	16.7%
あまりよくなかった	1	16.7%
よくなかった	0	0.0%
計	6	100.0%

○授業の方法

	計	
とてもよかった	2	33.3%
まあよかった	1	16.7%
あまりよくなかった	2	33.3%
よくなかった	1	16.7%
計	6	100.0%

○教員の教育への熱意

	計	
とてもよかった	2	28.6%
まあよかった	3	42.9%
あまりよくなかった	1	14.3%
よくなかった	1	14.3%
計	7	100.0%

(複数回答あり)

○図書資料の充実度

	計	
とてもよかった	0	0.0%
まあよかった	3	50.0%
あまりよくなかった	3	50.0%
よくなかった	0	0.0%
計	6	100.0%

○情報機器の整備状況

	計	
とてもよかった	0	0.0%
まあよかった	2	33.3%
あまりよくなかった	3	50.0%
よくなかった	1	16.7%
計	6	100.0%

17 専門教育の授業で、「とってよかった」と思っている授業を、最大3つまで挙げてください。

- ・国文学研究
- ・中国文学研究
- ・アメリカ文学演習ⅡB
- ・アメリカ文学研究Ⅱ
- ・英作文
- ・日本史古文書講読
- ・日本史概論
- ・民俗学概論(2)
- ・西洋史料講読
- ・西洋史演習
- ・東洋史演習
- ・国際文化論
- ・欧米文化基礎講読Ⅰ
- ・アジア文化基礎講読Ⅰ
- ・アジア文化演習Ⅰ
- ・中国語表現法

18 あなたが在学中に「とっておけばよかった」と思う授業を、最大3つまで挙げてください。

- ・経済学
- ・日本古文書講読
- ・日本語教育法
- ・博物館概論
- ・博物館学各論

21 京都市立大学文学部の今後のあり方に関して、自由にご意見をお書きください。

- ・全体としては人文系の学部として、敢えて今までと方向性を変えずに研究・教育活動をしてほしい。

ただ、部分的には変えていくべき点もあると考える。まず、語学の授業はこれまでの講読のみならず、4回生の卒論等に向けて、作文、構文、文法、日本語にはない特有の言い回しなどを体系的に学べるシステムにすればいいと思う。

そして、専門科目については、現在の文学作品を精読するという手法を基本としながらも、文学理論や歴史的な流れ、周辺の人文科学の基礎的講義もあつたらいいと思う。また、同じ文学科として1・2回生のうちは国文学・中国文学専攻との共通講義、文学というものの基礎的研究法を教える講義を設けてほしい。

また、少人数制という環境を生かし、レポート発表やプレゼンテーションをできるだけ授業の中にとり入れて、幅広い力が身につくようなカリキュラムにしたらいいと思う。

入学直後に行われてきた、教員と学生の府立ゼミナールハウスでの泊まりの親交合宿は絶対に廃止しないでほしい。(今でも実施しているのでしょうか?)

- ・文学部とはいえ、もっと情報処理について学べる授業があっても良いと思う。

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)
卒業生調査2007(文学部・記述)

- ・実生活に直接結びつくことは少ないが、授業を通じて「物事を多角的に見る」「過程から結果をとらえる」ということを学べたと思う。
少人数制だからこそ、深く学べたこともあった。
- ・文学の知識を深めていきたい学生にとっては、現在のカリキュラムも良いと思うが、現実問題として、多くの学生が文学部で学んだ内容が活かされる職業に就いているわけではないと思う。
(学んだ内容と関係ない仕事に就いている。)
文学を極めることは、文学部の使命であるので、尊重されるべきであるが、学生の就職も視野に入れた講義内容を増やすことが大事だと思われる。そうすることで、学生の質を維持することにつながるのではないだろうか。
- ・府立であるならば、京都府の歴史、文化に特化した学科があってもよいと思う。

Ⅲ 福祉社会学部の卒業生の方に、専門教育についてお尋ねします。

16. 福祉社会学部に在学中、あなたは次の事柄についてどの程度満足していましたか。

○学部のカリキュラム全般

	計	
とても満足だった	0	0.0%
ある程度満足だった	5	100.0%
やや不満だった	0	0.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

○専門科目の講義

	計	
とても満足だった	0	0.0%
ある程度満足だった	5	100.0%
やや不満だった	0	0.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

○専門科目の演習(ゼミ)

	計	
とても満足だった	2	40.0%
ある程度満足だった	2	40.0%
やや不満だった	1	20.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

○専門科目の実習

	計	
とても満足だった	1	20.0%
ある程度満足だった	3	60.0%
やや不満だった	1	20.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

○教員の授業への態度・熱意

	計	
とても満足だった	1	20.0%
ある程度満足だった	4	80.0%
やや不満だった	0	0.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

○授業以外での教員との交流

	計	
とても満足だった	0	0.0%
ある程度満足だった	5	100.0%
やや不満だった	0	0.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

○講義室・ゼミ室などの設備

	計	
とても満足だった	0	0.0%
ある程度満足だった	2	40.0%
やや不満だった	3	60.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

○情報機器の整備

	計	
とても満足だった	0	0.0%
ある程度満足だった	1	20.0%
やや不満だった	4	80.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

○図書資料室等の設備

	計	
とても満足だった	0	0.0%
ある程度満足だった	2	40.0%
やや不満だった	3	60.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

17. 次の能力は、専門教育を通じてどの程度身についたでしょうか。

○法学や経済学に関する知識

	計	
身についた	0	0.0%
ある程度身についた	4	66.7%
あまり身につけていない	2	33.3%
身につけていない	0	0.0%
計	6	100.0%

(複数回答あり)

○教育学、心理学、社会学などに関する知識

	計	
身についた	1	20.0%
ある程度身についた	3	60.0%
あまり身につけていない	1	20.0%
身につけていない	0	0.0%
計	5	100.0%

○社会学に関する知識

	計	
身についた	1	20.0%
ある程度身についた	3	60.0%
あまり身につけていない	1	20.0%
身につけていない	0	0.0%
計	5	100.0%

20. 総合的にみて、京都府立大学福祉社会学部で学んだことに満足していますか。

	計	
満足している	2	40.0%
ある程度満足している	3	60.0%
やや不満だった	0	0.0%
不満だった	0	0.0%
計	5	100.0%

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)

卒業生調査2007(福祉社会学部・記述)

18 専門教育(教職関連科目を含む)のなかで、受講して有益だったと考える講義・演習(ゼミ)を、最大で3つまで挙げてください。

- ・ 専門演習 I
- ・ 教育制度論
- ・ 教育行政学
- ・ 社会福祉援助技術総論 (2)
- ・ 中村ゼミ
- ・ 津崎ゼミ
- ・ 武元ゼミ (今は無いですが)
- ・ 老人福祉論
- ・ 障害者福祉論
- ・ 社会保障論
- ・ 財政学
- ・ 福祉経済論

19 在学中に、もっと学んでおくべきだった、あるいは学びたかった授業科目や学問分野・領域を、最大で3つまで挙げてください。福祉社会学部で開講されていない科目や学問分野でも結構です。

- ・ 福祉関係の講義・実習
- ・ 社会保障論
- ・ 経済学 (概論はジェンダーのことばかりで、社会に出て役立たなかった)
- ・ 法学 (もっと深く細かく学べばよかった)
- ・ 心理学 (2) (就職してから、もっと学べばと思った)
- ・ 福祉経済論
- ・ 日本経済論
- ・ ケースワーク
- ・ 障害児 (者) 教育論
- ・ 臨床心理学

20 福祉社会学部(来年度から公共政策学部公共政策学科および福祉社会学科に改編されます)の教育活動全般について、自由に意見をお寄せ下さい。改善すべき点、優れた点、講義・演習・実習の在り方など、どのようなことでも結構です。

- ・ 「社会」を対象とする学部である以上は、何らかの形で実社会にふれる機会を充実させてほしい。
これまでの福祉社会学部の良さのひとつは、学部内のどのような分野の学問・授業も自由に選択し、学べることにあると思うので、学科が2つに改編されても、このことはできるだけ残してほしい。
- ・ ゼミの少人数制は続けてほしい。
授業の中で (専門科目で) 実際に働いて活躍している方に来ていただきお話を聞いたことは有益でした。見学に行ったりするのも良かったです。
名前は変わっても、「福祉社会を創るには」を考え続けることのできる学部にしてください。福祉を志す人間が減ってきている現在、決して、福祉を学ぼうとしている学生の芽をつみとってしまうことのないように、育てていってあげていただきたいです。期待しています。

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)

卒業生調査2007(福祉社会学部・記述)

- 福祉関係のビデオをたくさん観て、人生の幅が広がったように思う。ただ、同じような内容のものが多かったので片寄った思想になりかねないように思っていた。様々な角度から切り込んだ内容を学んだ方がいいように思う。
- 学部名は変える必要はなかったと思う。
各専門科目の講義内容として、テキストやビデオを多用するものはあまり要らないと思う。そんな内容は自分だけでも勉強しようと思えばいくらでも出来る。それよりももっと、その教授なりが研究している事柄や、テキストの勉強だけではわからない(学べない、読みとれない)部分を講義するべき。授業ではなく講義であること。それでないと大学の意義がない。
たまに適当な講義をする方がいるので、しっかりするように。

Ⅲ 人間環境学部の卒業生の方に、専門教育についてお尋ねします。

16. あなたは以下の専門科目にどの程度満足していましたか。

○専門科目（講義）

	計	
とても満足だった	1	50.0%
ある程度満足だった	0	0.0%
やや不満だった	1	50.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	2	100.0%

○専門科目（実験・実習・演習）

	計	
とても満足だった	1	50.0%
ある程度満足だった	1	50.0%
やや不満だった	0	0.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	2	100.0%

○卒業研究（卒論・卒業制作）

	計	
とても満足だった	1	50.0%
ある程度満足だった	0	0.0%
やや不満だった	1	50.0%
かなり不満だった	0	0.0%
計	2	100.0%

17. あなたが受けた専門教育の授業は、現在どの程度役立っていますか。

	計	
役立っている	0	0.0%
ある程度役立っている	2	100.0%
あまり役立っていない	0	0.0%
役立っていない	0	0.0%
計	2	100.0%

20. 総合的にみて、人間環境学部で学んだことの満足度はどうですか。

	計	
満足している	1	50.0%
ある程度満足している	0	0.0%
やや不満だった	0	0.0%
不満だった	1	50.0%
計	2	100.0%

21. あなたが、在学中に受けた専門教育の授業で、改善してほしいと思ったことはどんなことですか。

○基礎分野の講義の開設

	計	
改善すべき	1	50.0%
できれば改善すべき	0	0.0%
改善しなくてもよい	1	50.0%
まったく改善の必要はない	0	0.0%
計	2	100.0%

○実験・実習設備の充実

	計	
改善すべき	1	50.0%
できれば改善すべき	1	50.0%
改善しなくてもよい	0	0.0%
まったく改善の必要はない	0	0.0%
計	2	100.0%

○専門科目（講義）の内容の充実・高度化

	計	
改善すべき	1	50.0%
できれば改善すべき	0	0.0%
改善しなくてもよい	1	50.0%
まったく改善の必要はない	0	0.0%
計	2	100.0%

○専門科目（実験・実習・演習）の内容の充実・高度化

	計	
改善すべき	1	50.0%
できれば改善すべき	1	50.0%
改善しなくてもよい	0	0.0%
まったく改善の必要はない	0	0.0%
計	2	100.0%

○卒業研究指導の充実

	計	
改善すべき	1	50.0%
できれば改善すべき	0	0.0%
改善しなくてもよい	1	50.0%
まったく改善の必要はない	0	0.0%
計	2	100.0%

○教員の教授方法の改善

	計	
改善すべき	1	50.0%
できれば改善すべき	0	0.0%
改善しなくてもよい	1	50.0%
まったく改善の必要はない	0	0.0%
計	2	100.0%

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)
卒業生調査2007(人間環境学部・記述)

18 在学中に勉強した専門教育の授業で、現在「役立っている」と実感している科目名を、最大で3つまで挙げてください。

- ・臨床栄養学
- ・調理学実習
- ・給食管理実習
- ・建築計画
- ・デザイン関連の授業
- ・演習課題

19 あなたが在学中に、もっと勉強しておけばよかったと思う科目名を、最大で3つまで挙げてください。

- ・調理学
- ・生化学
- ・解剖生理学
- ・構造力学

21 あなたが、在学中に受けた専門教育の授業で、改善してほしいと思ったことはどんなことですか。

- ・あまり実務で生かされない研究系の授業が多かった。従って、デザイン、建築に関する授業に力を入れていない点に不満があった

22 京都府立大学人間環境学部(来年度から生命環境学部改編されます)の教育活動全般に関して、自由にご意見をお寄せください。改善すべき点、優れた点、講義・演習・実験実習のあり方など、どのようなことでも結構です。

- ・デザインに携わる仕事についている者からすれば、学部の方向性としてデザイン性から遠ざかっていることを感じますので寂しい話です。

Ⅲ 農学部の卒業生の方に、専門教育についてお尋ねします。

16. あなたが農学部で学んだことは、どの程度身に付きましたか。

○基礎的な講義科目（共通専門教育科目及び必修科目）で得た知識

	計	
とても身に付いた	2	25.0%
ある程度身に付いた	2	25.0%
あまり身に付かなかった	4	50.0%
ほとんど身に付かなかった	0	0.0%
計	8	100.0%

○応用的な講義科目（選択科目）で得た知識

	計	
とても身に付いた	1	12.5%
ある程度身に付いた	6	75.0%
あまり身に付かなかった	1	12.5%
ほとんど身に付かなかった	0	0.0%
計	8	100.0%

○実験・実習での体験

	計	
とても身に付いた	5	62.5%
ある程度身に付いた	3	37.5%
あまり身に付かなかった	0	0.0%
ほとんど身に付かなかった	0	0.0%
計	8	100.0%

○演習・卒業研究で指導を受けた内容

	計	
とても身に付いた	5	62.5%
ある程度身に付いた	3	37.5%
あまり身に付かなかった	0	0.0%
ほとんど身に付かなかった	0	0.0%
計	8	100.0%

○資格に関する授業

	計	
とても身に付いた	1	12.5%
ある程度身に付いた	2	25.0%
あまり身に付かなかった	0	0.0%
ほとんど身に付かなかった	5	62.5%
計	8	100.0%

○授業以外での教員との交流

	計	
とても身に付いた	3	37.5%
ある程度身に付いた	4	50.0%
あまり身に付かなかった	1	12.5%
ほとんど身に付かなかった	0	0.0%
計	8	100.0%

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)
卒業生調査2007(農学部・選択)

17. あなたが農学部で学んだことは、卒業後、職場などでどの程度役立っていますか。

○基礎的な講義科目(共通専門教育科目及び必修科目)で得た知識

	計	
とても役立っている	2	25.0%
ある程度役立っている	1	12.5%
あまり役立っていない	3	37.5%
ほとんど役立っていない	2	25.0%
計	8	100.0%

○応用的な講義科目(選択科目)で得た知識

	計	
とても役立っている	4	50.0%
ある程度役立っている	1	12.5%
あまり役立っていない	1	12.5%
ほとんど役立っていない	2	25.0%
計	8	100.0%

○実験・実習での体験

	計	
とても役立っている	4	50.0%
ある程度役立っている	3	37.5%
あまり役立っていない	1	12.5%
ほとんど役立っていない	0	0.0%
計	8	100.0%

○演習・卒業研究で指導を受けた内容

	計	
とても役立っている	3	37.5%
ある程度役立っている	4	50.0%
あまり役立っていない	0	0.0%
ほとんど役立っていない	1	12.5%
計	8	100.0%

○資格に関する授業

	計	
とても役立っている	1	14.3%
ある程度役立っている	1	14.3%
あまり役立っていない	0	0.0%
ほとんど役立っていない	5	71.4%
計	7	100.0%

○授業以外での教員との交流

	計	
とても役立っている	3	37.5%
ある程度役立っている	3	37.5%
あまり役立っていない	0	0.0%
ほとんど役立っていない	2	25.0%
計	8	100.0%

第2部 京都府立大学の教育活動を考える (10)
卒業生調査2007 (農学部・選択)

21. 農学部で学んだことについて、あなたは、どの程度満足していますか。

○基礎的な講義科目 (共通専門教育科目及び必修科目) で得た知識

	計	
満足している	0	0.0%
ある程度満足している	4	50.0%
やや不満である	4	50.0%
かなり不満である	0	0.0%
計	8	100.0%

○応用的な講義科目 (選択科目) で得た知識

	計	
満足している	2	25.0%
ある程度満足している	6	75.0%
やや不満である	0	0.0%
かなり不満である	0	0.0%
計	8	100.0%

○実験・実習の内容

	計	
満足している	4	50.0%
ある程度満足している	3	37.5%
やや不満である	1	12.5%
かなり不満である	0	0.0%
計	8	100.0%

○実験・実習の設備

	計	
満足している	2	25.0%
ある程度満足している	3	37.5%
やや不満である	3	37.5%
かなり不満である	0	0.0%
計	8	100.0%

○演習・卒業研究の指導

	計	
満足している	4	50.0%
ある程度満足している	3	37.5%
やや不満である	1	12.5%
かなり不満である	0	0.0%
計	8	100.0%

○資格に関する授業

	計	
満足している	0	0.0%
ある程度満足している	2	28.6%
やや不満である	3	42.9%
かなり不満である	2	28.6%
計	7	100.0%

○教員との関係

	計	
満足している	3	37.5%
ある程度満足している	5	62.5%
やや不満である	0	0.0%
かなり不満である	0	0.0%
計	8	100.0%

第2部 京都府立大学の教育活動を考える(10)
卒業生調査2007(農学部・選択)

22. 総合的にみて、京都府立大学農学部で学んだことにどの程度満足していますか。

	計	
とても満足している	2	25.0%
ある程度満足している	6	75.0%
やや不満である	0	0.0%
かなり不満である	0	0.0%
計	8	100.0%

18 在学中に勉強した専門教育の授業で、現在「役立っている」と実感している科目名を、最大で3つまで挙げてください。

- ・ 測量学実習
- ・ 基礎化学
- ・ 有機化学
- ・ 物理化学
- ・ 動物栄養学
- ・ 情報処理学演習(2)
- ・ 卒業論文
- ・ 農薬化学
- ・ 分析化学
- ・ 分子栄養学
- ・ 木材組織学
- ・ 木質材料学
- ・ 木材物理学
- ・ 造園学及び森林風致論
- ・ 森林生態学

19 あなたが在学中に、もっと勉強しておけばよかったと思う科目名を、最大で3つまで挙げてください。

- ・ 砂防学
- ・ 林業機械学
- ・ 森林植物学
- ・ 生物統計学(2)
- ・ 微生物学
- ・ 応用微生物学
- ・ 応用昆虫学概論
- ・ 動物遺伝育種学
- ・ 害虫防除論
- ・ 分析化学
- ・ 基礎化学
- ・ 木材接着学
- ・ 測量学
- ・ 河川工学

20 本農学部が、もっと重視したり、改善したり、取り入れた方がよいと思われる学問領域や教育内容および教育方法について、ご自由にご意見をお書き下さい。

- ・ 実習や就職後に役立つような実務に関すること
- ・ 統計学は、研究者には必須。それなのにあまり知らずになんとかパソコンで出来てしまって、きちんと学ばずにいることが多いので、統計学を必修にするとよいと思います。
基礎生物学の授業にもっとオーソライズされた教科書を取り入れて、全体を俯瞰できるような

第2部 京都府立大学の教育活動を考える (10)

卒業生調査2007(農学部・記述)

レベルにまで学生をする。その後概論に移る。その時、学問領域間の関係がわかりやすいように説明してほしい。バラバラだった印象があるので。

- ・2回生でもっと専門分野を学ばせ、3回生から配属すべき。大した授業もないのに一般教養に2年も必要ない。
- ・概論の授業の中には教科書を読むだけ、というものもあり、あまり興味が持てませんでした。熱意を持って豊富な資料・話題で講義していただいたものは今でもよく覚えています。また、授業態度や不正など学生のモラルの問題には厳しくあたっていただきたいです。集中講義も無理のないスケジュールにさせていただかないと、一日中講義が数日、という状況ではなかなか厳しいなと思います。
- ・2回生時には英語の論文を読んだり、発表したりする力を付けた方が良くと思うので、週一回でも研究室に所属しての授業があっても良いと思う。
- ・森林科学科に限っていえば、基本的な実験実習の内容をもう少し充実させてほしいと思った。(今現在あまり記憶に残っていないので)
- ・農場での実習(特に集中実習)は学ぶことが多かった。現在の仕事には直接関係ないが、野菜を育てたり、牛を育てたりするのは農学部ならではの、友人と協力し合うことを学べるよい機会だった。
- ・造園系の領域をもっと充実させてほしいと思いますが、来年度より人間環境学部と統合されると聞いておりますので、また変わってゆくのだろうと期待しています。

23 農学部の授業やカリキュラム等について、ご意見やご要望などを、自由にお書き下さい。

- ・授業選択の幅を広げてほしい。
試験よりもレポート課題の方が興味を持ち深く調べることができたと思う。また、レポート等自己学習のための教材・図書館の学術書と自習室等を充実してほしい。
- ・卒業後、他大学の院に進学したが、そこと比べると、なんとなくのんびりしすぎている。
基礎生物学で全体をもっと教える。
専門は他の領域との関連性の講義を1コマは入れる。
- ・資格が取りにくすぎ。普通に卒業しても、改良普及員さえついてこないし、中学理科の教員免許もない。
- ・一般教養ではあまり興味が持てないものも多かったのですが、2回生、3回生と進むにつれ自分の好きな分野がはっきりし、4回生では存分に卒論研究に取り組むことができました。先生方や大学院生の先輩に恵まれ、自分の研究テーマ外のことも興味を持って知ることができました。ひとつの机を囲んで作業をする、府大の少人数ならではのことだと思います。卒業論文を先生がまとめてくださり、学会誌に投稿できたことがたいへん嬉しかったです。現在は研究テーマとは関連のない仕事についていますが、自分の研究室とそこでの一年には非常に愛着を持っています。地道な努力の大切さを学ぶことができ、また自信を持つことができました。大学院への未練が少し残るほど、素晴らしい大学生活でした。
- ・4回生になって研究室に配属ではなく、3回生もしくは3回生半ばくらいから研究室に入られるようにすれば、もっと専門的な勉強ができて良いのではないかと思います。
- ・授業のわかりやすさは教授の個性に依るところが大きいと思います。聴講側と合う合わないで理解度の差が出てくるのは仕方ありませんが、講義がわかりづらく、ほとんど誰も聞いていない状態は問題があるのではないかと思います。

問1. 貴社の職種は以下のどれに当たりますか。

	計	
農業	0	0.0%
林業	0	0.0%
漁業	0	0.0%
鉱業	0	0.0%
建設業	1	9.1%
製造業	2	18.2%
電気・ガス・熱供給・水道業	0	0.0%
運輸通信業	1	9.1%
卸売業	0	0.0%
小売業	0	0.0%
金融・保険業	2	18.2%
不動産業	0	0.0%
サービス業	3	27.3%
公務	0	0.0%
その他	2	18.2%
計	11	100.0%

問2. 貴社の従業員数についてお答えください。

	計	
10人未満	0	0.0%
10~100人未満	1	10.0%
100~500人未満	4	40.0%
500~1000人未満	0	0.0%
1000人以上	5	50.0%
計	10	100.0%

問3. 貴社における最近5年間の京都府立大学卒業生の採用数をお答えください。

	計	
3人未満	1	10.0%
3~5人	5	50.0%
6~9人	3	30.0%
10人以上	1	10.0%
計	10	100.0%

問4. 貴社で採用された京都府立大学卒業生への評価をお答えください。

	計	
とても満足している	5	50.0%
ある程度満足している	5	50.0%
やや不満である	0	0.0%
不満である	0	0.0%
計	10	100.0%

問5. 京都府立大学卒業生は、以下のような能力をどの程度身につけているでしょうか。

A. 職業上必要な専門知識

	計	
とても身につけている	1	11.1%
ある程度身につけている	7	77.8%
あまり身につけていない	1	11.1%
全く身につけていない	0	0.0%
計	9	100.0%

B. 外国語能力

	計	
とても身につけている	0	0.0%
ある程度身につけている	6	85.7%
あまり身につけていない	1	14.3%
全く身につけていない	0	0.0%
計	7	100.0%

C. コンピューターを扱うスキル

	計	
とても身につけている	1	11.1%
ある程度身につけている	8	88.9%
あまり身につけていない	0	0.0%
全く身につけていない	0	0.0%
計	9	100.0%

D. 情報を収集し処理する力

	計	
とても身につけている	1	10.0%
ある程度身につけている	9	90.0%
あまり身につけていない	0	0.0%
全く身につけていない	0	0.0%
計	10	100.0%

E. 問題を発見し解決する力

	計	
とても身につけている	3	30.0%
ある程度身につけている	7	70.0%
あまり身につけていない	0	0.0%
全く身につけていない	0	0.0%
計	10	100.0%

F. 論理的に考える力

	計	
とても身につけている	4	40.0%
ある程度身につけている	5	50.0%
あまり身につけていない	1	10.0%
全く身につけていない	0	0.0%
計	10	100.0%

G. 人前で意見を述べる力

	計	
とても身につけている	4	40.0%
ある程度身につけている	6	60.0%
あまり身につけていない	0	0.0%
全く身につけていない	0	0.0%
計	10	100.0%

H. 文章を書く力

	計	
とても身についている	4	40.0%
ある程度身についている	6	60.0%
あまり身についていない	0	0.0%
全く身についていない	0	0.0%
計	10	100.0%

I. 倫理感

	計	
とても身についている	4	40.0%
ある程度身についている	6	60.0%
あまり身についていない	0	0.0%
全く身についていない	0	0.0%
計	10	100.0%

J. 責任感

	計	
とても身についている	3	30.0%
ある程度身についている	7	70.0%
あまり身についていない	0	0.0%
全く身についていない	0	0.0%
計	10	100.0%

K. 自発性

	計	
とても身についている	1	12.5%
ある程度身についている	7	87.5%
あまり身についていない	0	0.0%
全く身についていない	0	0.0%
計	8	100.0%

L. 指導力

	計	
とても身についている	0	0.0%
ある程度身についている	8	88.9%
あまり身についていない	1	11.1%
全く身についていない	0	0.0%
計	9	100.0%

M. 交渉力

	計	
とても身についている	0	0.0%
ある程度身についている	10	100.0%
あまり身についていない	0	0.0%
全く身についていない	0	0.0%
計	10	100.0%

N. 人の話を聞く姿勢

	計	
とても身についている	5	50.0%
ある程度身についている	4	40.0%
あまり身についていない	1	10.0%
全く身についていない	0	0.0%
計	10	100.0%

○. 協調性

	計	
とても身につけている	6	60.0%
ある程度身につけている	3	30.0%
あまり身につけていない	1	10.0%
全く身につけていない	0	0.0%
計	10	100.0%

P. コミュニケーション能力

	計	
とても身につけている	2	20.0%
ある程度身につけている	8	80.0%
あまり身につけていない	0	0.0%
全く身につけていない	0	0.0%
計	10	100.0%

Q. 社会的マナー

	計	
とても身につけている	3	30.0%
ある程度身につけている	7	70.0%
あまり身につけていない	0	0.0%
全く身につけていない	0	0.0%
計	10	100.0%

問6. 貴社が大学時代に学生が身につけてほしいと思われる能力はどのようなものでしょうか。
上の問5の項目から3つ選び、アルファベットでお答えください。

	計	
A. 職業上必要な専門知識	2	20.0%
B. 外国語能力	0	0.0%
C. コンピューターを扱うスキル	0	0.0%
D. 情報を収集し処理する力	0	0.0%
E. 問題を発見し解決する力	4	40.0%
F. 論理的に考える力	2	20.0%
G. 人前で意見を述べる力	0	0.0%
H. 文章を書く力	0	0.0%
I. 倫理感	0	0.0%
J. 責任感	2	20.0%
K. 自発性	4	40.0%
L. 指導力	0	0.0%
M. 交渉力	0	0.0%
N. 人の話を聞く姿勢	4	40.0%
O. 協調性	3	30.0%
P. コミュニケーション能力	6	60.0%
Q. 社会的マナー	2	20.0%
その他(※)	1	10.0%
計	30	100.0%

(※)の回答内容→「努力」

第2部 京都府立大学の教育活動を考える (10)

就職先調査2007(記述)

回答される方のご所属をお答えください。

- ・ 経営管理部
- ・ 人事部・課 (4社)
- ・ 総務企画部
- ・ 事務部長
- ・ 総務部

問7 京都府立大学卒業生の特徴について、お気づきの点がありましたら、お書きください。

- ・ 真面目で信念を持った人材が多いのではないかと感じます。(業種：建設業)
- ・ 昨年(平成19年)、今年(平成20年)の採用活動で御校より各3名の方に入社1名の内定者があり、たいへんありがたく、また昨今応募者も増加しております。(業種：製造業)
- ・ 配属先の部署での人間関係を上手く築いている。さらに院内外の人との協調を重んじ、様々な場面で気配りする事を心がけている様子がうかがえる。
全体的な印象は真面目にこつこつと取り組み、実力をつけていく人材だと思う。
これまでの傾向では、女子職員にやや自己中心的思考と甘さが見られたので、組織的思考が深まれば一層期待がもてる。(業種：その他)
- ・ 粒のそろった人材
入社後も順調に成長している(業種：サービス業)

問8 京都府立大学についてご要望等がございましたら、自由にお書きください。

- ・ 最近採用させていただいた方では、設計や営業の業務に就いていただいておりますが、当社は総合建設業でもありますので、ある程度の現場経験を積んだ後に、営業や経営を学び、将来的にバランスのとれた管理職を目指していただけるような人材を欲しています。
引き続き良き人材を採用できるようにご協力をお願いいたします。(業種：建設業)
- ・ 学内セミナー等開催しておられましたら、お声かけいただきたく存じます。(業種：製造業)
- ・ 御校出身の職員は多くはないものの、本部や営業店にてそれぞれの核となり、ご活躍いただいております。今年度の採用においても、たくさんの御校の学生の方にお会いできることを楽しみにしておりますので、よろしく申し上げます。(業種：金融・保険業)
- ・ 優秀な人材をご紹介いただき感謝しております。引き続き貴大学の卒業生の採用を考えておりますので、よろしく申し上げます。(業種：その他)
- ・ 毎年、必ず2～3名は採用したい。(業種：サービス業)

⑤ 学生生活実態調査の結果について

2007年度 学生生活実態調査報告書 (平成20年3月)

京都府立大学学生部委員会 学生生活部会
林 香奈 (文学部・部会長)
大田直史 (福祉社会学部)
竹山清明 (人間環境学部)
吉安 裕 (農学研究科)

【目次】

1. 学生生活実態調査の結果を見て (学長)
2. 学生生活実態調査を実施して (学生部委員会学生生活部会)
3. 学生生活実態調査の結果
 - 〈第一部〉 学生生活実態調査の結果
 - ① 調査の概要
 - ② 調査の結果
 - 〈第二部〉 学生の意見・要望及びこれに対する大学の回答
 - ① 取りまとめに当たって
 - ② 学生からの意見・要望と大学の回答

※ 報告書〈第二部〉「2007年度学生生活実態調査における学生の意見・要望及びこれに対する大学の回答」については、〈第一部〉と併せて大学のホームページに公開しているので、詳細はそちらを参照されたい。

学生生活実態調査結果を見て

京 都 府 立 大 学

学 長 竹 葉 剛

学生生活実態調査が2年ぶりに実施された。今回はすべての学生・院生を対象にした点が前回と異なる。大学教育は学生・院生のために行われるのであるから、学生・院生の意見を定期的に集約し、その意見に沿う方向で運営されるべきである。その意味で学生生活実態調査は非常に重要な取り組みであり、担当した学生部委員会・学生生活部会をはじめ、関係した方々に敬意を表したい。

内容について見てみると、経済生活では63%の学生がほぼ毎月アルバイトをしており、そのうち34%が学業への影響がある程度あるとの回答であることが気にかかった。学生生活では、81%が充実、ある程度充実と答えており、74%が所属する学部・研究科へ入学してよかった、と答えている。また課外活動には55%の学生が参加しており、そのうち79%が、非常に満足、まあ満足と答えている。課外活動と授業との両立については、79%がうまく両立、あるいはまあまあ両立と答えており、あまり両立していないは1%であった。友人関係では、86%が自分のことについて相談できる友人がいると答えており、これらの数字は、2年前の数字とほぼ同じ傾向である。健康状態では、64%がとてもよい、良い方であると答えているが、9%があまりよくない、1%が悪い、と答えている点が気にかかった。

自由記述では、多くの要望が寄せられている。この中で、老朽化した校舎、トイレ、食堂、図書館など、施設関係についての要望事項は、前回と重なる内容が多く、それだけ切実な要望であると感じている。施設の建て替えについては、学生・院生の要望が設置者にも届けられており、現在立て替えの計画を作る段階まで来ている。もう少しの間辛抱してほしい。また、事務サービスの改善についての要望も多く受けており、それぞれの要望事項は担当部署において改善策が検討されている。自由記述の中には、このようなアンケートの意味があるのか、という記述もあるが、大学としては一つ一つの意見に対する改善に真剣に取り組んでいるので、京都府立大学を少しでも良い大学にしていくために、これからもご協力をお願いしたい。

学生生活実態調査を実施して

この調査は、2007年7月、京都府立大学ならびに大学院に在学している全学生に対して、学生生活に関する実態と要望をお聞きしたものです。調査にご協力くださった学部生・大学院生の皆さんをはじめ、関係の皆さまに厚くお礼申し上げます。

今回の調査に先立ち、2005年7月に15年ぶりに実施された学生生活実態調査（抽出調査）の結果、および自由記述欄に寄せられたアンケート項目に対するご意見を踏まえ、学生生活部会で質問項目をすべて検討しなおしました。基本的には前回の調査項目を踏襲しておりますが、一部、項目を変更した箇所があります。たとえば、2006年度からの「学生による授業評価」の実施に伴い、授業内容に関する調査項目を削減しました。一方、「ボランティア活動」「インターンシップ」などに参加した経験を問う項目を追加し、学生の生活実態や要望をより把握できる内容に変更するよう工夫しました。

報告書の「第一部」は、各調査項目に対する回答を集計・分析したものです。「第二部」は調査票の自由記述欄に寄せられたご意見と、それに対する大学・生協からの回答をまとめたものです。

調査結果をみると、「学生生活が充実している」「入学してよかった」と回答する学生の割合が前回調査より増えたこと、また「HPでの情報公開」の充実を希望する意見が減少したことは、前回調査以降、各方面で具体的な改善が図られた結果を反映するものと思われます。一方、「就職支援」に対する要望が前回調査よりもかなり増加しているほか、「授業の方法・内容」「教職員の対応」「基本的施設・設備」に対する不満も依然として少なくなく、今後、更なる改善を図る必要があると考えます。注意すべき点としては、「授業以外の勉強時間」が前回調査より減少していること、それと呼応するように「アルバイトが学業の支障となった」と回答する学生が増加していることが挙げられます。また多くの学生が「バリアフリー化の拡充」が必要だと感じている点も、キャンパス整備の今後の重要な課題として受け止めたいと思います。

この調査結果を、京都府立大学の学生の現状や要望を把握するための資料として、今後の教育・研究体制および施設等の充実と、学生の生活・学習環境の改善のために有効に活用していただければ幸いです。

京都府立大学学生部委員会 学生生活部会

林 香奈（文学部・部会長）

大田直史（福祉社会学部）

竹山清明（人間環境学部）

吉安 裕（農学研究科）

＜第一部＞学生生活実態調査の結果

〔調査の概要〕

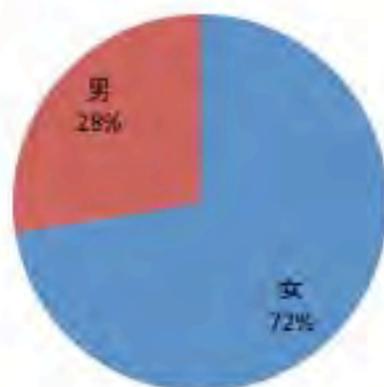
- ・調査対象 平成19年5月1日現在、京都府立大学に在学する学部生及び大学院生の全員を対象とした。
- ・調査の時期 平成19年7月1日現在
- ・調査の方法 無記名のアンケート調査により実施（調査票を配布し、回収した。）
- ・回収状況 調査票配布数2,063人のうち有効回収数は635人で、回収率30.8%であった。

区分	学生数	有効回収数	回収率
学部生	1,729	525	30.4
大学院生	334	110	32.9
計	2,063	635	30.8

〔調査の結果〕

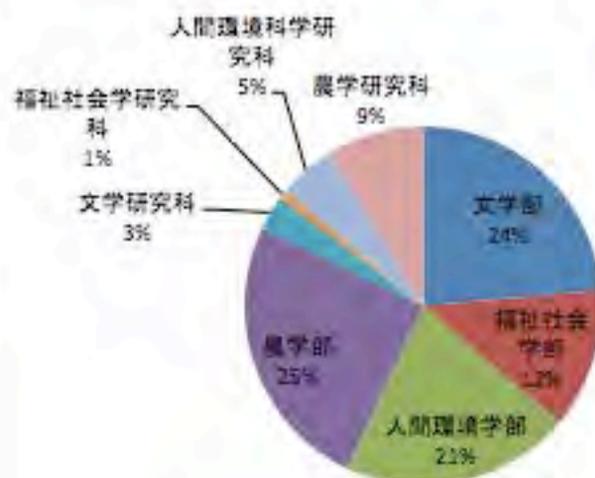
（次のページ以下のとおり）

回答者の性別



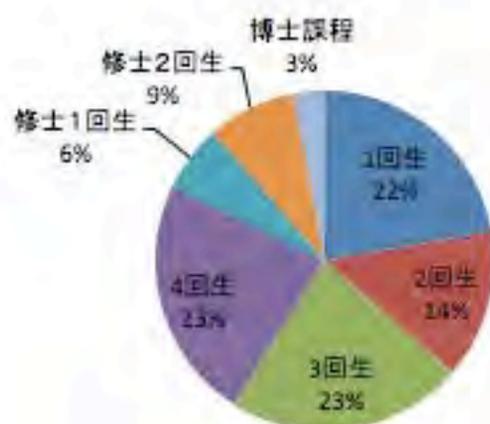
アンケート回答者の72%が「女子」、28%が「男子」である

回答者の所属学部など



学部生の回答者の数では、「福祉社会学部生」が、院生の回答者でも「福祉社会学研究科生」が少ない。

回答者の所属学年



所属学年別にみると、学部では2年生、大学院では博士後期課程院生の回答が少ない。回答者の6割強が「一般選抜」(前期・後期)で入学している。また院生の6割が「夏期入試」で入学している。(省略した他のグラフから)

5

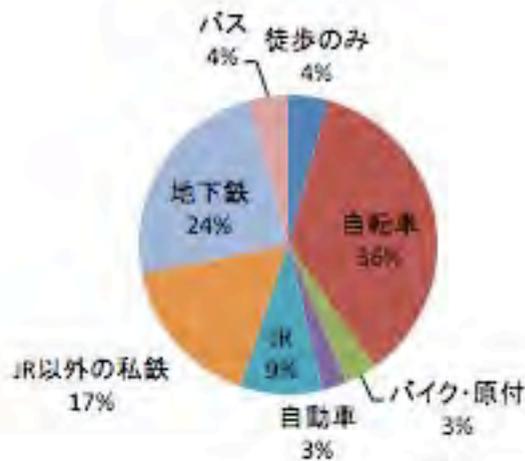
住まいは自宅または自宅外



回答者の半数強が「自宅」から通学している。

6

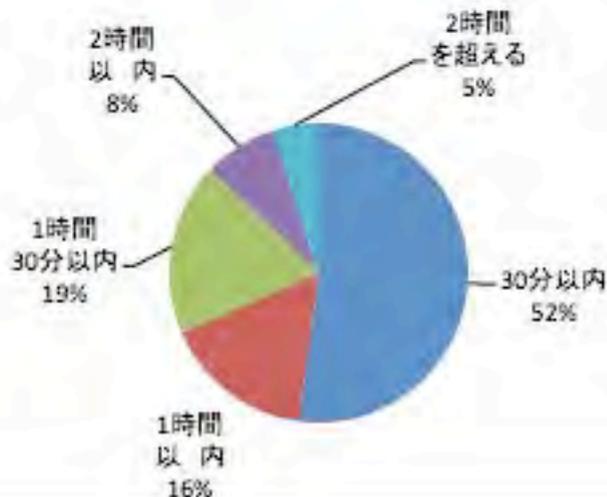
通学方法



通学方法としては、「自転車」がもっとも多く、「地下鉄」「私鉄」「JR」などの順である。

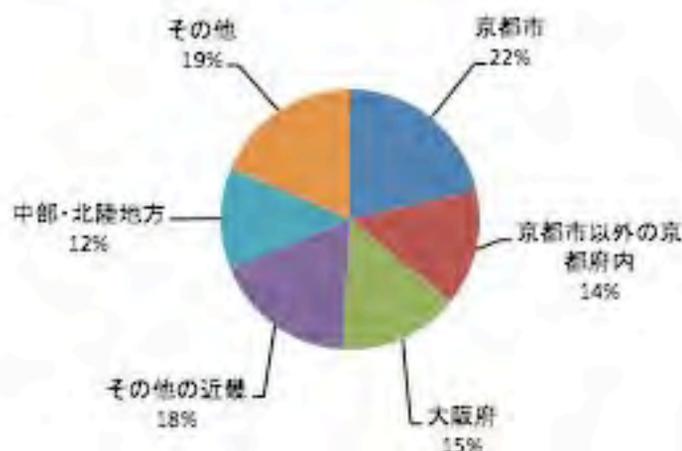
7

片道通学時間



通学に要する時間については、52%が「30分以内」であるが、32%が「1時間超」を要し、5%については「2時間超」と解答している。

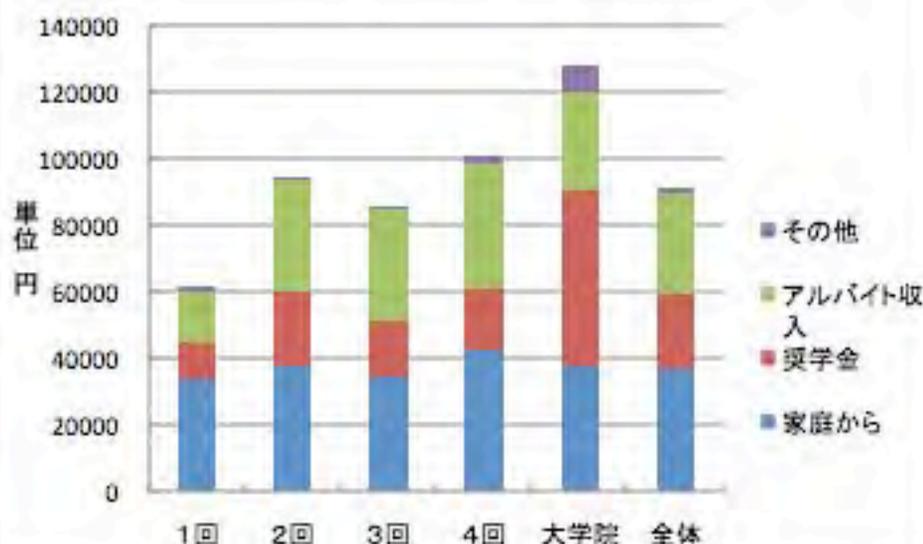
家族の居住地



家族の居住地は、「京都市」内が22%と最も多く、「近畿」地方が69%、次いで「中部・北陸」12%、「中国・四国」9%、「九州・沖縄」/「関東」3%、「東北」/「北海道」/「海外」1%の順である。

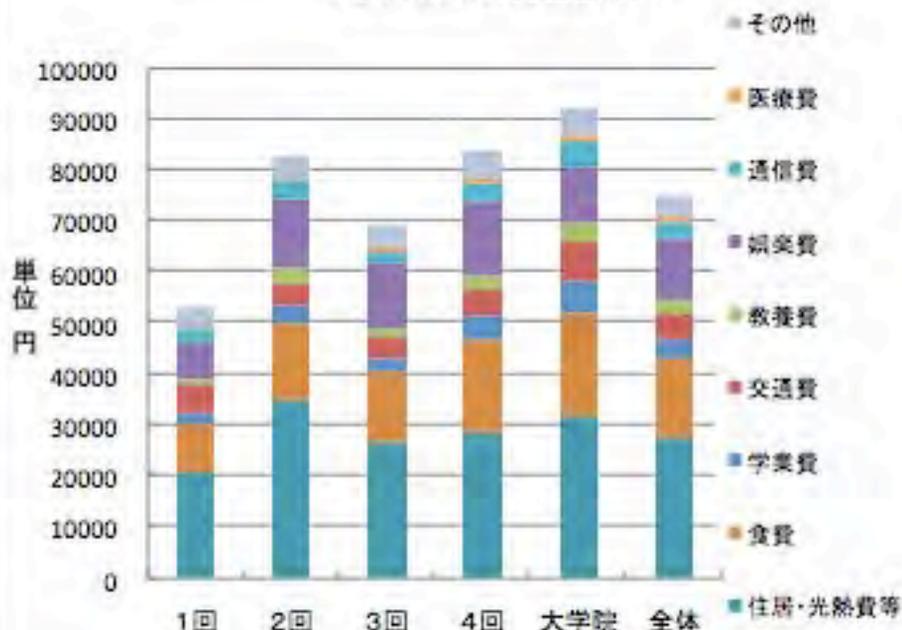
05年調査時よりも、家族が近畿圏に在住している学生が約4ポイント増えている。通学に要する時間については、変化はない。

1か月の平均収入と内訳



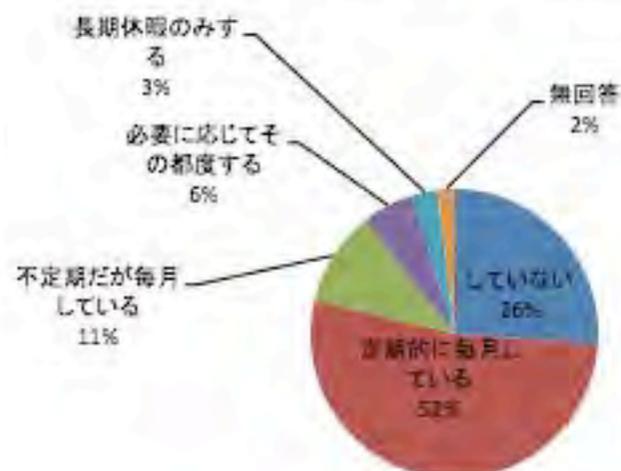
平均収入は、05年度調査より、3千円強下がっており、内訳は「家庭から」が4割強、「奨学金」が2割、「アルバイト収入」が3割である。大学院生の場合、「奨学金」が内訳の4割を占めている。

1か月の平均支出と内訳



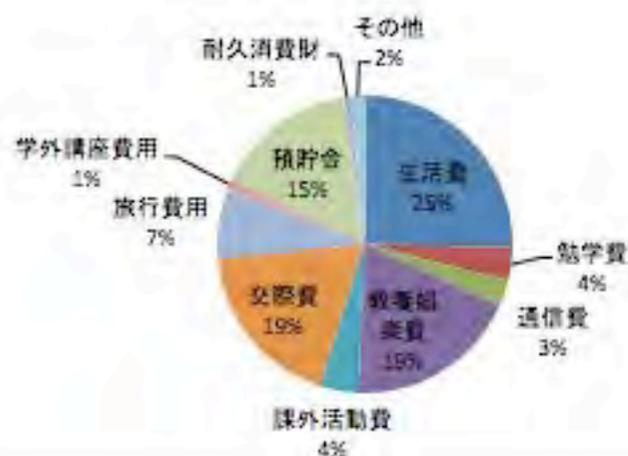
平均収入と平均支出との差が17千円程度ある。「教養費」、「学業費」が学年が上がるほど増えている。

アルバイトの頻度・期間など



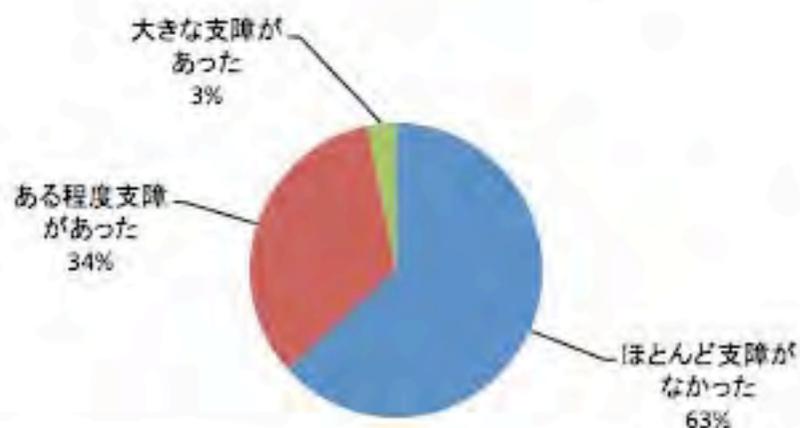
回答者の7割がアルバイトを経験しており、過半数が「毎月定期的に行っている」。

アルバイト代の使途



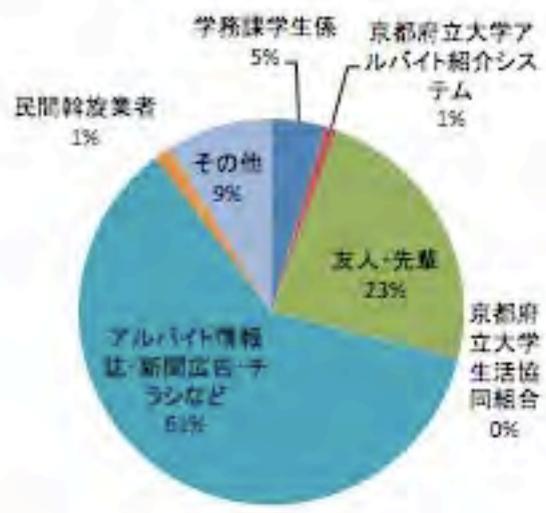
アルバイト代の使途としては、「生活費」が最も多く25%。「教養娯楽費」19%、「交際費」19%、「預貯金」15%の順になっている。

アルバイトの学業への影響



アルバイトが学業への「支障となった」とするものが37%に上っている。

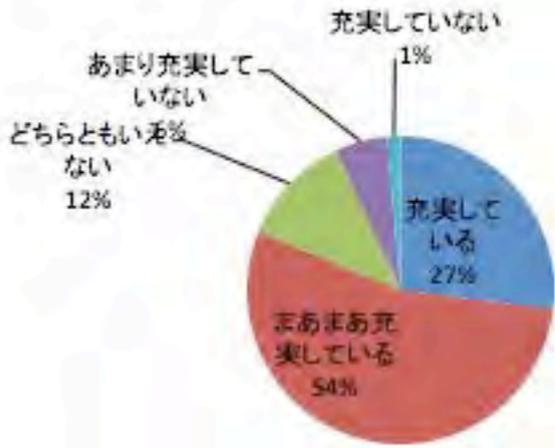
アルバイトの紹介元



アルバイトは、「情報誌等」で見つける場合が61%で、その次には「友人・先輩の紹介」によると回答されている。

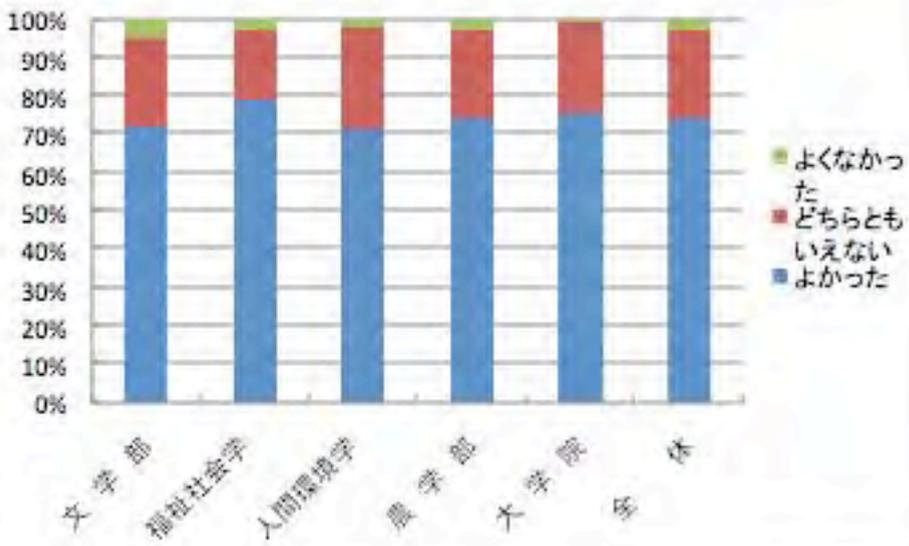
コメント(経済生活)
収入の3割をアルバイトで稼いでいる。毎月アルバイトをしているものは63%に上る。学業に何らかの支障があったとするものが34%あることは注意を要する。

学生生活の充実度



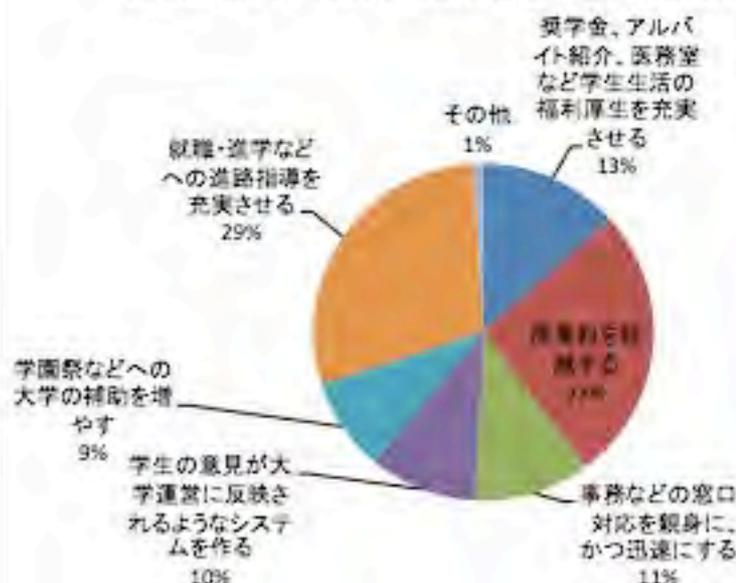
学生生活が、「充実」、「まあまあ充実」を併せると81%であり05調査より5ポイントのアップである。

所属する学部・研究科に対する評価



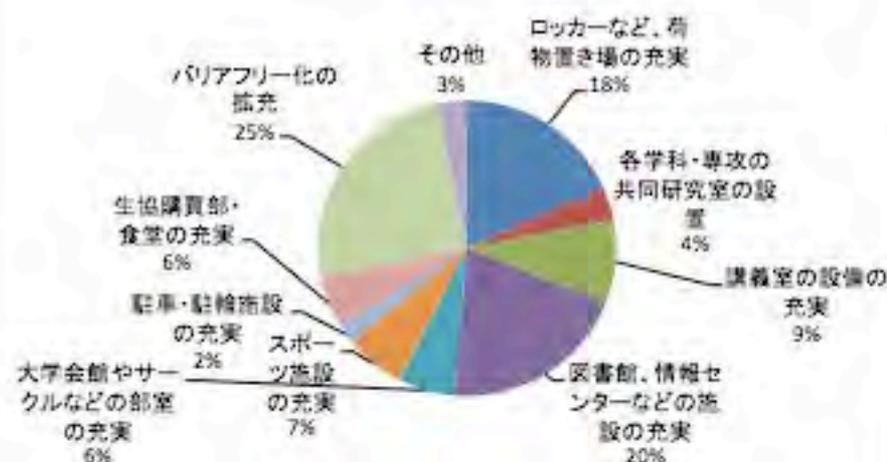
学部・研究科への入学を「よかった」とするものも74%と05年調査より7ポイント増えている。学部別では、福祉、農、文で高くなっている

京都府立大学に対する期待と要望(学生支援関係)



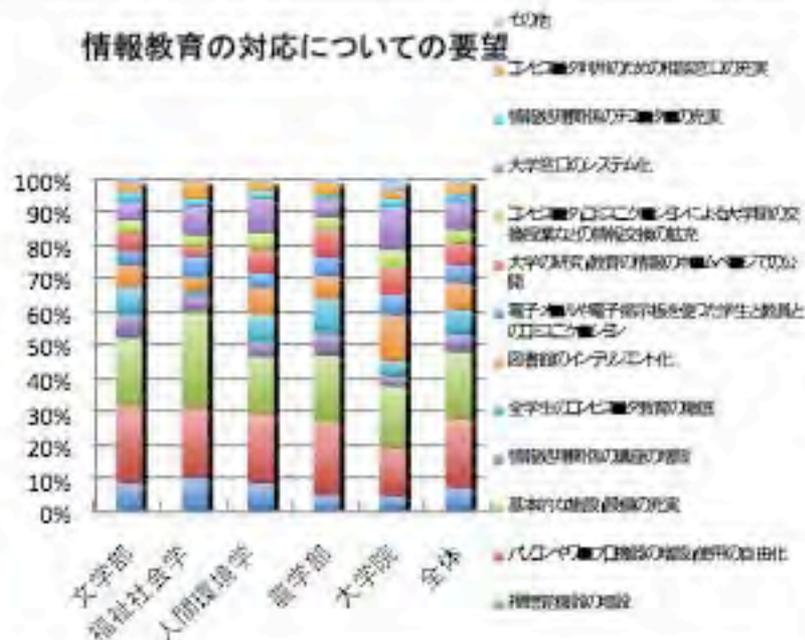
学生支援関係の要望としては、「進路指導の充実」29%、「授業料の軽減」27%の要望が強いが、特に前者については、05年より15ポイント増えている。

京都府立大学に対する期待と要望(施設関係)



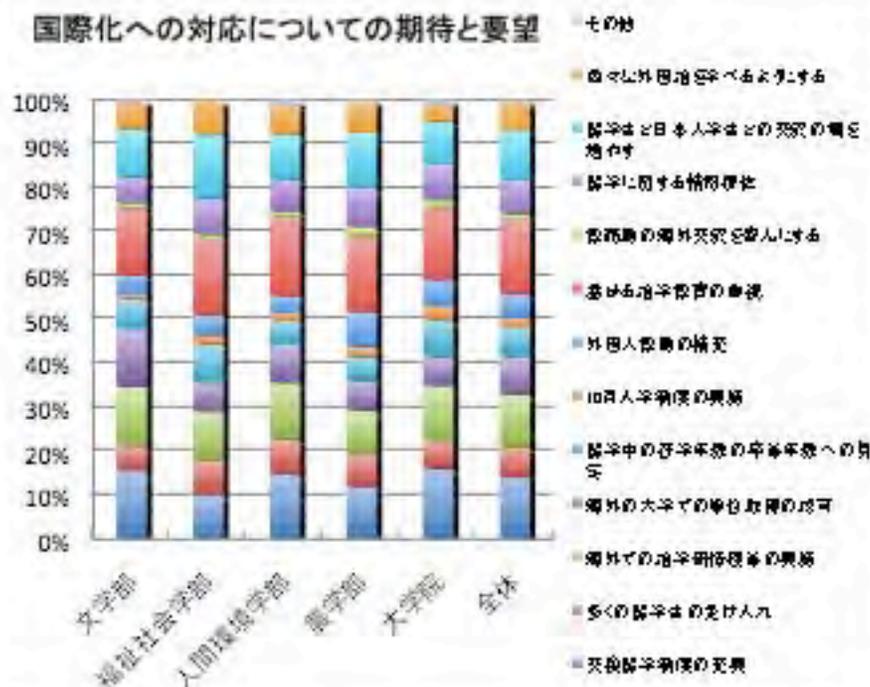
「バリアフリー化」25%、「図書館・情報センター」など20%、「荷物置き場」41%の拡充への期待が強い。05年調査の選択肢になかった「バリアフリー化」の要望が首位になり、05年の調査でトップにあがっていた「生協の拡充」への要望は、「図書館」や「荷物置き場」よりも順位が下がった。大学本来の機能を担う施設への要望が強まっている点が注目される。

情報教育の対応についての要望



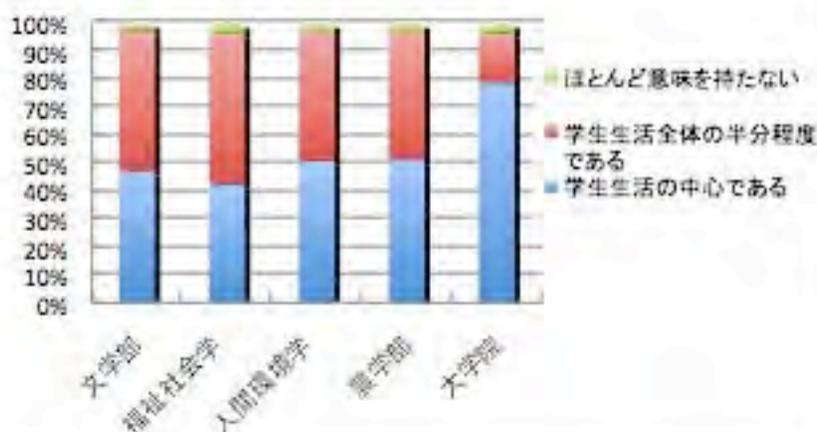
「PCの増設」が望まれる20%一方、「基本的施設・設備の充実」20%を望む、という傾向は05年調査と同様である。この間の大学ホームページの充実を反映してか、「研究・教育情報のホームページでの公開」の要求は減った。他方、「大学窓口のシステム化」が増えている。

国際化への対応についての期待と要望



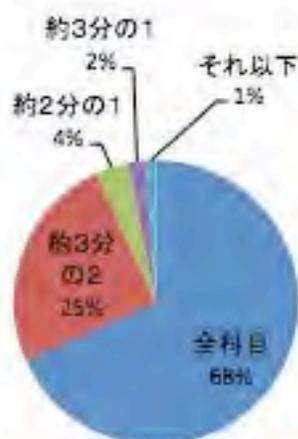
「話せる語学教育の重視」、「交換留学制度」、「海外語学研修」の順に、いずれも、10%を超えている。「話せる語学教育」は、05年調査と比べて増えて首位になった。これらに次いで、「留学生との交流の場」、「海外の大学での取得単位を認める」などが上がっている。

講義・演習・実験等は



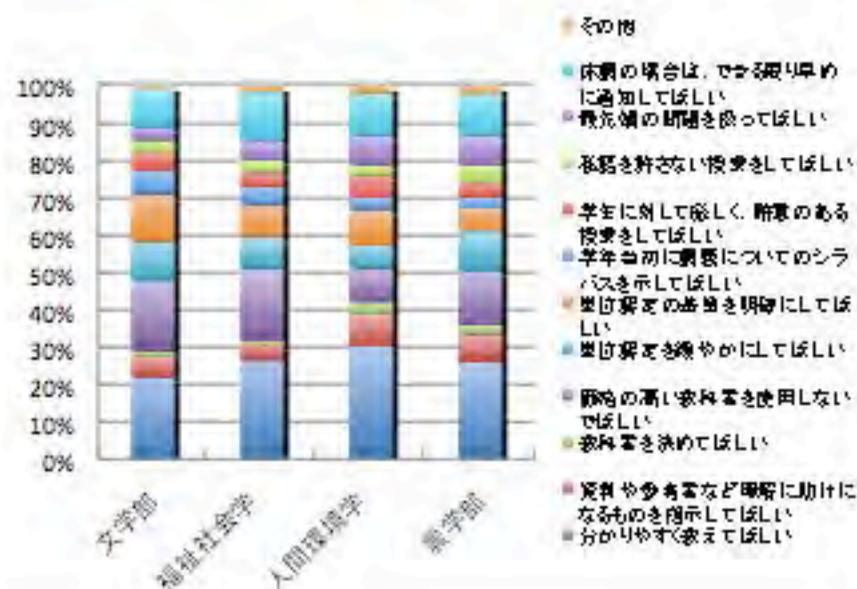
54%が「学生生活の中心」とし、43%の「学生生活の半分程度」を9ポイント近く上回り、前回の調査と順位を逆転した。大学院生では79%近くが、「学生生活の中心」としており、前回調査より24ポイント増えている。

出席している科目は



「全科目」および「約3分の2」を併せると93%を超え、学生の授業への意欲の強さが伺える。

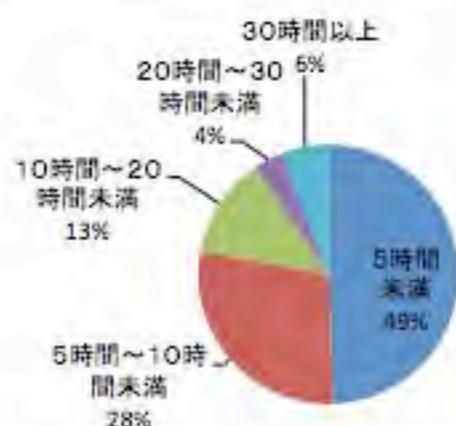
講義に対する希望



「わかりやすさ」が25%と最も高く、「価格の高い教科書の不使用」15%、「休講の早期連絡」11%、「緩やかな単位認定」9%、「明確な単位認定基準」9%と続く。「わかりやすさ」は、人環に多く約30%、「価格の高い教科書の不使用」は、文と福祉に多く約20%、「休講の早期連絡」は福祉、「緩やかな単位認定」は文と農に比較的多く見られた。

7①

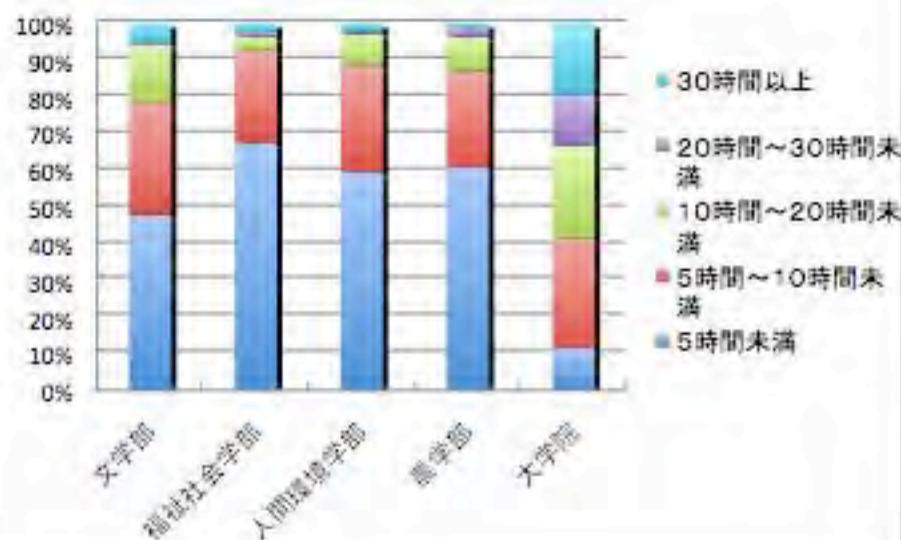
授業以外の勉強時間



「5時間未満」が49%と、前回調査時より4ポイント増えている。「5～10時間未満」は28%であり、残りが「10時間以上」となっている。学部別では、文が「5時間以上」が多いのに対して、福祉が「5時間未満」とするものが最も多かった。

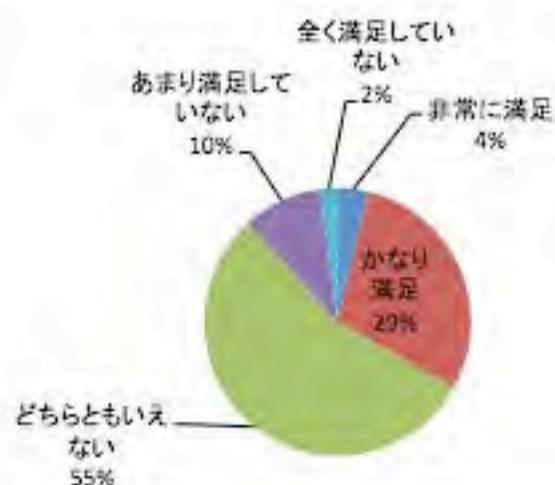
7②

授業以外の勉強時間



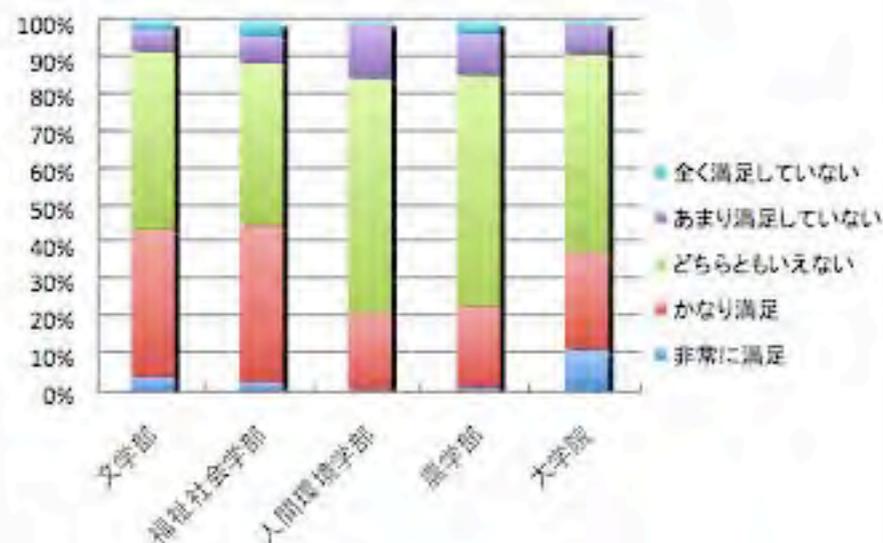
学部生では文の自習時間が多い。大学院生は自習時間が多く、取り組む姿勢が学部生とは明確に異なることが分かる。

教員の授業方法・内容に



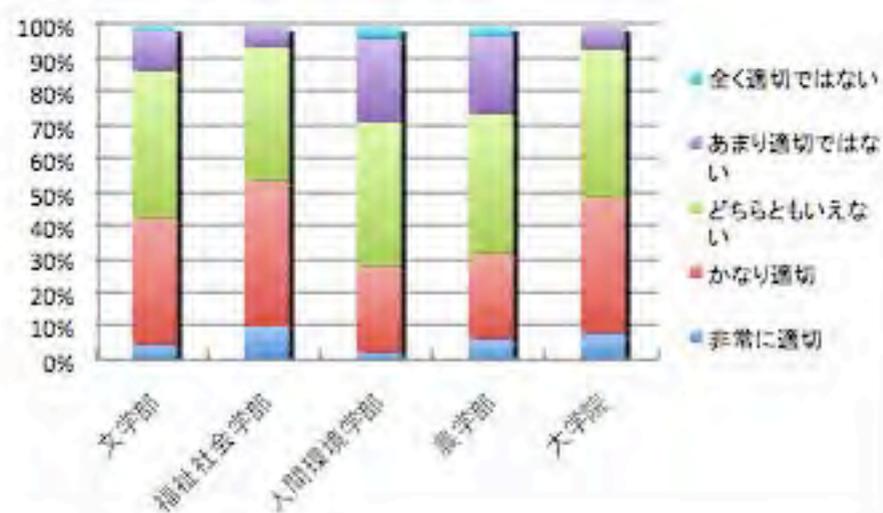
「非常に満足」「かなり満足」を合わせるとわずか33%でしかない。「満足していない」の合計は12%だが、好意的評価とはいえない「どちともいえない」を加えると55%となり、かなりの改善が必要であることを示している。

教員の授業方法・内容に



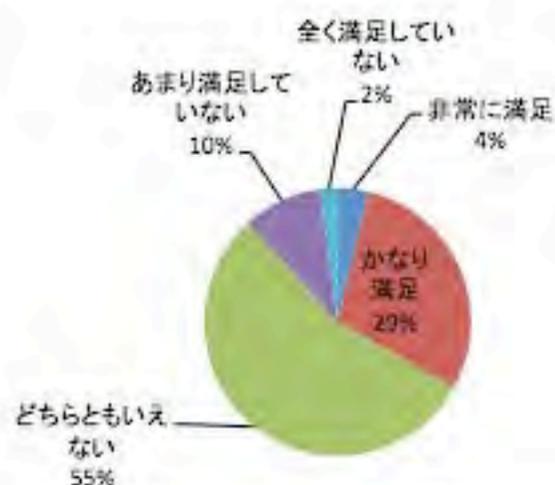
人環の評価が低く、農が続く。満足の評価が2割程度しかない。文、福祉では満足の評価が4割を超えている。大学院では非常に満足の評価が比較的多い。人環、農では改善の必要性が高いといえよう。

所属する学部・学科の必修・選択必修・選択・自由選択のバランスは



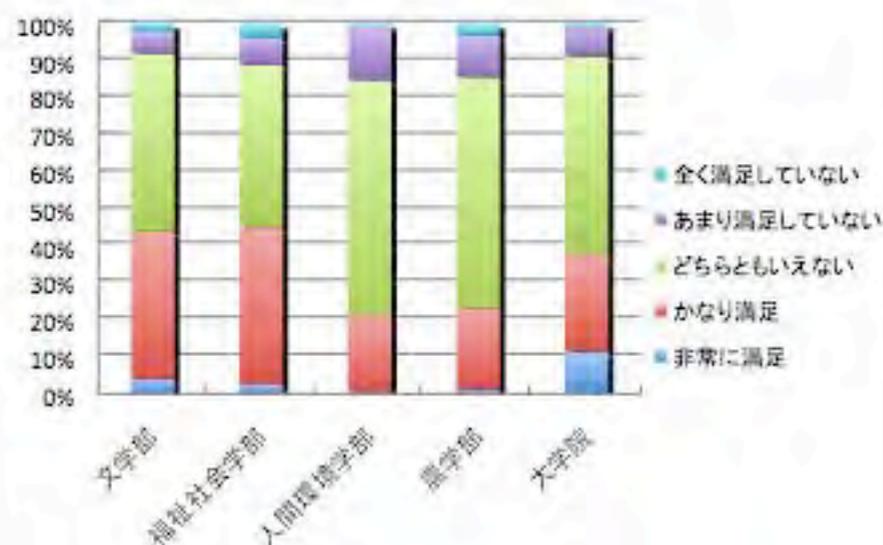
全体では、「非常に」6%、「かなり適切」34%であり、併せて40%となり、前回調査より7ポイント増えている。「どちともいえない」43%は前回とほぼ同じである。不適切とするものは、「あまり」16%、「全く」2%であり、前回調査より5ポイント下がっている。学部別では、「非常に・かなり適切」が福祉は53%であるのに対して、人環・農は30%前後と低く、「あまり」「まったく適切でない」とするものがそれぞれ、29%、26%と高い。

教員の授業方法・内容に



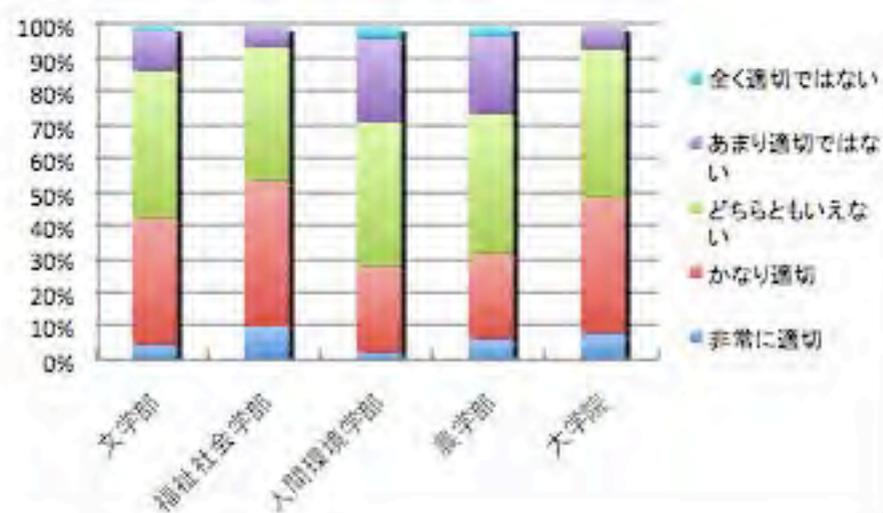
「非常に満足」「かなり満足」を合わせるとわずか33%でしかない。「満足していない」の合計は12%だが、好意的評価とはいえない「どちらともいえない」を加えると55%となり、かなりの改善が必要であることを示している。

教員の授業方法・内容に



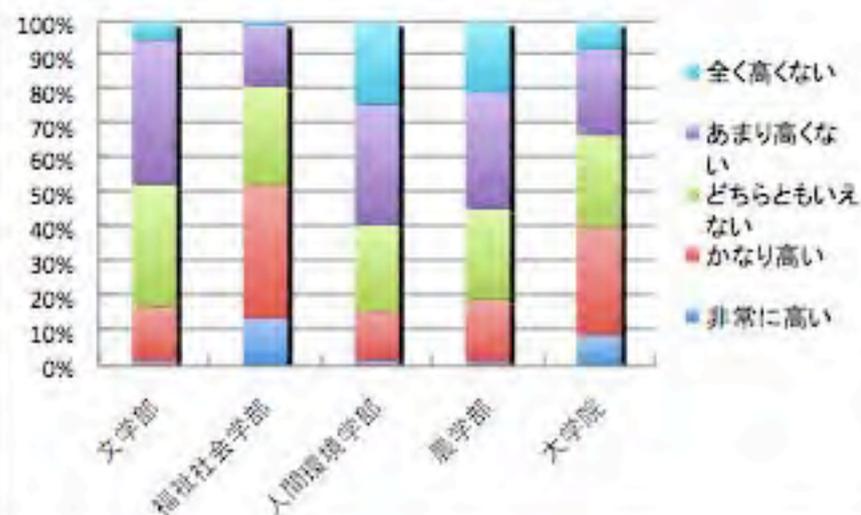
人環の評価が低く、農が続く。満足の評価が2割程度しかない。文、福祉では満足の評価が4割を超えている。大学院では非常に満足の評価が比較的多い。人環、農では改善の必要性が高いといえよう。

所属する学部・学科の必修・選択必修・選択・自由選択のバランスは



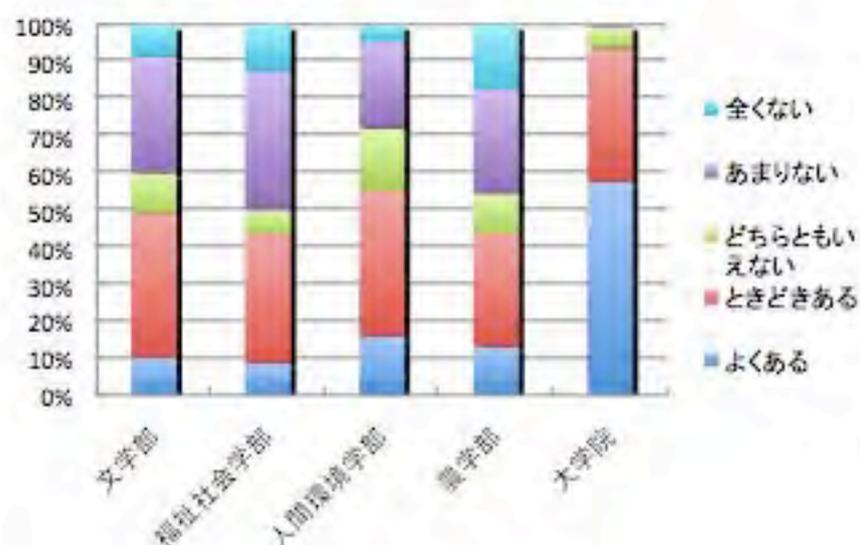
全体では、「非常に」6%、「かなり適切」34%であり、併せて40%となり、前回調査より7ポイント増えている。「どちらともいえない」43%は前回とほぼ同じである。不適切とするものは、「あまり」16%、「全く」2%であり、前回調査より5ポイント下がっている。学部別では、「非常に・かなり適切」が福祉は53%であるのに対して、人環・農は30%前後と低く、「あまり」「まったく適切でない」とするものがそれぞれ、29%、26%と高い。

授業科目選択における自由度は



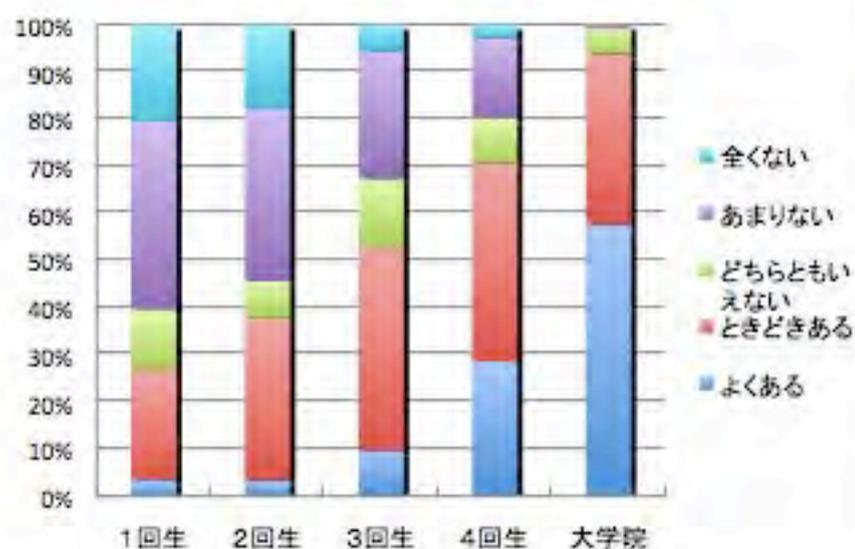
福祉の自由度が極めて高い。人環の自由度が低く、農が続く。文は「全く高くない」が少ない。大学院は福祉に準ずる。

教員と個人的に話をする機会が



大学院は当然ながら教員と接する機会が多い。学部では人環が比較的高い。農学部は「全くない」がやや多い。福祉や文が続く。

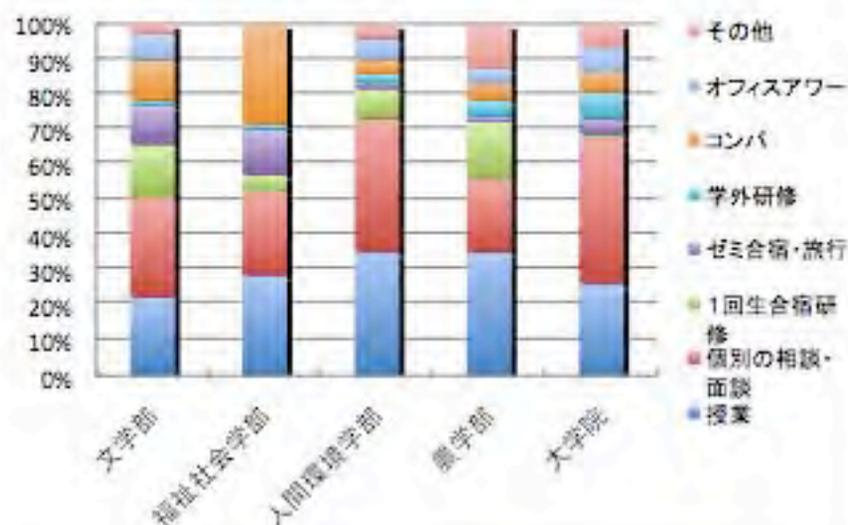
教員と個人的に話をする機会が



学年が進むほど教員と話をする機会が増加する。大学院では飛躍的に増加している。

33①

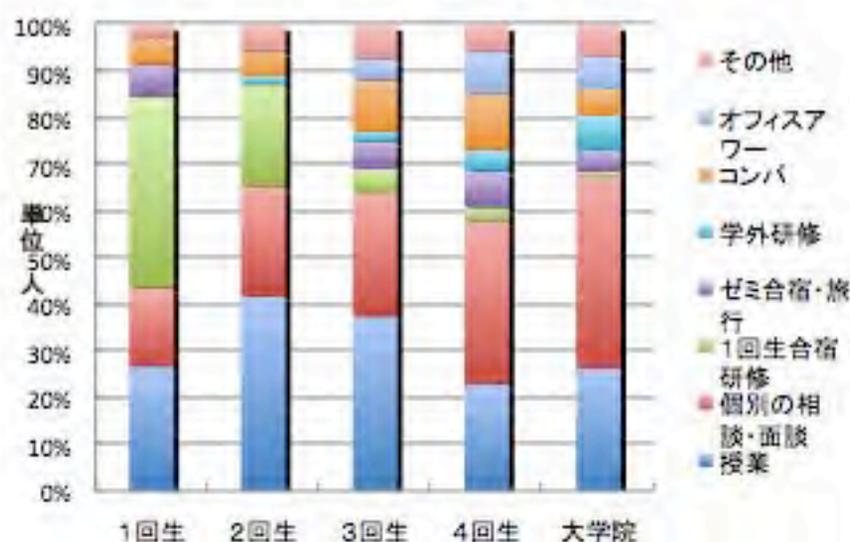
教員と話をする機会



大学院や人環では個別の相談が比較的多い。全体として授業での接触も多い。福祉や文ではコンパやゼミ合宿での機会が多いのが特徴的である。1回生ゼミ合宿もそれなりの役割を果たしている。

33②

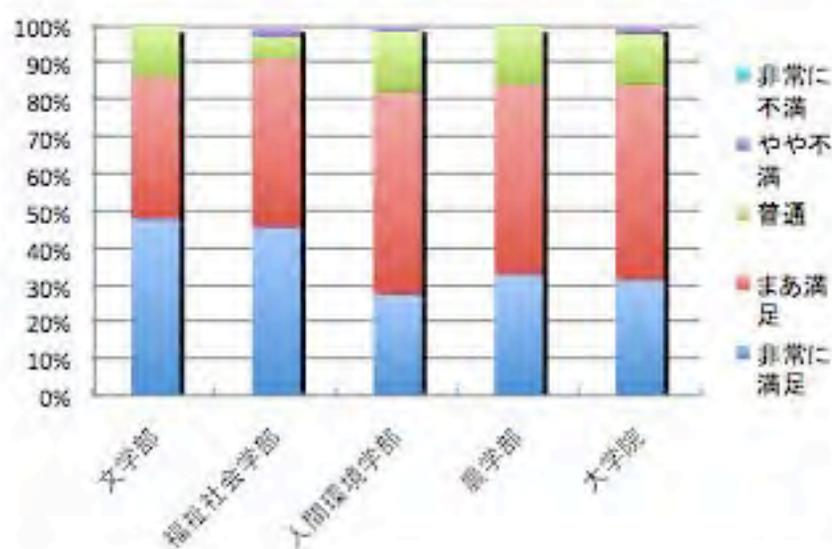
教員と話をする機会



低学年では1回生合宿研修の比率が高い。学年が上がるほど、個別相談、ゼミ合宿、コンパ、オフィスアワーが増加する。

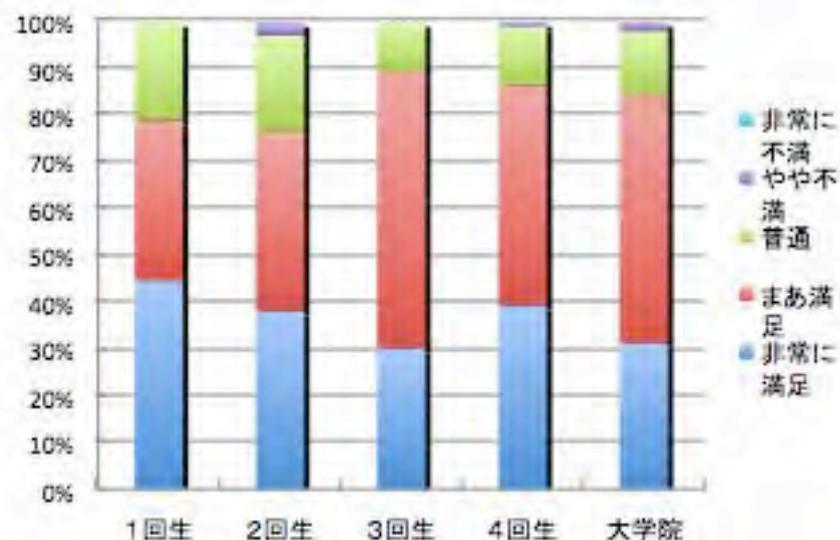
34①

教員と話したときの教員の対応は



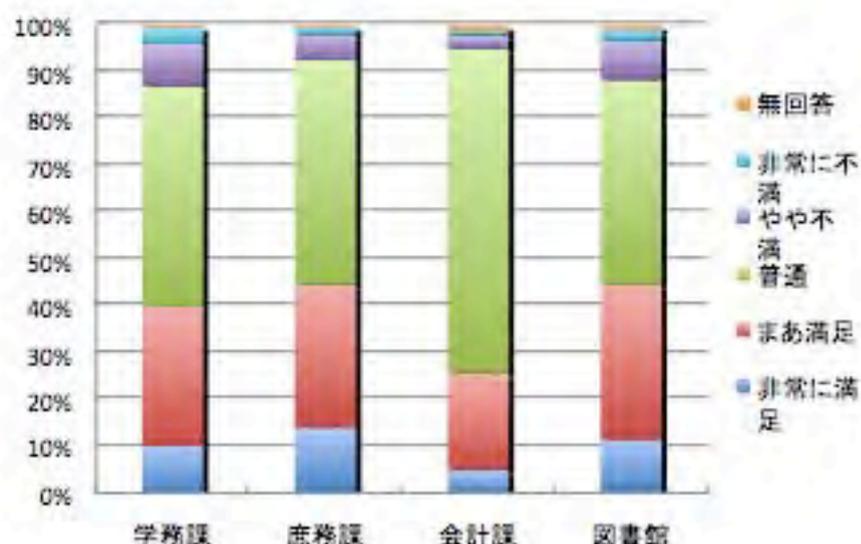
文、福祉では「非常に満足」の比率が高い。非常に不満は見られない。人環、農ではやや満足度が下がる。

教員と話したときの教員の対応は



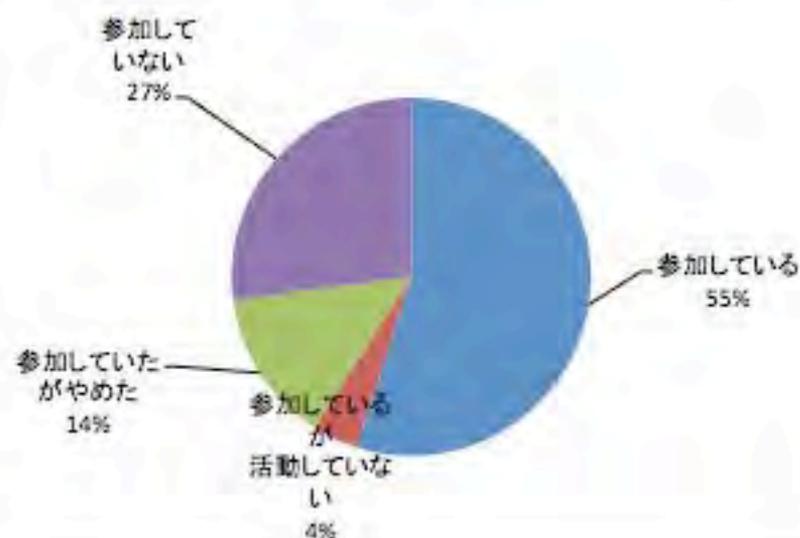
全体として満足度は高いが、「非常に満足」が学年が進むほどやや低下する。4回生でやや回復するが。大学院生の「非常に満足」は低めである。

京都府立大学の事務サービスに



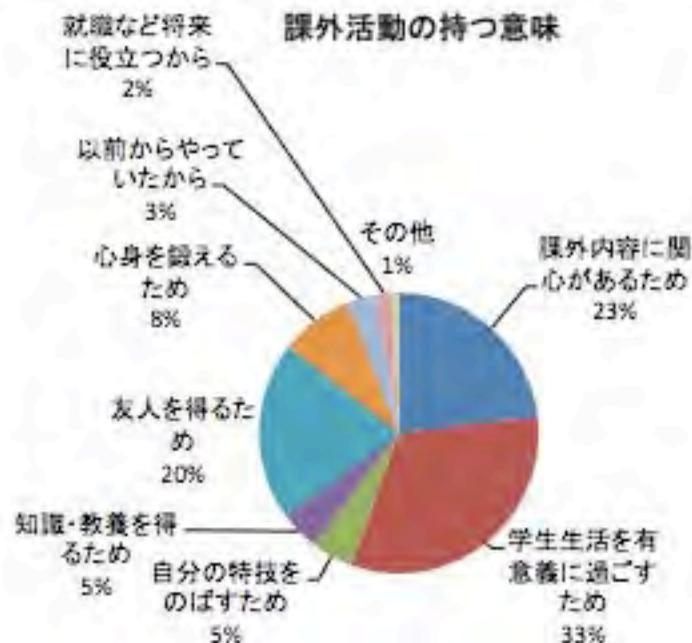
全体として不満度は低いが、満足度も50%以下と高くない。

学内・学外の課外活動に



半数強が現在参加している。全く参加したことがない者は1/4程度である。

課外活動の持つ意味



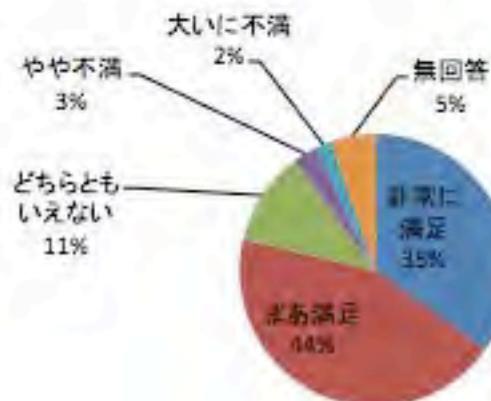
「学生生活を有意義に過ごすため」、「課外内容に関心があるため」、「友人を得るため」、が特に多かった。

課外活動の1週間の活動状況



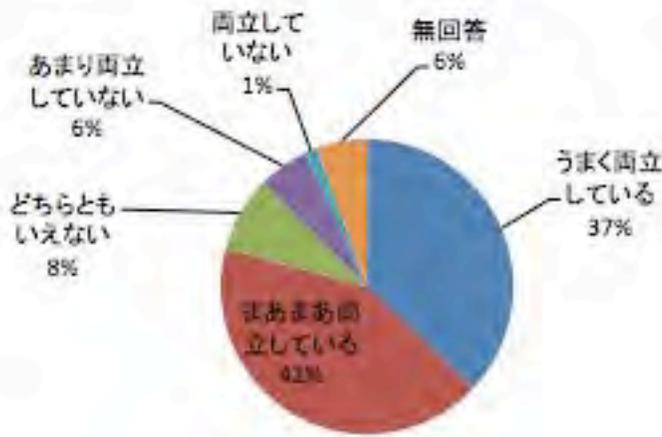
課外活動を行っている者の2/3は週3日以上活動に参加している。

課外活動の満足度



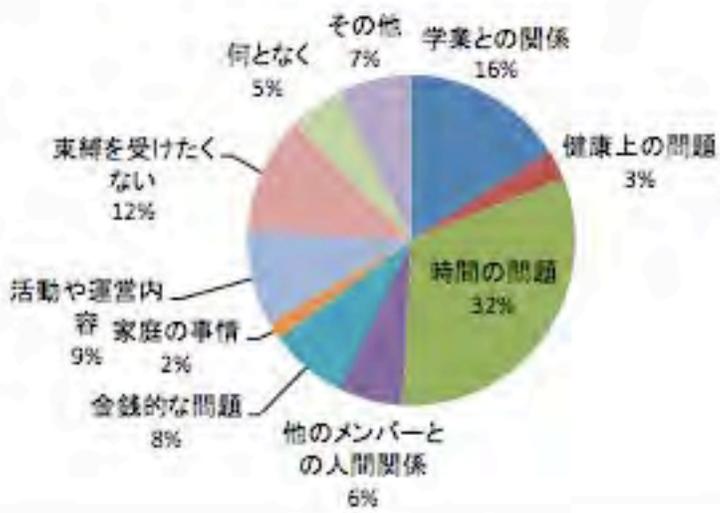
「非常に満足」、「まあ満足」を合わせると、約8割が満足している。不満を持ちながら続けている者が5%存在する。

課外活動と授業は



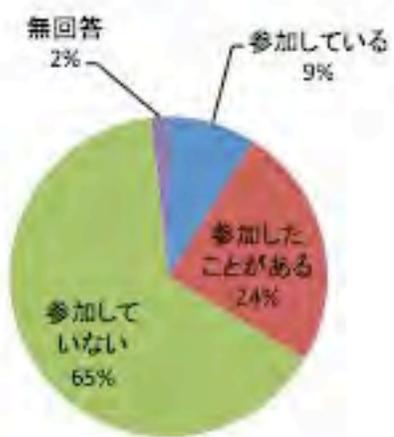
「うまく両立している」、「まあまあ両立している」を合わせると、約8割が両立していることになる。はっきり両立していない者は7%である。

課外活動をやめた理由、参加しない理由



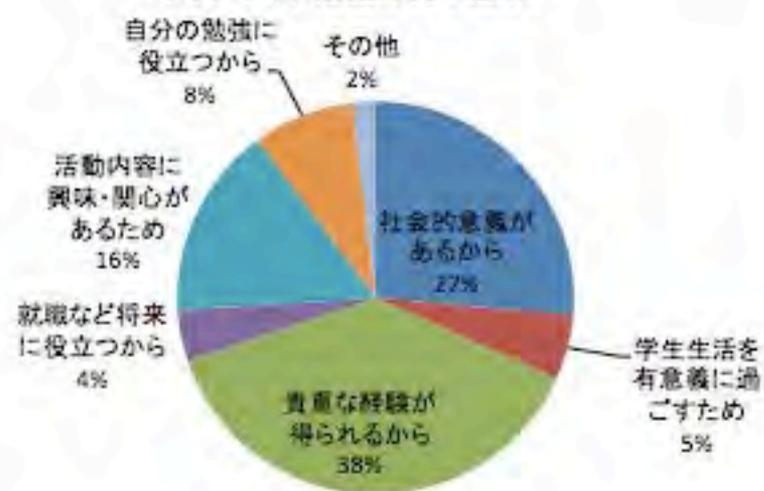
「時間の問題」、「学業との関係」が理由として多い。「束縛を受けたくない」、「活動や運営内容」が続く。

ボランティア活動に



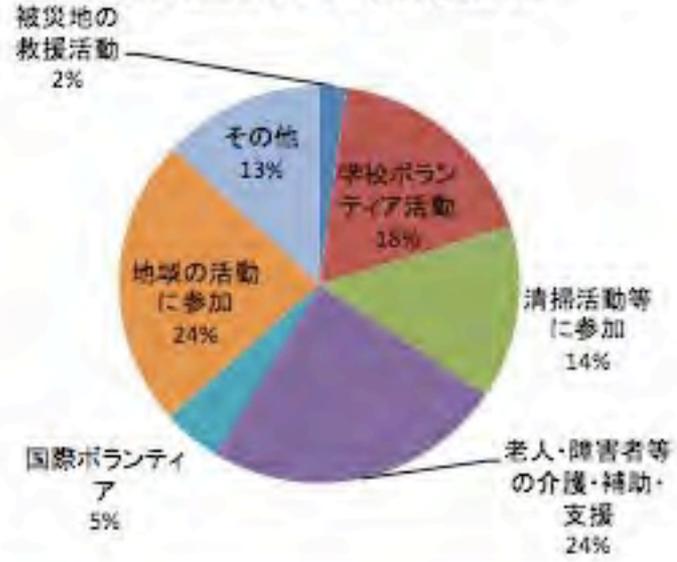
現在参加している者は9%、参加したことがある者を合わせても1/3程度である。参加を経験したことがない者が2/3に達する。

ボランティア活動の持つ意味



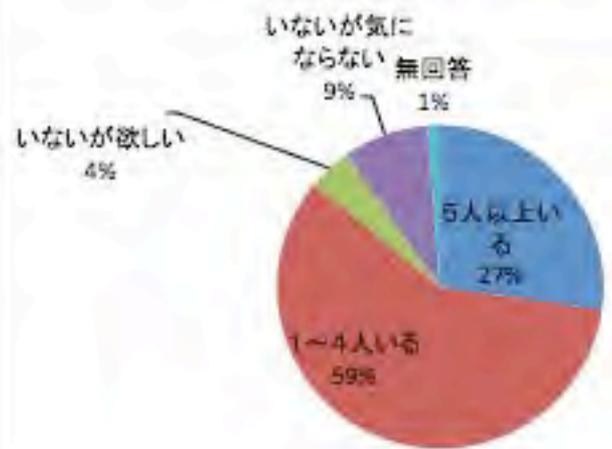
「貴重な経験」が38%、「社会的意義」が27%と高く、「活動内容に興味」が16%と続く。社会的意義に合わせ個人的な要求が活動参加のモチベーションになっている。

参加したボランティア活動の内容



「老人等の介護」、「地域の活動」が24%と高い。「学校ボランティア」、「清掃活動等」がそれに続く。多様な活動がされていることが分かる。

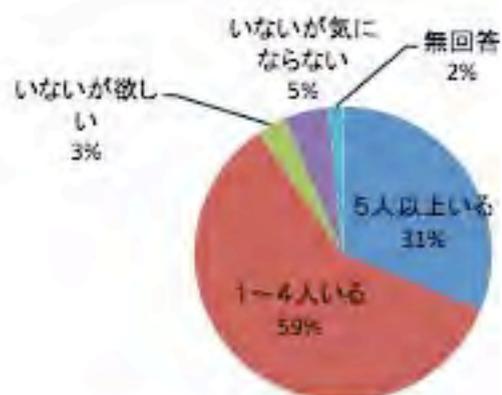
自分のことについて相談できる友人が学内に



86%は1人以上の相談できる友人がいる。いないものが13%もある。何かの手助けが必要かもしれない。

50②

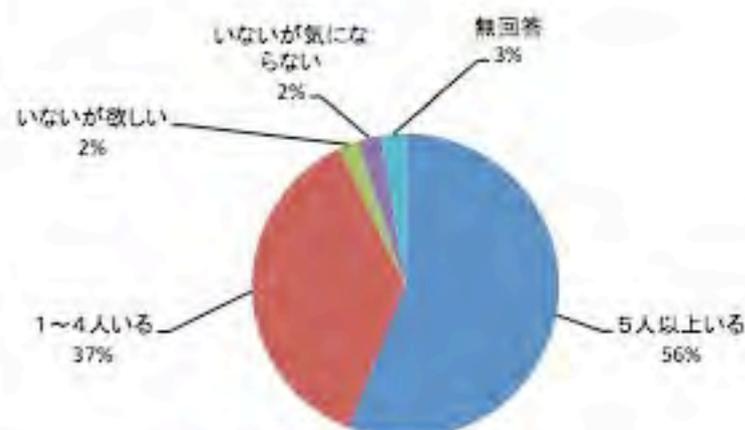
自分のことについて相談できる友人が学外に



50①とほぼ同様の傾向。いないものは減少しているが、8%もある。

51①

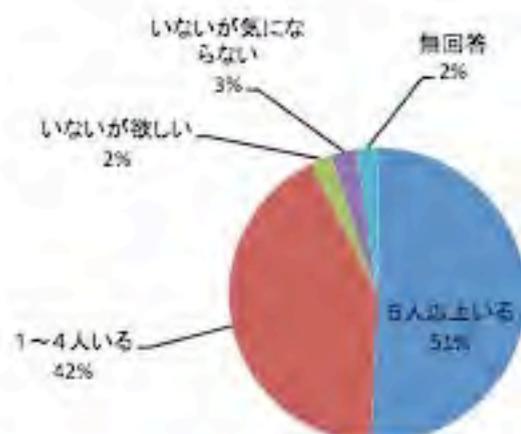
必要なとき、情報を交換する友人が学内に



当然のことながら相談できる友人より、友人数が多い。いないと答えたものが4%もあり、何らかの対応の必要が感じられる。

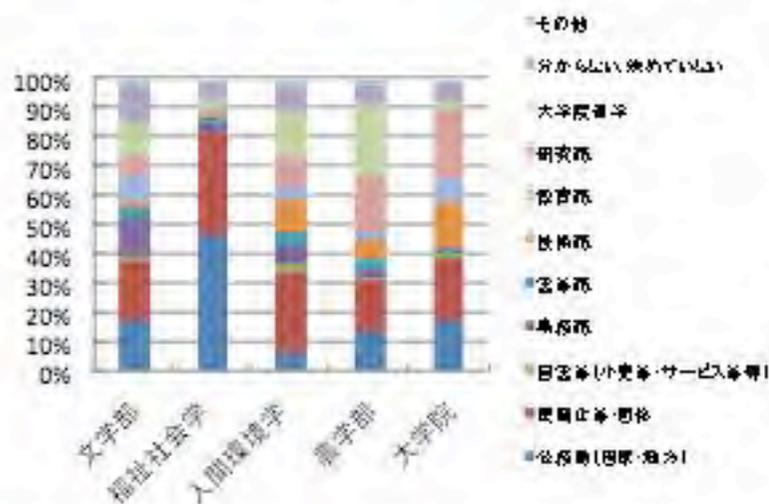
51②

必要なとき、情報を交換する友人が学外に



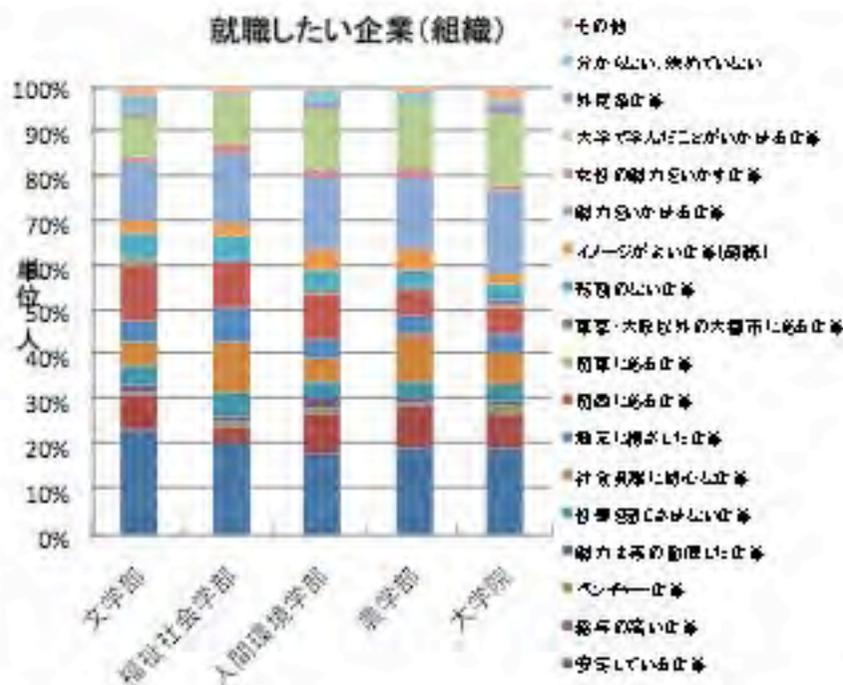
51②と同様の傾向

今後の進路希望



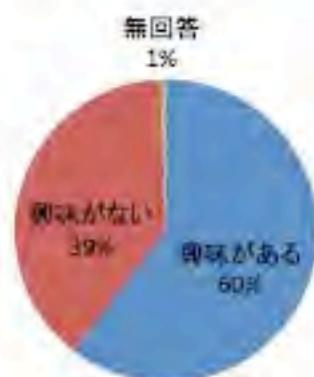
福祉は公務員が極めて多く、民間企業などと併せると8割を超える。農は大学院進学と研究職・教育職の希望が多く45%程度で、公務員や民間への就職希望もほぼ同数である。人環も農と類似の傾向があるが、技術者としての就職や民間への就職が多い。文は人環に似ているが、これといった特徴は見られない。大学院では研究職の割合が比較的高いが、民間企業、公務員、技術職の割合も少なくない。

就職したい企業(組織)



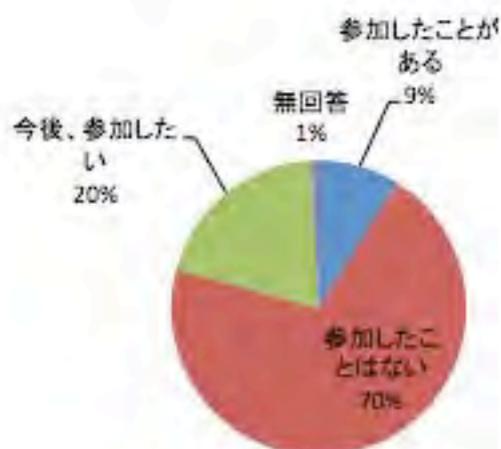
「安定している企業」、「能力を生かせる企業」、「学んだことが生かせる企業」が多く、「給与の高い企業」、「関西の企業」が続く。

インターンシップに



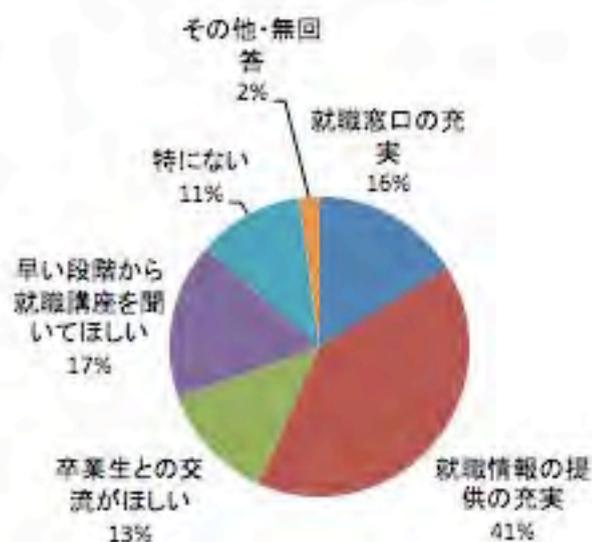
6割がインターンシップに興味を示している。学ぶ分野によっても比率が異なると思われる。

インターンシップに



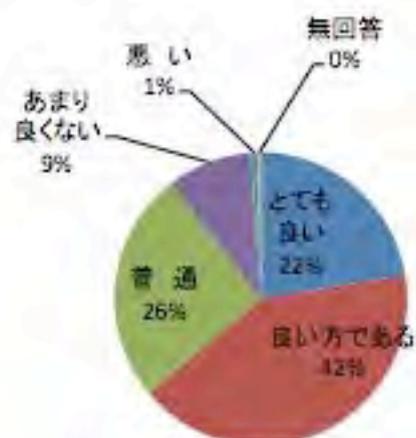
「参加経験」が9%、「参加希望」が20%で、合計約3割であった。興味はあるが具体的な参加の意志のない者が7割に達する。

就職支援の面で大学に希望すること



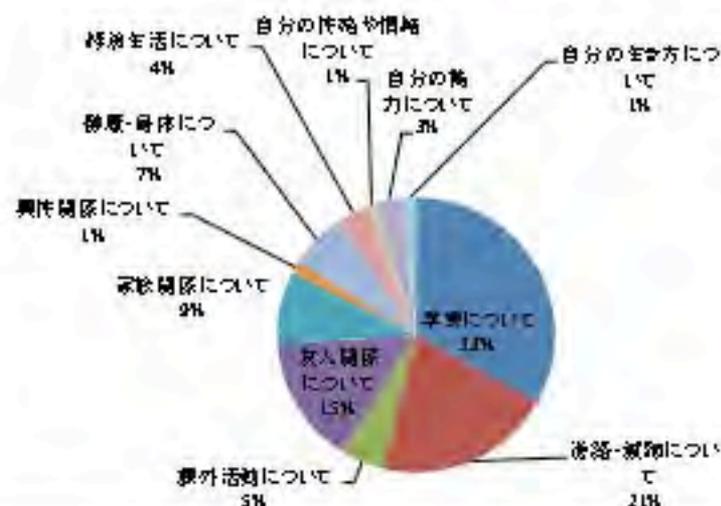
「就職情報の提供」が41%と特に多い。「早期の就職講座開講」、「窓口の充実」、「卒業生との交流」もそれなりにある。

健康状態は



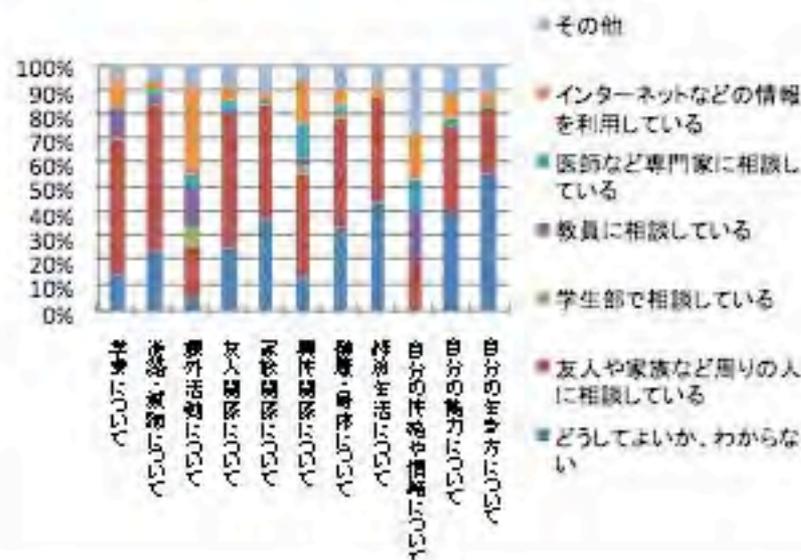
「あまり良くないが」と「悪い」を合わせると1割となる。若い年代であることを考えると、あまりよい数字とは言えない。

悩みや不安の内容



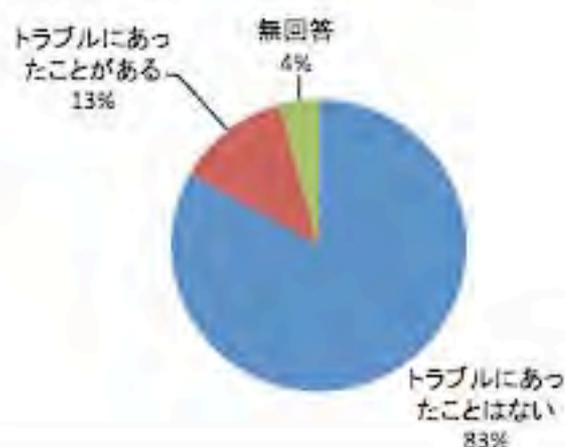
「学業について」が33%と多い。学業が結構ハードなことを示しているのかもしれない。次いで「進路、就職について」が21%、「友人関係について」が15%と多い。

悩みや不安の解決方法



友人や家族などへの相談が多い。学業以外に教員への相談はない。教員への相談は学業においてもそう多くはない。どうして良いか分からないという回答も多い。インターネットは学業(教員に相談と同程度)や課外活動の問題解消に活用されている。

トラブルについて



「トラブルにあったことがある」は13%であるが、これが多いのか少ないのか、また内容も不明で判断が難しい。

① 教育

アメリカ合衆国との学生交流事業

(1) オクラホマ州との青少年交流事業への参加（平成 19 年 9 月 11 日～9 月 21 日）、および特別授業の実施（平成 19 年 11 月 19 日、於京都府立大学 2 号館）

京都府と青少年交流事業を続けているアメリカ合衆国オクラホマ州からは、毎年青年団が本学を訪問し、平成 18 年度までは大学院英語英米文学専攻の院生と交流をしてきた。

平成 19 年度はオクラホマ州の建州 100 周年にあたり、京都府から大学生を派遣したいとの京都府国際課からの呼びかけに応じて、西洋文学専攻から 3 名が参加した（1 回生、2 回生、4 回生各 1 名）。金澤教授（当時准教授）による懇切な事前指導を受けた 3 名は、平成 19 年 9 月 11 日～9 月 21 日の間、オクラホマ州でホームステイをしながら表敬訪問、学生会議、公開フォーラムに出席し、現地の学生と交流した。参加者にとって知的刺激に満ちた素晴らしい経験となった。

平成 19 年 11 月 19 日には、「京都府青少年国際交流推進事業」参加者報告会」を西洋文学専攻の学生を対象に特別授業として行い、金澤教授によるオクラホマ州の紹介の後、交流事業参加者 3 名のプレゼンテーション、出席者との質疑応答を行った。専攻の学生たちが参加者の経験を共有できるよい機会となった。

(2) サンディエゴ大学日本語学科学生との交流（平成 20 年 1 月 18 日）

京都府商工部観光振興課からの依頼に応じて、サンディエゴ大学日本語学科学生 6 名、引率教員 1 名との交流を受け入れた。西洋文学専攻 1 回生 5 名、2 回生 4 名が金澤教授からのアドバイスを参考に、自主的に交流の企画と受け入れ準備を行った。平成 20 年 1 月 18 日、サンディエゴ大学の学生と共に日本の伝統文化とポップカルチャーを学ぶために 2 コースに分かれ、二条城や京都マンガミュージアムを見学しながら交流した。引率の高木ひろ子講師とは金澤教授・野口教授が、今後の学生間交流の可能性について懇談した。その後、一行は本学学生課主催の恒例となっている「留学生との交流餅つき大会」に参加し、楽しい時を過ごしながら、それぞれの文化について学んだ。学生たちには、日本を紹介するよい経験ができた。

なお、この交流の様子は、京都新聞（平成 20 年 1 月 19 日朝刊）でも取り上げられた。

平成 19 年度 全学共通教育研究費 実施報告

朝食会による食農教育 ～食生活改善を目指して～

人間環境学部 食保健学科 教授 東あかね、4 回生 和木千尋
附属農場 農場長 藤目幸擴、准教授 本杉日野、4 回生 山木鮎美

【背景】国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むことができる社会の実現をめざして、平成 17 年に食育基本法、平成 18 年度には食育推進基本計画が策定された。この計画に、朝食を欠食する国民の割合の減少、特に 20 歳代男性の欠食率 30%を 15%以下にする推進目標が設定されている。平成 17 年度国民健康・栄養調査によると、朝食欠食率は 20 歳代が最も高く、一人世帯に限ると 49.4%であった。本学では平成 17 年度より主に 1 回生を対象に学生の朝食摂取による健康増進と規則正しい生活習慣の確立を目的に朝食事業を行っており、朝食参加群で野菜料理や牛乳摂取頻度が増加し、参加群全員および 1 回生以外の学生が朝食会の継続と参加を望んでいた。

【目的】平成 20 年度より人間環境学部と農学部の統合を迎えるにあたり、食保健学科と附属農場の交流を図り、農場の旬の野菜を利用した朝食と農場における栽培についての情報を提供し、農業への関心を高めること、および事業前後の食習慣と生活習慣を評価することとした。

【対象・方法】全学部・学年に朝食会の参加を呼びかけた。10 回分の朝食券を購入した 56 名のうち、解析対象者は、朝食参加が 8 回以上で前後のアンケートが揃っている下宿生 36 名（男子 10 名、女子 26 名、平均年齢は 19.9±1.5 歳）である。朝食会開始前に食品摂取頻度 19 項目、朝食摂取状況などの食習慣 7 項目、就寝・起床時刻などの生活習慣 7 項目、排便状況などの身体状況 2 項目、健康に対する関心度 1 項目、野菜への興味に対する関心度 1 項目、計 37 項目の自記式アンケートを行った。毎週水曜日、午前 8 時 20 分から 10 時、生協食堂にて前期・後期各 10 回ずつ、毎回 50 食提供した。朝食の献立は主食、主菜、副菜、汁物、果物を基本とする和食の献立を中心とし、エネルギー 500～850kcal の 4 種類を米飯の量で調整し、19 歳～28 歳男女の推定エネルギー必要量の 1/3 に対応させた。野菜 120g、果物 80g、塩分 3.0g 以下、食物繊維 7.0g 以上の条件を満たす献立とした。食材の一部には府立大学附属農場で収穫された米や野菜を利用した。また、献立内容と栄養表示、農場便りを掲載したプリントを配布し、毎食後のアンケート結果や次回の献立をポスターで掲示した。最終回の朝食会において事前アンケート項目に朝食会の評価に関する質問 5 項目を追加した事後アンケートを行い、比較した。

【結果・考察】男子下宿生で、野菜たっぷりの料理を 1 日 1 食以上摂る者が朝食会前後で 30%から 60%へ有意に増加し、淡色野菜を毎日摂取する者が 40%から 60%へ増加した。全体では海藻を週 3 回以上摂取する者が 16.7%から 27.8%へ増加した。これは朝食に多くの野菜を取り入れ、野菜の情報を提供し、家でも実践できるようレシピを加えた効果と考えられる。朝食欠食率は全体で 56%と高く変化がなかった。野菜の生産や調理への関心は男子で 80%、女子では全員が興味を持っていると回答した。事後アンケートでは参加群全員が朝食会の継続を望んでいた。

【結論】朝食会を通して、野菜の情報提供やレシピの提供など食材の生産から食べるところまでを伝える食農教育を積極的に行うことで男子下宿生の野菜摂取頻度が増加した。

謝辞：本事業は平成 19 年度全学共通教育研究費の助成により、農場および本学生活協同組合のご協力を得て実施しました。関係各位に厚く御礼申し上げます。

② 研究

共同研究の成果発表としての出版事業

『メアリー・ポピンズのイギリス---映画で学ぶ言語と文化』（野口祐子編著、世界思想社、2008年3月）を英文学、英語学教員と共同研究員で共同執筆した。これは本学の生涯教育の一環として、平成18年度に行ったリカレント学習講座を元に、その後も継続した共同研究の成果をまとめたものである。「内容は深く、表現は易く」を旨として執筆したので、高校生から社会人まで、楽しみながら英語とイギリス文化を学べる内容になっている。

[本書の目次]

イントロダクション（野口祐子）

第1章 メアリー・ポピンズがやってきた！---映画の見どころ・聞きどころ（野口祐子）

第2章 バンクス一家を紹介します---登場人物分析（野口祐子）

第3章 お父さんの成長物語---映画のテーマとモチーフ（野口祐子）

第4章 ♪ひと匙のお砂糖で♪---『メアリー・ポピンズ』に見る子育て（浅井学）

第5章 ♪鳩に餌を♪---2 ペンスと想像力（野口祐子）

第6章 ♪煙突掃除はすてきな稼業♪にあらず---ロンドンの労働者（長谷川雅世）

第7章 英語から探る『メアリー・ポピンズ』の魅力---「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス」の魔法の力（山口美知代）

第8章 時代を映す鏡としての『メアリー・ポピンズ』---1910年、1964年、そして現代（野口祐子）

本書の出版は、本学の平成19年度研究成果発表支援事業に採択された。助成を受けて、平成20年3月に、本書を京都府内の公共図書館80箇所、高等学校116校、生涯教育関係機関10箇所などへ、京都府民の利用に供するために送付した。

平成 19 年度植物感染生理談話会

日本植物病理学会 平成 19 年度植物感染生理談話会を 19 年 8 月 9 日 ~ 11 日の 3 日間に京都府立大学 大学会館で開催した。

I. 細胞間コミュニケーションのダイナミズム

1. 病原体認識とシグナル伝達

蔡晃植 (長浜バイオ大学 バイオサイエンス研究科) イネのフラジェリン認識によって誘導される過敏細胞死の機構解析

渋谷直人 (明治大学 農学部) PAMPs/MAMPs 認識と防御応答シグナル伝達の分子機構

光原一郎 (農業生物資源研究所) 過敏細胞死の情報伝達と防御応答

川崎努 (奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科) G タンパク質を介した病原体認識シグナルの伝達

吉岡博文 (名古屋大学 大学院生命農学研究科) 植物免疫におけるラジカルバーストの分子機構

椎名隆 (京都府立大学 人間環境学部) 植物の細胞シグナル伝達における葉緑体の役割の再評価

2. 病原体の増殖と感染

寺内良平 ((財) 岩手生物工学研究センター) イネ-いもち病菌相互作用の解析

木場章範 (高知大学 農学部) 植物病原細菌の感染を制御する宿主応答機構〜*Ralstonia solanacearum*-*Nicotiana* 属植物相互作用の解析〜

荒瀬栄 (島根大学 生物資源科学部) トリプタミン経路を介したイネの抵抗性発現機構

朴杓允 (神戸大学 大学院農学研究科) 病害ストレスに対する宿主の細胞応答に関する電子顕微鏡解析

3. 病原体の増殖と感染

高野義孝 (京都大学 大学院農学研究科) ウリ類炭疽病菌の感染戦略に必要な代謝機能

篠原信 (野菜茶業研究所 野菜 IPM 研究チーム) 細菌細胞間情報伝達システム (クオラム・センシング) と病原細菌の動態について

石橋和大 (農業生物資源研究所、北海道大学 大学院農学研究院) トマト *Tm-1* 遺伝子によるトマトモザイクウイルス増殖抑制機構の解析

大村敏博 (中央農業総合研究センター) イネ萎縮ウイルスがコードする 12 種タンパク質の感染細胞内での動態とウイルス複製

II. 遺伝的多様性と変異のダイナミズム

土佐幸雄 (神戸大学 農学部) いもち病菌非病原力遺伝子の変異と彷徨

上田一郎 (北海道大学 大学院農学研究院) クローバー葉脈黄化ウイルスの病原性

露無慎二 (静岡大学 創造科学技術大学院) 非病原力遺伝子の圃場における安定性決定要因について: 病害抵抗性育種の一戦略

III. 総括・討議

白石友紀 (岡山大学 農学部) 今、感染生理は何を明らかにすべきか? 路傍から見て

③地域貢献

平成19年度 新・京都SKY大学

◇共通教養講座

宗田 好史「府民参加ですすめる環境再生まちづくり」

◇専門講座

東 あかね「食生活による生活習慣病の予防」

築山 崇「福祉と学びのまちづくりー集いの場・語らいの時を身近な地域にー」

赤瀬 信吾「王朝和歌と『源氏物語』」

池田 敬子「俵藤太物語（竜宮篇，将門篇）」

母利 司朗「江戸時代の作文教育」

藤原 英城「浮世草子の誕生ー西鶴から都の錦へー」

櫛木 謙周「古代王権の成立と展開」

上田 純一「古文書入門」

水本 邦彦「天下人と京都」

小林 啓治「インターナショナルな精神の誕生ー近代日本とロマン・ロラン」

上島 享「古文書の魅力」

京都府立大学文学部公開シンポジウム
「風雅と学びを求めて ―近世日本と西欧の旅体験―」

日時： 2007年10月20日（土）午後1時～5時

会場： 京都府立大学・合同講義棟3階・第5講義室

内容：

観光京都のあらたな発展のために、人が求める旅の面白さ、旅人を受け入れるもてなしのあり方について、洋の東西を比較することから考えてみる。とくに観光旅行が本格化する近世の例を比較し、さらに「旅のうさ」からもてなしのあり方を考える。

構成：

- ・第一部：旅行ガイド・モデルの成り立ち

母利司朗（文学部教授）

「俳諧師の旅と宿り ―漂泊行脚の理想と現実―」

川分圭子（文学部准教授）

「18世紀のグランドツアー ―物見遊山と教養―」

- ・第二部： パネルディスカッション「旅の憂さから旅ともてなしを考える」

パネラー

青地伯水（文学部准教授）

岡本隆司（文学部准教授）

金澤 哲（文学部教授）

川分圭子（文学部准教授）

母利司朗（文学部教授）

司会

渡邊 伸（文学部教授）

参加者： 約30名

上記シンポジウムの成果を踏まえ、『旅ともてなしの文化論』（京都府立大学・旅ともてなしの比較文化研究会編，春風社）を刊行した。

③地域貢献

日中演劇シンポジウム「しらべとしぐさ」
能楽と崑曲～日中伝統演劇の比較研究～

日 時： 2008年2月16日（土） 13：30～17：00

場 所： 金剛能楽堂（京都市上京区烏丸通一条下ル）

主 催： 京都府立大学文学部，京都府立大学国文学会

参加者： 400名強

概 要：

1. あいさつ …… 竹葉剛（学長）
2. 趣旨説明 …… 小松謙（文学部教授）
3. 能楽と崑曲の演じ方
…… 能楽：山崎福之（文学部教授），山崎芙紗子（観世流能楽師）
崑曲：赤松紀彦（京都大学准教授），前田尚香（崑曲研究家）
4. 崑曲『牡丹亭』「尋夢」解説と上演
…… 解説：小松謙，赤松紀彦
上演：前田尚香，柴礼敏ほか京都江南絲竹会
5. 能楽「葵上」解説と上演
…… 山崎福之，山崎芙紗子，浦田保浩（観世流能楽師）他
6. 総合討論
…… 司会：小松謙
コメンテーター：池田敬子（文学部教授），野間正二（佛教大学教授）

総 評：

寒気厳しき折にもかかわらず、開場前から多数の来場者があり、開場時間を早めることとなったばかりか開演15分前にはほぼ満席となり、開演後に来られた10数名の方々には入場をお断りすることとなった。うれしい悲鳴でもあったが、また今後の開催に向けての反省点ともなった。

世界無形文化遺産の「能楽」と中国古典演劇の「崑曲」について、共通点や相違点を探るという試みは大変興味深いものであった。初めに足運びの特徴や指や手を使った表現、感情の表現や動作の表現についての説明、そして用いられる様々な楽器について、材質や音の特徴などの説明を行った後、実際の上演という形をとったため、聴衆には非常に分かりやすいものとなったように思う。

最後の総合討論の折には、ユネスコ北京事務所代表の青島泰之氏、在大阪中国総領事館の李哲領事から祝辞をいただくこともできた。「日中演劇シンポジウム」は、一昨年に続いて2回目の開催であり、今回は実演に比重を置く形を試みたが、成功であったと思う。終了後のアンケートでは、ほぼ全員の方が「大変良かった」「良かった」と記した上で、今後も伝統文化に関する催しに期待するという思いをこめた感想をお寄せくださった。会場として、京都でも由緒ある舞台である金剛能楽堂で開催したことも、好評をいただいた理由の一つかと思われるが、こうした催しに対して、京都府民・京都市民をはじめ一般の方々が高い関心を寄せてくださるということ、あらためて実感した。今後もさまざまな工夫を凝らしながら、積極的に取り組んでいきたい。

③ 地域貢献

京都新聞連載記事
古典籍を読む

期間： 2007年3月～2008年3月

内容：本学教員が執筆した回は次の通りである。

2007年3月1日	安達 敬子「源氏物語」
3月22日	藤原 英城「西鶴 万の文反古」
4月5日	山崎 福之「嵯峨本 楊貴妃」
4月26日	小松 謙「張竹坡本 金瓶梅」
5月3日	池田 敬子「平家物語 屋代本」
5月24日	井野口 孝「全韻玉篇」
6月7日	安達 敬子「奈良絵本」
6月28日	青木 博史「中興禅林風月抄」
7月5日	池田 敬子「三人法師一室町物語」
7月26日	林 香奈「直江版 文選」
8月2日	赤瀬 信吾「古今大事」
9月27日	母利 司朗「薄雪物語」
10月4日	赤瀬 信吾「明月記」
10月25日	山崎 福之「万葉集略解」
11月1日	母利 司朗「京童」
12月6日	小松 謙「人鏡陽秋」
2008年1月24日	青木 博史「和蘭字彙」
2月7日	安達 敬子「源氏物語全部引歌並詩古語」
3月6日	藤原 英城「人倫糸屑」

この他に、府立総合資料館の職員が4回にわたって執筆している。

評：

各教員と府立総合資料館職員との連携のもと、滞りなく一年にわたる連載を続けることができた。結果として、各執筆者がそれぞれの専門的知識を発揮して、総合資料館の多様な資料を分かりやすく府民に紹介することができたことは、本学教員が持つ専門知識の地域社会への還元という点で意義あるのみならず、総合資料館が持つ貴重な財産を府民に周知してもらうことができたという意味でも、大きな成果であったといつてよかろう。また、執筆分担のみならず、資料の選択・撮影などにおいても本学教職員と総合資料館職員が緊密に連絡を取りながら作業を進めたことは、今後求められる総合資料館との協同への第一歩としても重要な意味を持つものと思われる。

この連載記事を基礎に、来年度は総合資料館との共催によるシンポジウム開催や、よりわかりやすい形による新たな古典籍紹介記事を連載することなどが決定しており、現在着実に準備を進めているところである。今後総合資料館との連携を一層強化しながら、地域への貢献を図ることが期待される。

③地域貢献

京都府立大学公共政策学部・研究科開設記念シンポジウム

山田啓二 京都府知事を講師に迎え、2008年1月28日、本学大学会館において、京都府立大学公共政策学部・研究科開設記念シンポジウム「地域が活きる分権型社会の構築に向けて」を開催した。

○山田知事記念講演

山田知事からは、「地域力再生と大学の役割」と題して、「これからの日本を考えると、住民自治組織、NPO、大学、企業など、地域の様々な主体と行政とが、協働で課題を解決する『水平型ガバナンス』が必要である。大学も『水平型ガバナンス』の担い手の一つであり、新たに誕生する公共政策学部・研究科も地域を再生するため、その一翼を担ってほしい。」と講演されて、新しい府立大学への期待を語られました。

○パネルディスカッション

続いて、「地域力再生と『公共』政策」をテーマに、小沢修司福祉社会学部長をコーディネータとし、井上正嗣 宮津市長や深尾昌峰 きょうとNPOセンター常務理事、4月に公共政策学部に着任予定の窪田好男 神戸学院大学准教授、佐野亘 人間環境大学准教授、本学からは川瀬光義教授も加わったパネルディスカッションが行われ、新たな公共政策学部・研究科の役割と、自治体・NPO・企業等との協働や連携の必要性についてそれぞれの立場からの提案が行われました。

[概要]

- 1 あいさつ 京都府立大学 学長 竹葉 剛
- 2 記念講演 「地域力再生と大学の役割」～新学部・研究科への期待を込めて～
山田啓二 京都府知事
- 3 パネルディスカッション 「地域力再生と『公共』政策」
【パネラー】井上正嗣 宮津市長
深尾昌峰 (特)きょうとNPOセンター常務理事・事務局長
川瀬光義 福祉社会学部教授 (地方財政論)
窪田好男 神戸学院大学法学部准教授 (政策評価)
佐野 亘 人間環境大学人間環境学部准教授 (政治学)
【コーディネータ】
小沢修司 福祉社会学部長
- 4 あいさつ 京都府立大学地域学術調査研究センター長 宗田 好史

京都府立大学地域貢献型研究助成事業

「京都における住まい・地域に視点を置いた温暖化防止対策に関する研究活動」について

京都府は、「気候変動枠組み条約第3回締約国会議」(COP3)開催地であり、「環境先進地・京都」を目指して「京と明日の共生計画—地球温暖化対策推進版」(1999)、「地球温暖化対策プラン」(2002)、「地球温暖化対策条例」(2005)等の様々な取組を進めている。本研究では、本学人間環境学部と福祉社会学部の教員有志が京都府企画環境部温暖化対策プロジェクトおよび他大学(広島国際大学、近畿大学)、関連団体(京都府温暖化防止活動推進センター、気候ネットワーク、京エコロジーセンター)と連携して、府民のライフスタイル、社会心理、土地利用計画、住宅・設備機器の改善等の視点から温暖化対策について調査・分析して、その成果を府民・市民に対して発信し、普及啓発することを目的としている。2007年度は、具体的に以下の課題に取り組んだ。

1. 体感温度の観点からの省エネルギーについて、京町家などの室内や土間の表面温度が低いことに注目して、この特徴を生かした床放射冷房をとりあげ、その省エネルギー効果を確認した。今年度は、さらに体表面積・対流伝熱面積・放射伝熱面積・伝導伝熱面積を被験者実測により明らかにした。一連の姿勢を考慮した体感温度の研究が、温暖化対策としても重要な価値を持つことが再確認された。
2. 伝統的な防暑行為に注目して、京都市内での、打ち水、夕涼み、すだれなどの伝統的な防暑行為の実施実態を明らかにし、積極的に行っている人は、冷房の使用がかなり少ないことを示した。
3. 暖冷房の使用抑制に関して重要な温冷感の尺度を改善する可能性を探るため、住宅での調査を行った結果、評価尺度の違いの影響が、申告の分布、中立温度などに示された。以上より、これらの研究を深めることの意義が示された。
4. 建築分野特に戸建て住宅の対策が重要であり、環境性能評価システムとしてCASBEE-住まい(戸建て)が開発されているが、消費者の意識を知るために、アンケート調査を行い、結果が得られた。(1)消費者にとってCASBEE-すまい(戸建て)の認知度は低いを受けた人が多い。(2)中項目では、安心・安全や長寿命などの項目の重要度が高く、周辺環境に関する項目は重要度が低かった。(3)受けるか否かの意思決定に、評価費用が大きく影響していた。(4)支払意思額は60,407円となり、予想される費用の数分の一であった。
5. 地球温暖化問題の解決のために、個人の意識・行動を社会の利益に沿うように変容させる「説得」方法について検討した。今回の結果から、地球温暖化問題をめぐる説得において、数値説明も感情喚起も単独で十分有用であることがわかった。両者の複合による効果の上積みは見られなかったが、現実場面で利用する場合にはこの方法が最も有効だと考えられる。
6. 夏期の冷房負荷の大幅な削減が期待されるみどりのカーテンを普及する環境教育プログラムを開発し、府内の小学校と保育園を対象に実施した。また、「みどりのカーテンを使った環境教育の事例大集合!」と題した交流会(11月29日)を開催し、福知山市、八幡市、京田辺市、木津川市、から報告があった。さらに昨年度発行したガイドブックの改訂作業にも協力した。
7. 温暖化対策に関する普及・啓発活動:ニュージーランドの環境共生住宅在住の櫻井美政氏講演会(7月)の開催、および京都府建築士会「住まいの環境研究会」3回の連続講演会の後援を行った。後者は、代表者が「京都という地域の特徴」「暑さ寒さと暮らし方」「環境と人間の五感」というタイトルで講演を担当した。

今後は、京都府地球温暖化対策課との連携を密にして「京都の知恵と文化を生かした暮らし方を提唱する懇話会の設置」などの施策などに、本研究成果を有効に活用できるように努力したい。

農学部附属農場における地域貢献（公開行事、講習会、研修、講演会など） 2007年度の実績

(1) 第23回 農業技術講演会（10月31日13:00～17:00 大学会館多目的ホール）

京都府農林水産部との共催行事として年1回開催。対象は府立大学教職員、学生、京都府農林水産部関係者、農業関係者、関連企業、一般など約80名の参加

プログラム

【第1部】共同研究中間報告会「小豆の生産振興に係る取組状況」（13:00～14:00）

① 小豆の栽培・消費に係る実態調査経過報告

府立大学農学研究科農業経営研究室 准教授 桂明宏、助教 中村貴子

② 小豆作付面積拡大阻害要因の解明

農業総合研究所 企画経営部 主任 中西宏彰

③ 南丹地域における省力機械化栽培による産地育成

南丹農業改良普及センター 主任 足利幸

【第2部】講演会「地球温暖化対策としての環境調和型農業技術」（14:30～17:00）

◆ 基調講演 地球温暖化対策とバイオエタノール事情

府立大学農学研究科動物機能学研究室 講師 宮崎孔志

◆ 研究報告

① 水田におけるメタン発生抑制に関する研究

農業総合研究所 環境部 主任 小西あや子

② 温暖化に対応した稲作栽培技術に関する研究

丹後農業研究所 主任研究員 大橋善之

③ 屋上緑化に適した花き苗生産技術に関する研究

農業総合研究所 花き部 主任研究員 末留昇

◆ 総合討論 地球温暖化に対する研究の今後のあり方

(2) 京都府農業資源研究センター・京都府立大学農学部附属農場合同 試験成績報告会

3月7日 10:15～12:00 ホテルセントノーム京都

京都府農業資源研究センター研究および京都府立大学農学部附属農場教員による研究成果報告会。
対象は府下農業関連行政機関、近隣大学農学部、一般農業従事者、関連企業など80名程度。

プログラム

① 基調報告：発育制御のための野菜の開花生理

府立大学大学院農学研究科 教授・附属農場長 藤目 幸擴

② 個別報告：トウガラシ育種の効率化に向けたDNAマーカーの開発と利用

農業資源研究センター応用研究部 主任 南山 泰宏

資料編

- (3) 全国大学附属農場協議会・日本学術会議農学基礎委員会農学分科会合同シンポジウム
「食育の現状と大学附属農場等の果たすべき役割」 5月11日 日本学術会議講堂
加盟校の取り組み例(1)として『「ユーカーチャーデー」および「おいしい朝食 成績アップ事業」』という題目で報告(本杉)
- (4) ユーカーチャーデー
小学生コース(8月2日 10:00~16:00) 食保健学科食事学研究室及び学生サークル(畑はたクラブ)の協力により夏の味覚の収穫と料理を楽しむ。小学生24名とその保護者が参加。
成人コース(11月29日 10:00~16:00) 家庭果樹の楽しみ方というテーマで、「果樹の花芽の付き方と剪定法」について中野准教授が、午後は「カキの甘渋性と渋抜き法」について本杉准教授が説明と実技講習。20代から70歳代までの京都市および農場周辺市町の方、26名が参加。
- (5) 京都府農業資源研究センター・京都府立大学農学部附属農場合同施設公開
9月1日 10:00~16:00 農産物販売・施設案内、500名を越える見学者でにぎわう。
- (6) 小・中・高等学校の児童・生徒の見学・研修等
a) 新潟南高校大学訪問(10月17日 15:00~16:30) 理・農・食品系学部志望2年生49名(引率教員2名) 遺伝子工学研究室(増村講師)と共同で受け入れ
b) 京田辺市立田辺中学校職場体験(11月22日) 中学2年生3名 大迫講師指導
- (7) 京都府職員研修
1月~9月(延べ10日間) 京都府乙訓農業改良普及センター職員1名 ブドウの栽培技術習得
- (8) 農業団体等の研修
a) JA醍醐組合員研修(9月6日) 組合員約10名による視察
d) アメリカンセミナー卒業生の会(10月19日) 約20名 アメリカ農業研修経験者グループ 全国組織。果樹栽培技術などについての懇談
c) 精華町シルバー人材センター 果樹剪定講習(12月13日) 約20名
- (9) 他大学の利用
平成19年度同志社大学プロジェクト科目「食育と健康」 農場体験と見学
(8月9日 13:00~15:00) 同志社大学学生5名と引率1名
- (10) 展示会等
第3回同志社大学けいはんな博(3月9日 11:00~16:00)
同志社大学京田辺学舎ローム館においてパネル展示と説明

③ 地域貢献

宇治田原町との連携協力包括協定について

本学と宇治田原町は、これまでの永谷宗圓茶俳句賞の創設、雲南農業大学との交流、町保育園での食育関係の調査等に係る連携実績を踏まえ、連携協力を更に進めるために、平成20年2月26日に包括協定を締結した。

1 締結の相手方

宇治田原町

2 連携・協力の内容

- (1) 地域資源を活用したまちづくりの推進に関する事項
- (2) 健康・福祉の向上に関する事項
- (3) 文化・教育の振興に関する事項
- (4) 環境にやさしいまちづくりの推進に関する事項
- (5) 協働のまちづくりに関する事項
- (6) 人材の育成に関する事項
- (7) その他目的を達成するために甲乙が必要と認める事項

「永谷宗圓茶俳句賞」選考にむけての取り組み

京都府綴喜郡宇治田原町は、江戸時代中期に、同地の永谷宗圓が新しい日本茶（現在の緑茶）の製造方法を考案し全国に広め、現在も茶製造が町の有力な産業であることにもかんがみ、「茶文化のまち」を標榜している。平成19年度には、その「茶文化のまち」を全国に発信する事業として、お茶との関わりを主題とした俳句作品を募集する「永谷宗圓記念茶俳句賞」を企画し、予算化をおこなった。

宇治田原町では、その実施にあたり、俳句賞の選考に関わるノウハウについてまず京都府立大学に照会され、来学の上、具体的な検討がおこなわれた。その結果、選考委員長に神戸大学名誉教授堀信夫氏、副委員長に本学文学部教授母利司朗、委員として同町内の有識者からなる選考委員会が組織された。

7・8月の夏休み期間を中心とした2月間にわたる募集期間を経て、京都府内をはじめ全国から、一般の部及び小・中学生の部に1,941句という多くの応募があり、慎重かつ厳正な審議の結果、各部の入賞作品が決定された。結果は同町ホームページで公表された。

「永谷宗圓記念茶俳句賞」は、来年度以降も引き続き実施される予定と聞いており、文化面における地域貢献の具体的な取り組みとして、今後も積極的に関わっていきたいと考えている。

3 大学連携フォーラム

京都府立大学、京都府立医科大学、及び京都工芸繊維大学による共同研究等の学術交流を促進し、研究活動の活性化や研究基盤の強化を図ることを目的に、「ヘルスサイエンスの総合化」をテーマとする「3大学連携フォーラム」を開催した。

日時：平成19年12月21日（金） 13時30分～19時30分

内容：○基調講演「産学連携の立場から ― 3大学連携への期待 ―」

株式会社ファーマフーズ 代表取締役社長 金 武祚 氏

○研究発表（各大学からのプレゼンテーション）

「京都府立医科大学における産学公連携の現状と将来」

京都府立医科大学大学院医学研究科 伏木信次教授・リエゾンオフィス室長

「機能性イネの開発―食べるワクチンを目指して―」

京都府立大学 田中国介名誉教授

「昆虫バイオメディカル教育プログラム開発事業

― 医工農専門領域間の国公連携教育によるプロデューサー型人材育成 ―」

京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 応用生物学部門 山口政光 教授

○ポスターセッション

○交流会

京都産業大学との学術交流協定について

本学と京都産業大学とは、交流・協力の促進により、教育・研究の充実・発展を図ることを目的として、平成20年3月26日に学術交流に関する協定を締結した。

両大学では、これまでから「京都府植物バイテク談話会」の活動等、植物バイオテクノロジー分野を中心に教員間の連携が行われてきており、またキャンパスも近隣し、連携を進める条件が整っている。今後は、大学院レベルでの連携から取組み、研究者・学生の交流を進める予定。

本学の国内での協定締結大学は、京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との3大学連携協定と併せ、3校となる。

① 次の項目について交流を促進する。

- (1) 教職員及び研究者の交流
- (2) 学生の交流
- (3) 共同研究の実施
- (4) 講義、講演及びシンポジウムの実施
- (5) 学術情報及び資料の交換
- (6) その他両者が合意した事項

② 協定期間

3年間（以後3年ごとに自動更新）

④大学運営

学部・学科、大学院の再編

平成 20 年 4 月から学部・学科、大学院の大幅な再編を行い、多様化・複雑化する社会の課題に対応できるよう、総合的で専門的・先端的な教育・研究を推進していきます。

文学部

日本・中国文学科、欧米言語文化学科、歴史学科の 3 学科構成で、文学や歴史を基盤に専門的かつ京都地域に根ざした特色ある教育・研究を推進していきます。

また、京都地域と文化を主題とする「京都文化学コース」や「英語コミュニケーションプログラム」「文化遺産学プログラム」を設けるなど、国際的視野の中で京都の文化・伝統が学べる工夫をしています。

公共政策学部

「福祉社会を目指して公共政策を拓く」というコンセプトのもとに、学部名称を福祉社会学部から公共政策学部に変更。「公共政策学科」を新設し、福祉社会学科と併せた 2 学科構成に充実します。

これにより、多様な主体とのネットワークのもとに、新たな「公共」概念を構築しつつ、様々な地域課題等に応えた教育・研究を推進するとともに、学科を超えた体系的な履修を保障する副専攻制度も設け、高い政策立案能力や問題発見・解決能力を持った人材、地域の福祉や人間形成の担い手となる人材の育成に取り組んでいきます。

生命環境学部

生命環境学部は、生命・環境・人間生活を教育研究の対象としてきた人間環境学部と農学部が、それぞれの領域をさらに充実させるために発展的に統合した総合理科系学部です。これまでの伝統と実績のある学科をベースとしながら、教育システムとスタッフを強化して有機的に結合するため、より緻密で行き届いた教育とレベルの高い研究が可能となります。そして、生命を構成する分子のようなミクロの分野から、食料の生産、植物・住居・デザイン・情報といった人とその生活を取り巻く環境、更に森林保全や自然環境を含むマクロの分野まで教育研究します。

大学院

学部・学科再編に併せて各研究科を再編し、総合的、専門的、先端的な教育・研究を一層推進していきます。

また、「公」に係る課題等に即応したシンクタンク機能の発揮など、行政と連携した教育・研究・事業の展開を進めるとともに、社会人等の再教育への対応にも積極的に取り組んでいきます。

自己評価委員会活動報告（平成 19 年度）

2007 年 5 月 2 日（水）第 1 回委員会

- ・ 前年度委員会からの引き継ぎについて
- ・ 新年度委員会体制について

2007 年 6 月 26 日（火）第 2 回委員会

- ・ 今年度の課題とスケジュールについて
 - ① 個人データの収集 — 2006 年度分データを検討，修正の後 2007 年 12 月までに収集
 - ② 外部評価依頼時の「研究活動報告書」作成 — 2008 年 2 月まで
 - ③ 外部評価委員の選定 — 人選：2008 年 2 月，依頼：2008 年 4 月予算化と同時に
 - ④ 外部評価報告書の作成 — 2008 年 8 月まで
 - ⑤ 年次報告書 2007 の発行

2007 年 9 月 20 日（木）第 3 回委員会

- ・ 06 年度収集の個人データ分析 — 各学部委員会における検討結果についての報告
- ・ 外部評価委員依頼へ向けての課題の検討

2007 年 10 月 12 日（金）第 4 回委員会

- ・ 外部評価委員依頼に関する予算要求のまとめ — 学部ごとの外部評価委員の数・分野
- ・ 外部評価依頼のための「研究活動報告書」の内容の検討
- ・ 個人データの修正・追加の依頼について

2007 年 12 月 6 日（木）第 5 回委員会

- ・ 外部評価へ向けての課題の検討
 1. 外部評価委員の人数・予算についての確認 — 各学科 2 名
 2. 認証評価における「選択的評価事項 A 研究活動の状況」の内容の確認
 3. 外部評価委員の選定・依頼 — ①選定の基準，②選定の主体，③選定の時期
 4. 評価の対象，評価の手順
 5. 外部評価報告書の作成時期
- ・ 個人データの収集について
- ・ 年次報告書の編集方針について

自己評価委員会名簿（平成 19 年度）

委員長	大田直史（福祉社会学部）
副委員長	青木博史（文学部）
副委員長	松村和樹（農学研究科）
委員	浅井学（文学部）
	川瀬光義（福祉社会学部）
	東あかね（人間環境学部）
	佐藤雅彦（人間環境学部）
	加藤章夫（農学研究科）
	塩見郁夫（庶務課）
	山口清史（会計課）
	田中力（学務課）
	伊藤務（図書館）

編集後記

『京都府立大学自己点検・評価年次報告書 2007』を発行する運びとなりました。皆さま方には多大なご協力を賜り、誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。

第一部では、差し迫ってきた第三者評価に向けた取り組みについてまず報告し、次いで外部評価に向けた取り組みについて報告しています。本学は2009年度に第三者評価を受けることが決定しており、評価活動の重要性についてさらに認識を深める必要があります。

第二部では、まず2008年度から実施される新教養教育の実施について紹介しています。経緯とねらいを理解したうえで、実際の運用の中で課題を整理しながら、よりよいものを作り上げていく必要があるでしょう。次いで、今年度実施された、学生による授業評価、全学FD研究集会、ならびに卒業生および就職先への調査、それぞれの結果について報告しています。中でも卒業生および就職先への調査は初めての取り組みとして注目すべきもので、60ページにもわたる調査結果は、今後のあり方について考えるべき材料を多く示しています。最後に、学生生活実態調査の結果について報告しています。2年前の調査結果をふまえて実施されたもので、詳しい調査結果はホームページ上にも公開されています。あわせて参照のうえ有効に活用していく必要があるでしょう。

末尾には資料編として、教育・研究・地域貢献・大学運営という4つの観点から、本学における今年度の取り組みについて簡潔に報告しています。

大学を取り巻く状況は大きく変わってきていますが、質の高い教育・研究が行われる大学作りを目指すという目標は同じです。今後とも充実した内容の報告書を作成していきたいと思っておりますので、色々ご意見を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。